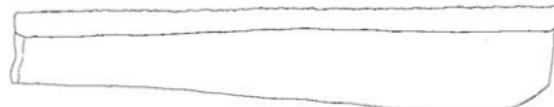


K252



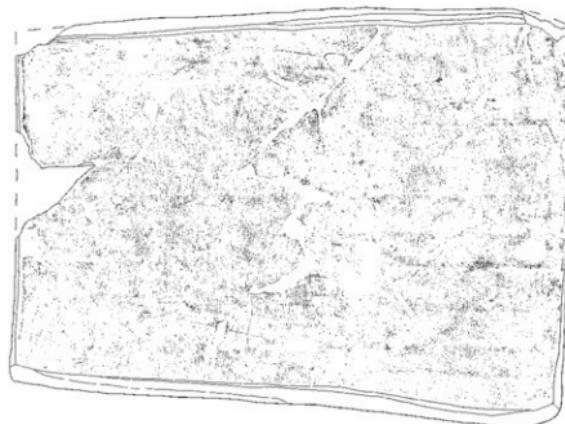
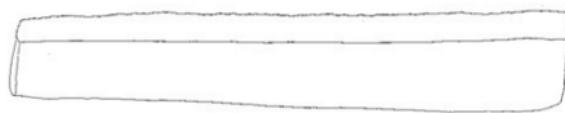
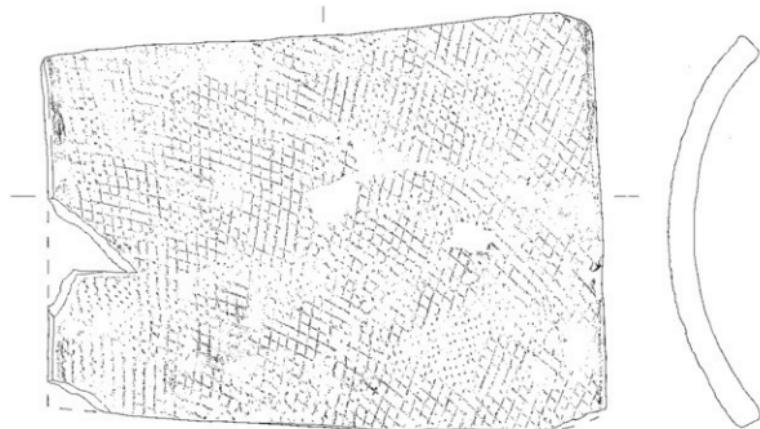
第222図 平瓦 2 A類(9)



K253

第223図 平瓦 2 A類(10)

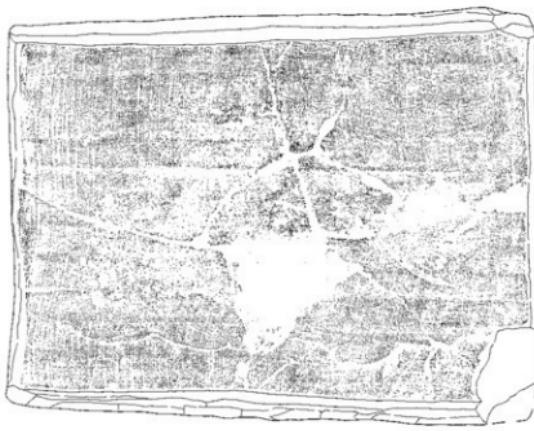
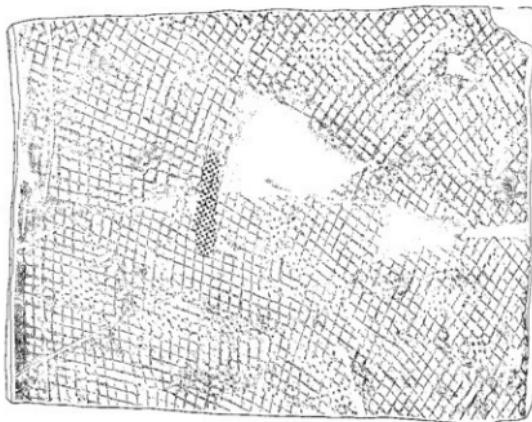
0 10cm



K254

第224図 平瓦 2 A類(II)

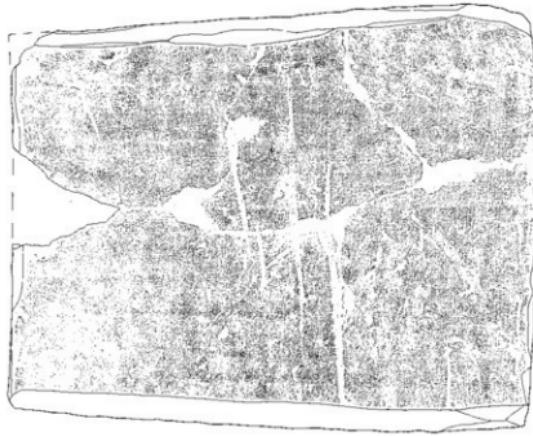
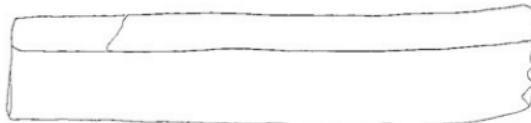
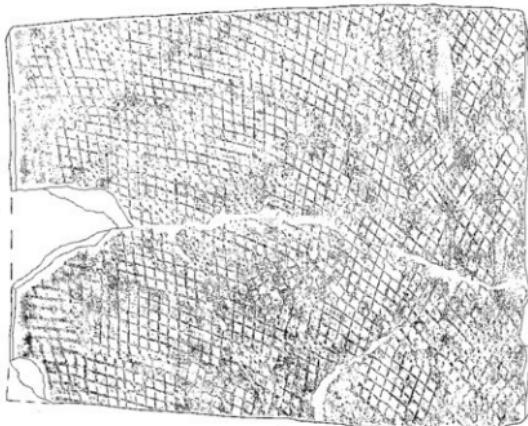
0 10cm



K255

0 10cm

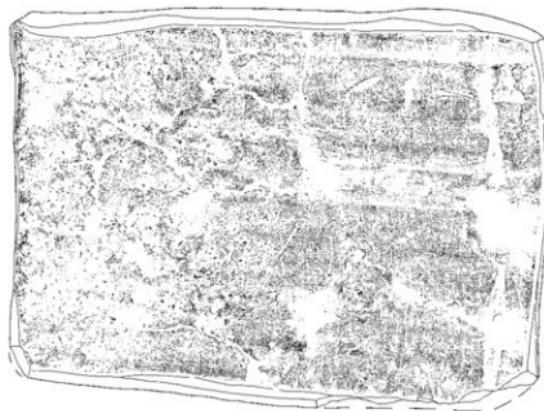
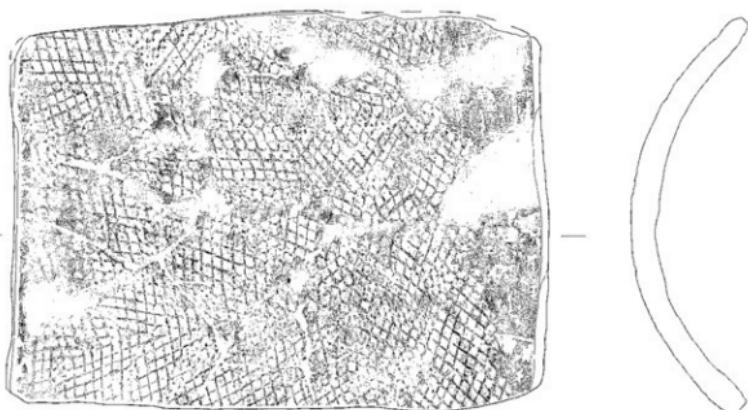
第225図 平瓦 2 A類(12)



K256

0 10cm

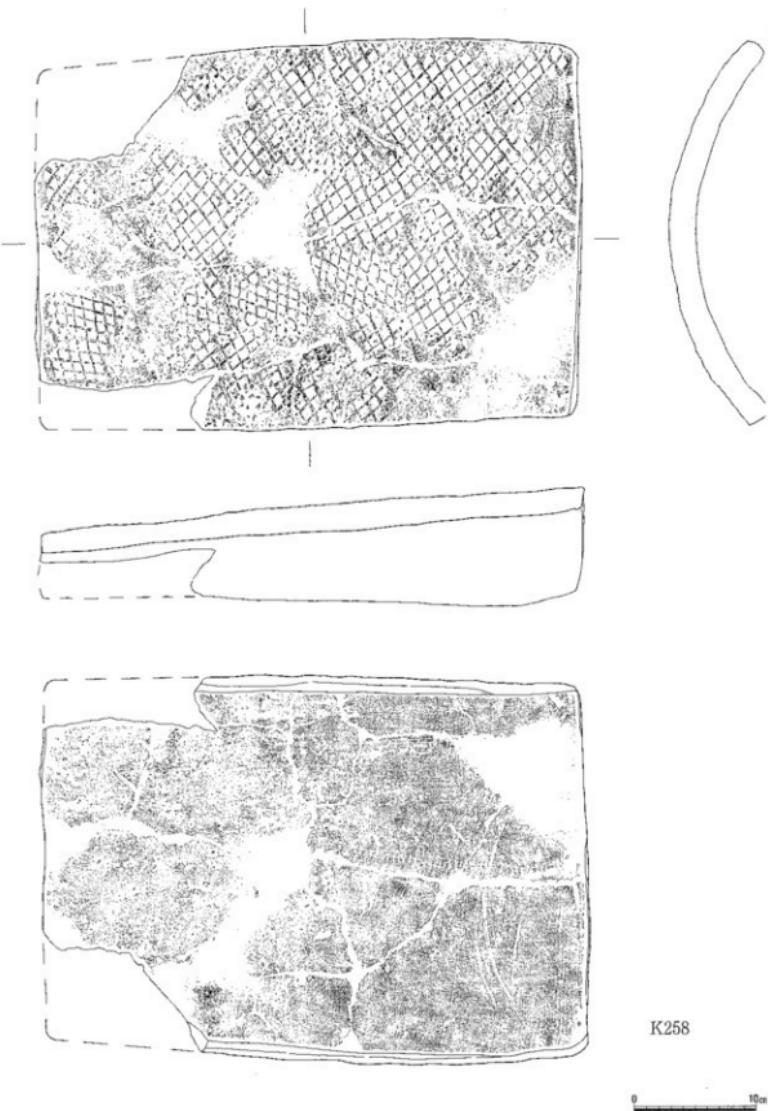
第226図 平瓦 2 A類(13)



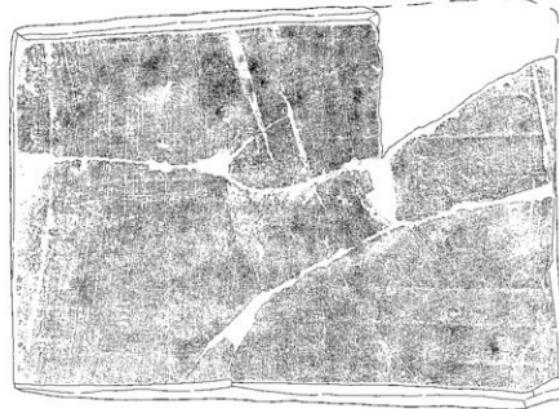
K257

第227図 平瓦 2 A類(4)

0 10cm



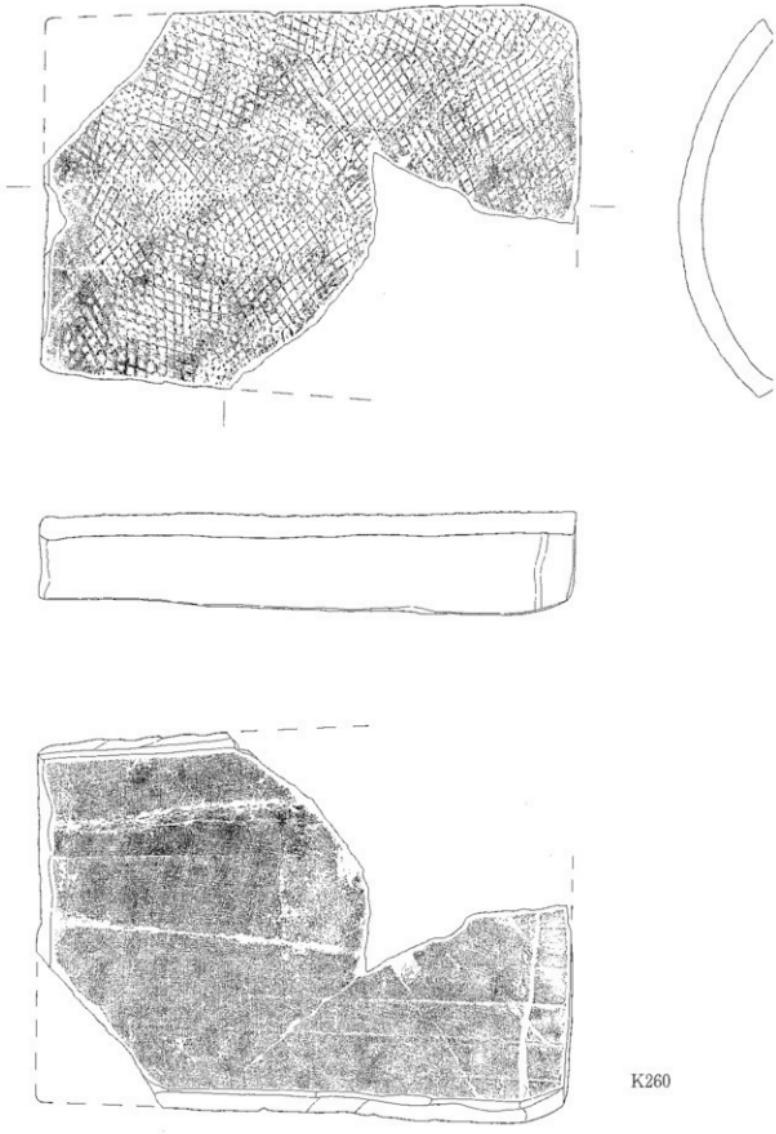
第228図 平瓦 2 A類(15)



K259

0 10cm

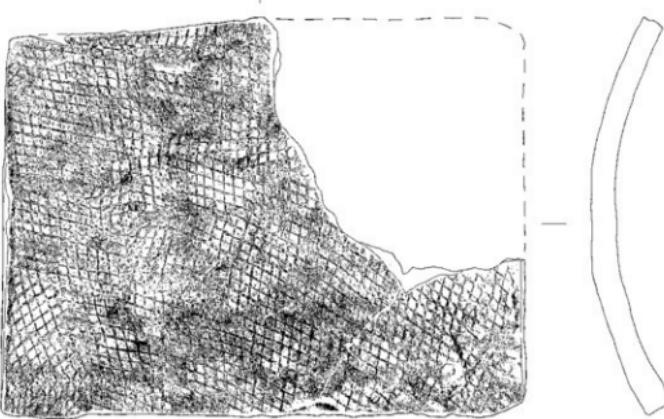
第229図 平瓦 2 A類16



第230図 平瓦 2 A類(1)

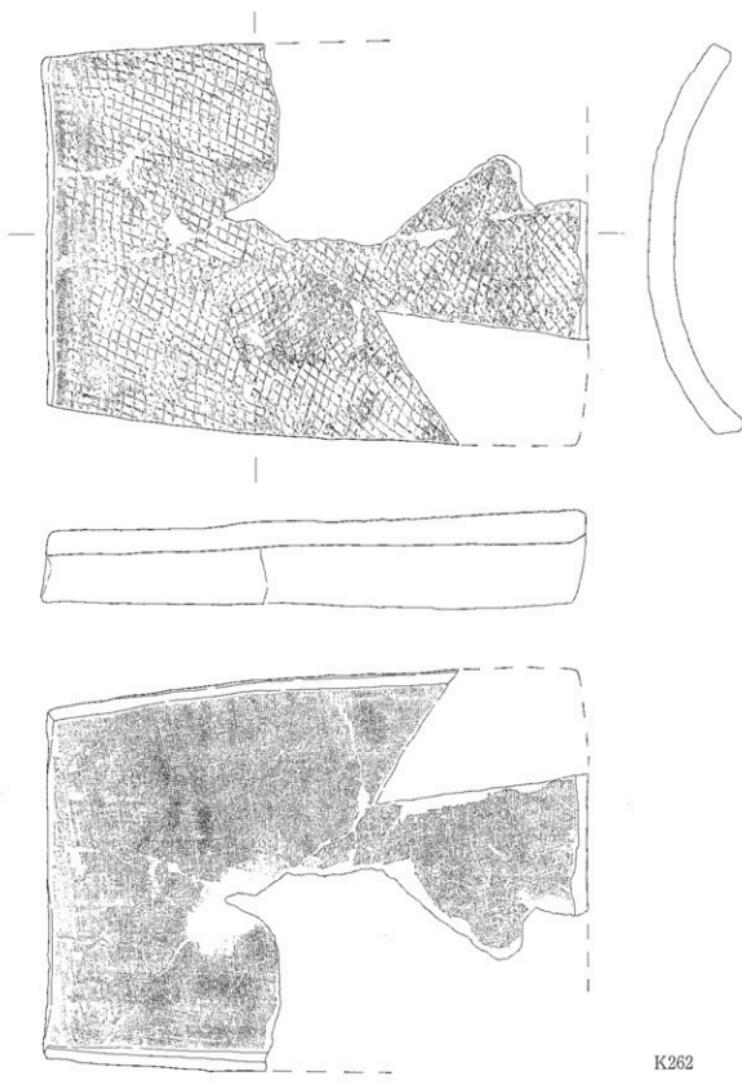
K260

0 10cm



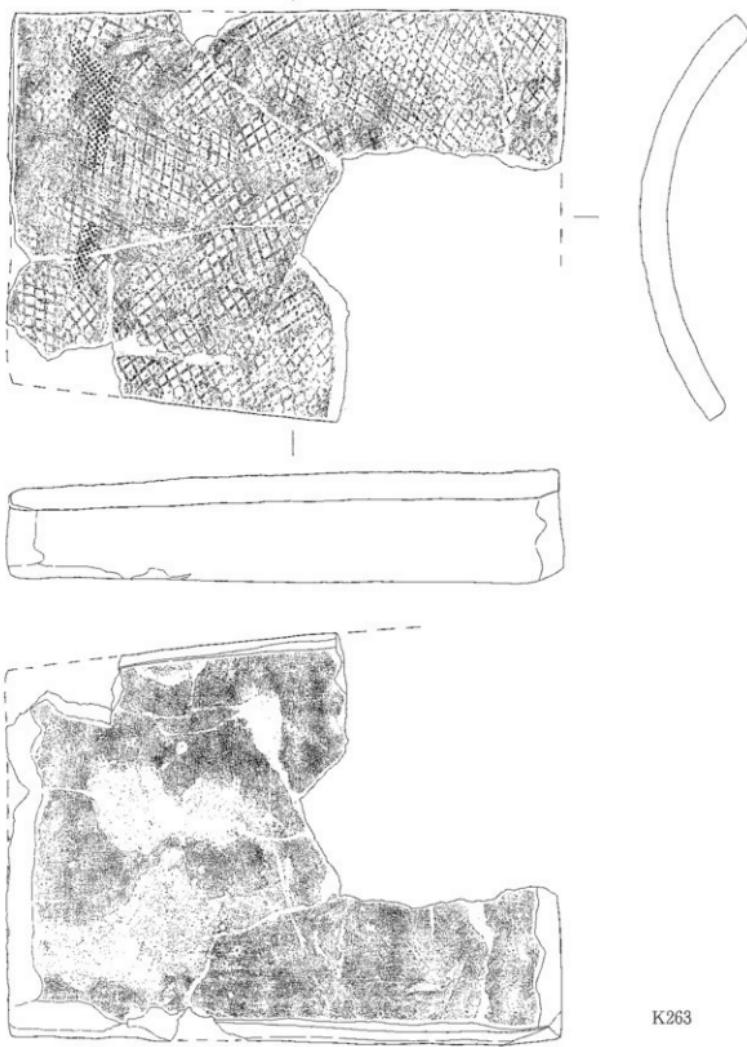
0 10cm

第231図 平瓦 2 A類

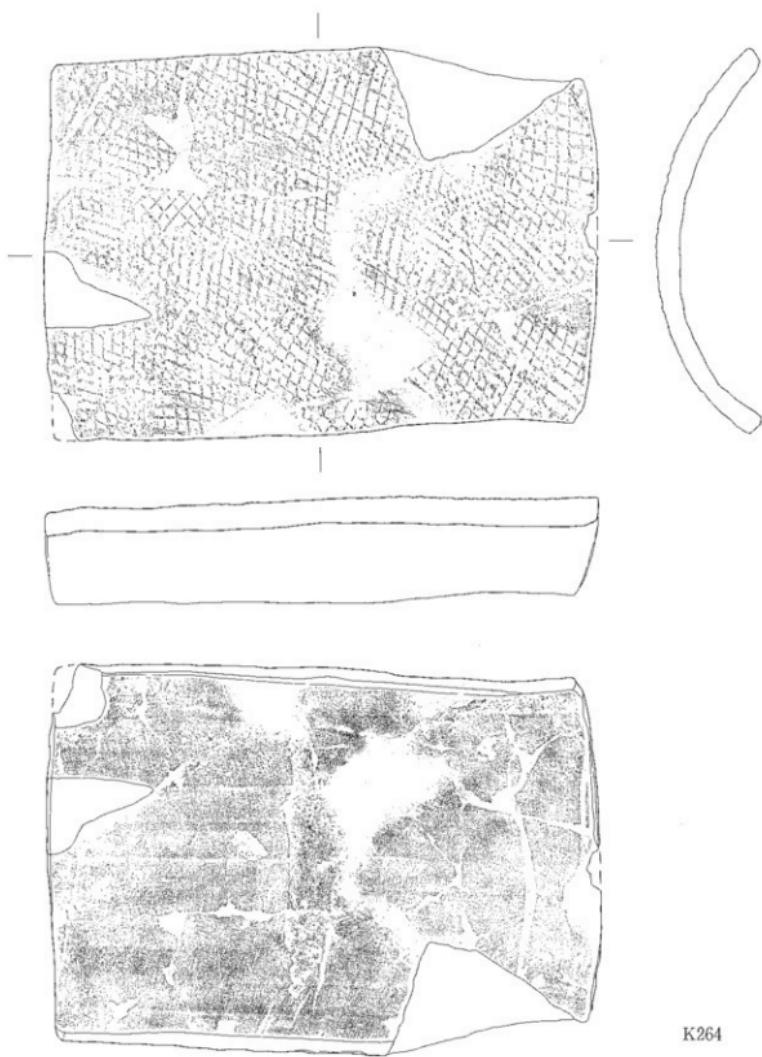


第232図 平瓦 2 A類

— 228 —



第233図 平瓦 2 A類⑩



第234図 平瓦 2 A類(21)

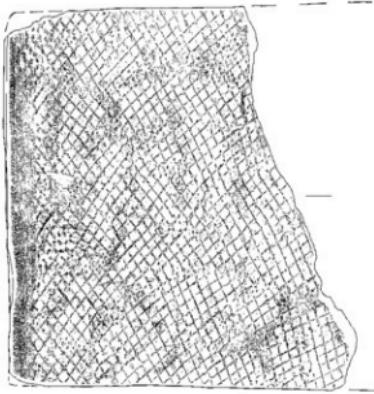
0 10cm



K265

第235図 平瓦 2 A類(22)

0 10cm



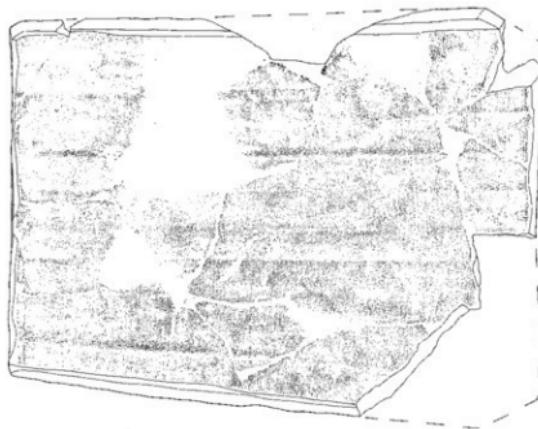
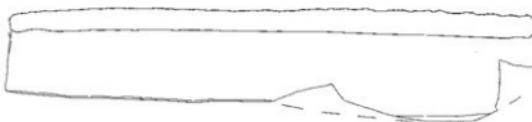
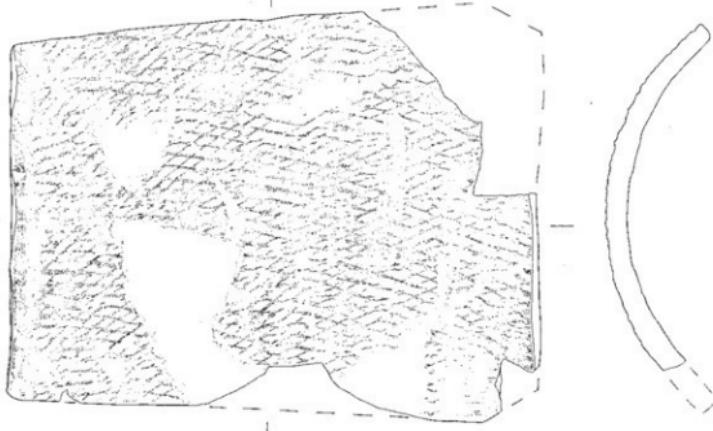
K266

0 10cm

第236図 平瓦 2 A類(23)

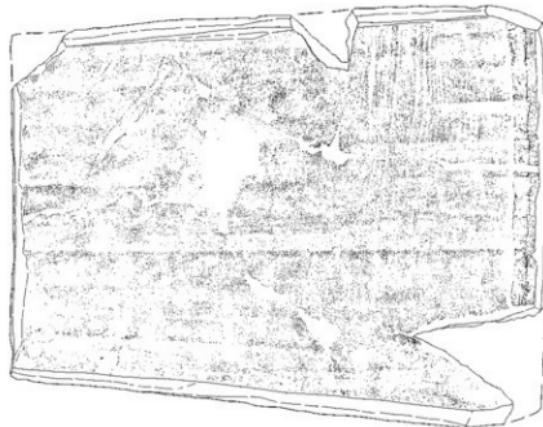
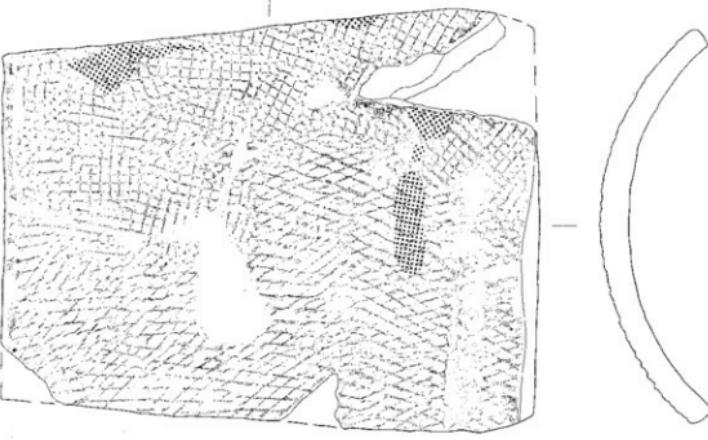


第237図 平瓦 2 B類(1)



K268

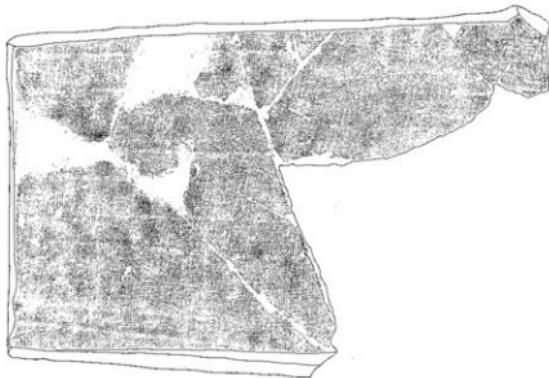
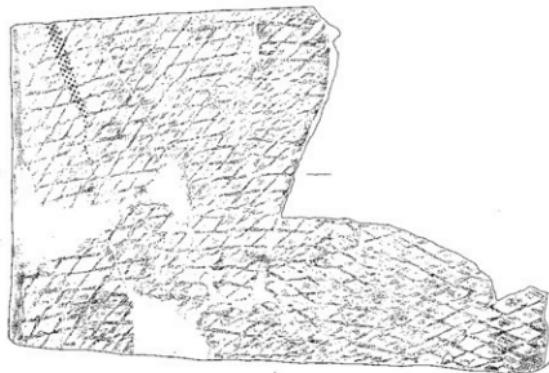
第238図 平瓦 2 B類(2)



K269

第239図 平瓦 2 C類

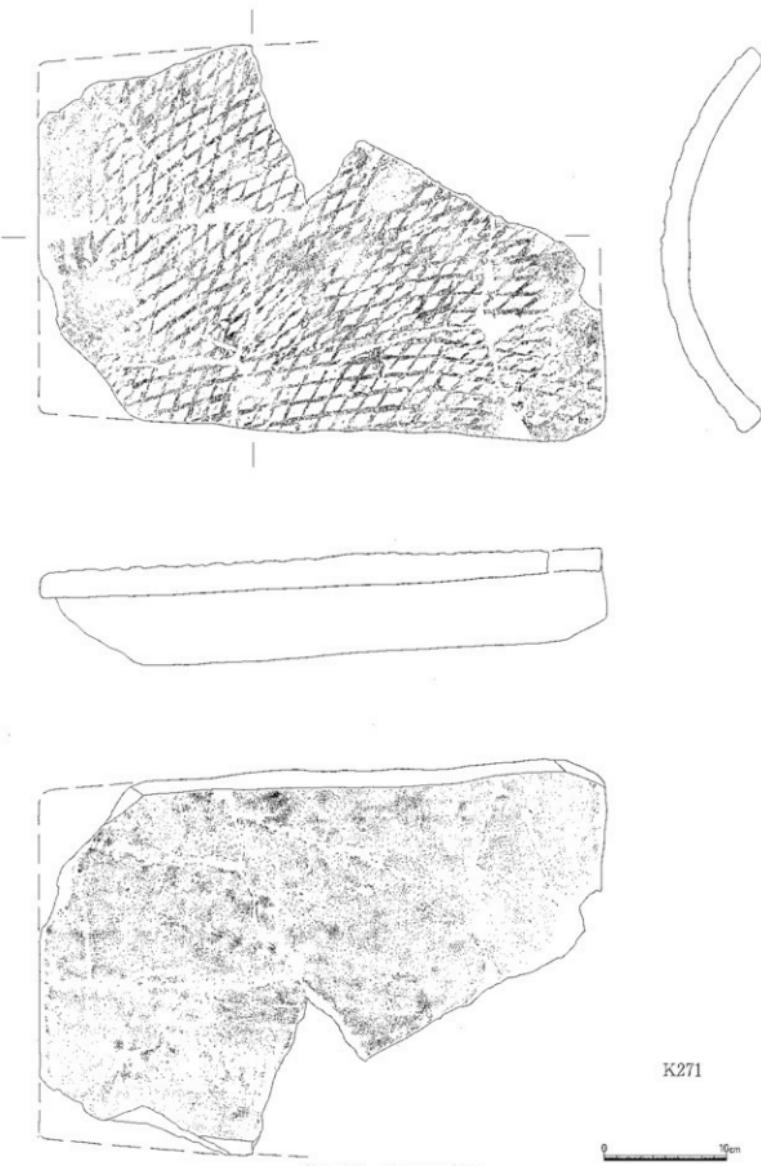
0 10cm



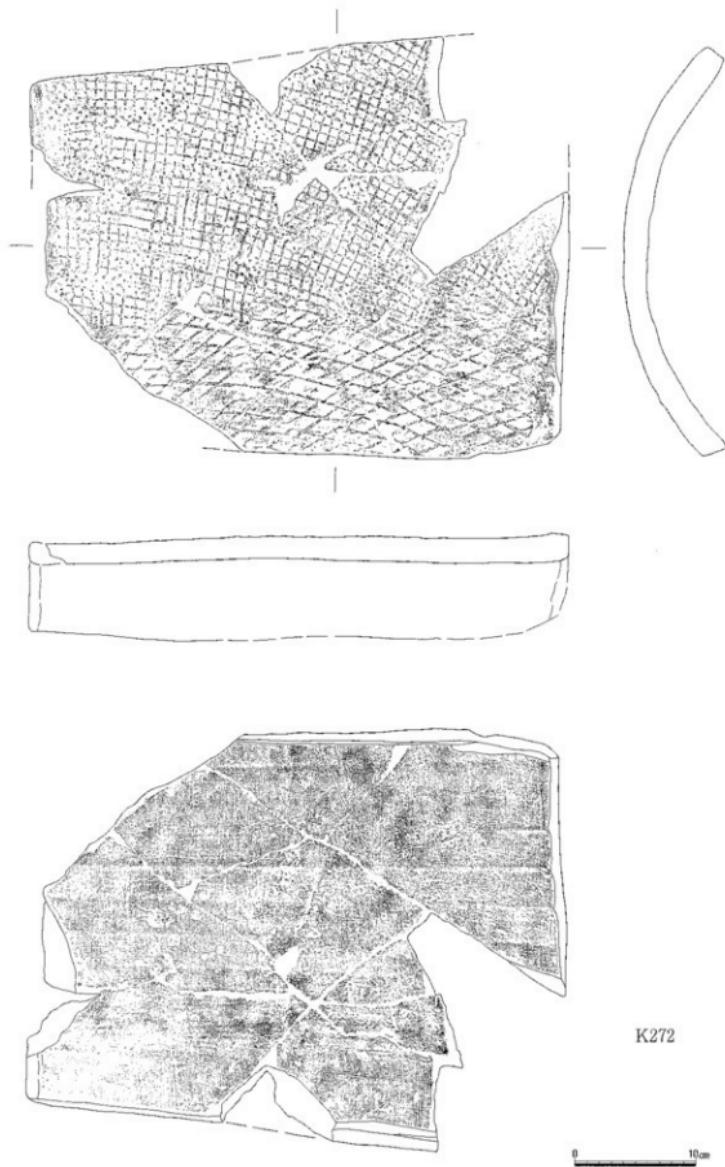
K270

第240図 平瓦 2 D類(1)

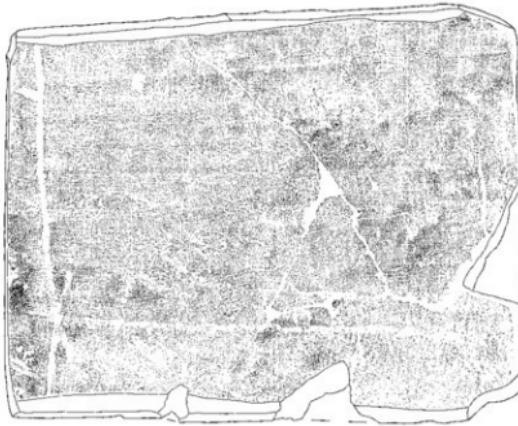
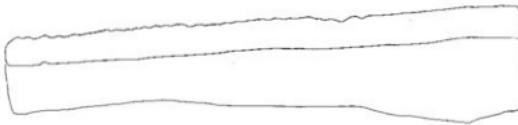
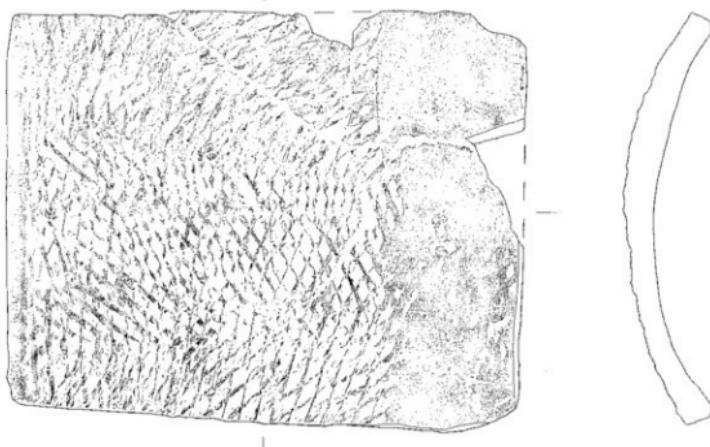




第241図 平瓦 2 D類(2)



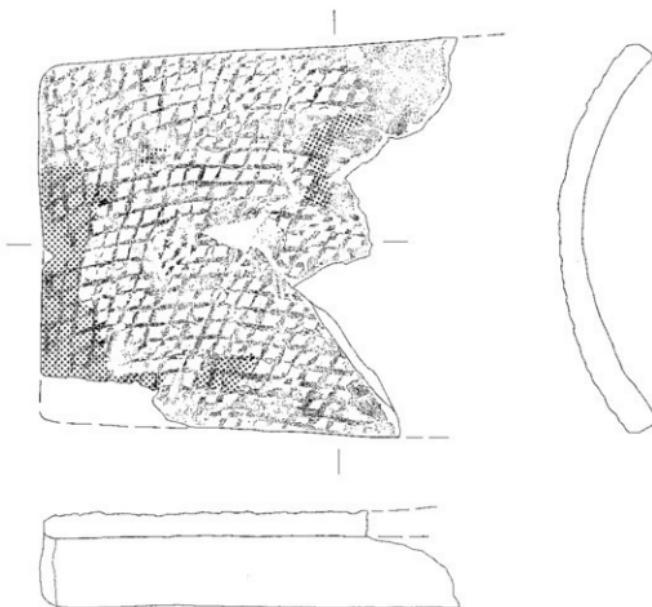
第242図 平瓦 2 E類



K273

第243図 平瓦 2 F類(1)

0 10cm



K274



第244図 平瓦 2 F類(2)

0 10cm

平瓦 3類 (第245図) 菱形叩き目(K275)。模骨痕跡のある平瓦で、叩き目は菱形と言うよりは長辺1cmほどの形の揃わない平行四辺形に近い。また、幅が狭いのも特徴である。凸面の面取りは広端部の一部と1側縁に施されている。凹面には布目痕跡や幅2~4.5cmの模骨痕跡がみられ、面取りは広端部側に幅1cmで浅く施されている。側面には分割破面を残さない。全長46.2cm広端部幅29.2cm狭端部幅23.2cm厚さ1.8~2.5cm重さ5.2kgである。

平瓦 4類 (第246図) 縦菱形叩き目+ナデ消し(K276)。模骨痕跡のある平瓦で、凸面には1辺1.4cmの縦位の菱形叩き目を施し、部分的にナデ消している。広端部の両角を斜めに落としている。凸面には面取りを施さない。凹面には粗い布目痕跡や糸切り痕跡・幅4~5cmの模骨痕跡が観察され、側縁部に幅数mmの面取りが行われるが、広端部や側縁部には行われない。側面には分割截面の凹部が残る。全長42.5cm広端部幅32.8cm狭端部復原幅25cm厚さ2.5~3cmで、狭端部側で一部欠損がみられるが重さ6.5kgである。

平瓦 5類 (第247~249図) 縦菱形叩き目(K277~K289)。模骨痕跡のある平瓦で、凸面には縦位の菱形叩き目を施し、四周の面取りは行わない。凹面には布目痕跡や糸切り痕跡がみられ、模骨痕跡は幅1.8~4cmと幅があるが、2.5cm前後のものが多い。凹面にも面取りは行われない。側面には分割破面を残さない。質感は平瓦4類と同様である。全長38~39cm広端部幅33.5~34cm狭端部幅25.5~27cm厚さ1.2~2.2cmである。重さはK277で3.75kgである。

平瓦 6類 (第250図) 叩き目ナデ消し(K280)。模骨痕跡のある平瓦で、凸面は全面にわたって叩き目痕跡がナデ消されている。凹面には布目痕跡や幅1.2~2.5cmの模骨痕跡がみられ、面取りは凹面の側縁部にのみ数mmの幅で施される。側面には分割破面を残さない。質感は平瓦4類・5類と同様である。全長40cm広端部幅33.6cm狭端部幅26cm厚さ2~3.5cm重さ6.2kgである。

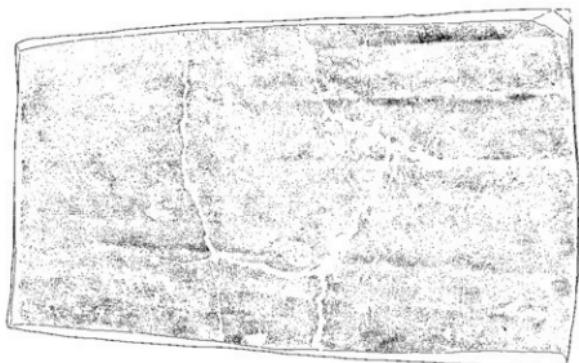
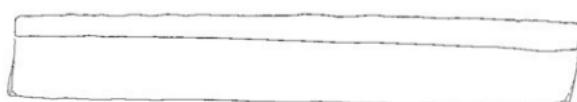
平瓦 7類 (第251図) 平行叩き目(K281)。模骨痕跡のある平瓦で、長さ5cm以上幅6mmと密の平行線に対し、まばらに斜め線を引いた叩き目痕跡を凸面に持つ。凹面には幅2~3cmの模骨痕跡や布目痕跡が残る。端面の面取りは行われず、側面には分割破面を残さない。広端部復原幅33cm厚さ1.8cmである。

平瓦 8類 (第252図) 長方形叩き目(K282)。模骨痕跡のある平瓦で、凸面には0.5×1~1.5cmの長方形叩き目を施すが、1辺5~6mmの格子目叩きの2種を施す個体もある。凹面は2~2.8cmの模骨痕跡や布目痕跡がある。側面は凹面に対し直角のものと鋭角のものがある。小片のため全形の分かる資料がなく、厚さは2~2.4cmである。

平瓦 9類 (第252図) 格子叩き目(K283)。模骨痕跡のある平瓦で、凸面には刻線が太く1.4×1.6cmで縦位の格子目叩きを施し側縁の面取りを行う。凹面には布目痕跡や幅2~2.5cmの模骨痕跡があり、広端面と側縁の面取りは行わない。側面の分割破面は残さない。厚さは2.5cmである。K283は長さ14cm幅13cmの広端部側の小片であるが、須恵質で凹面に自然軸が付着している。

平瓦 10類 (第253~260図) 繩叩き目(K284~291)。模骨痕跡のみられない平瓦で、凸面の叩き目には縦位(10A)・縦曲位(10B)・縦横位(10C)がある。繩目も細繩・荒繩などもみられるが、全形が不明で細分にはいたっていない。

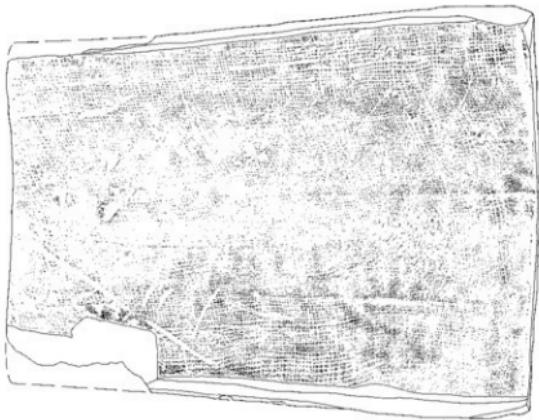
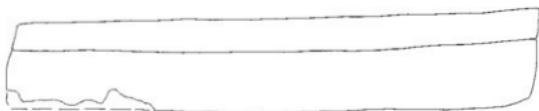
10A類(K284~K289)は全長33.5~37.5cm、広端部復原幅25.5~28cm、狭端部復原幅22.5~25.2cm厚さ2~2.5cmである。繩叩き目は広端部から狭端部まで縦位のものと、そのうち広端部付近に斜位の叩きを追加するものとがある。凹面は布目痕跡をナデ消すものと未調整のものとがあり、四周の面取



K275

第245図 平瓦 3類

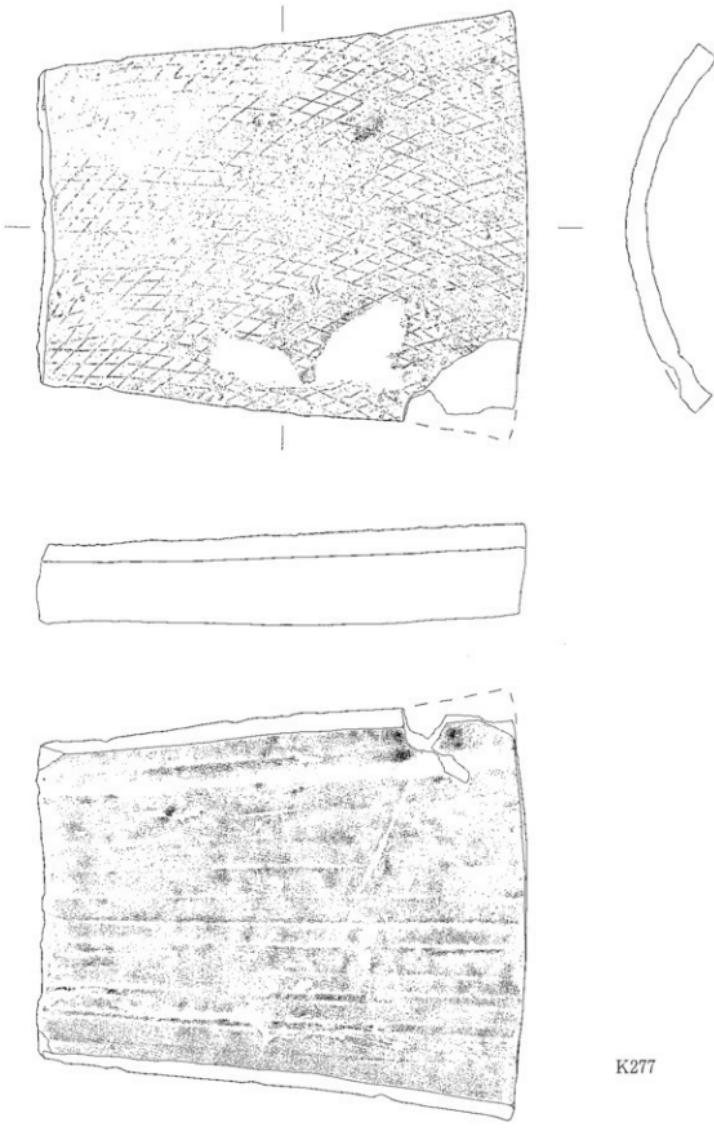
0 10cm



K276

第246図 平瓦 4種

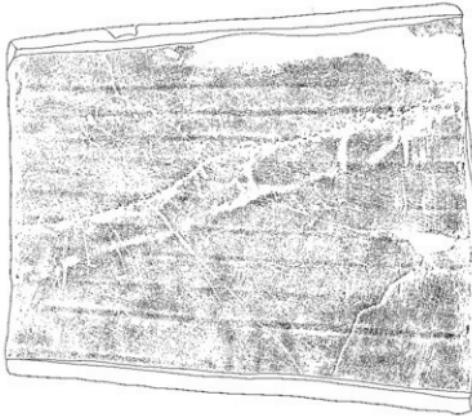
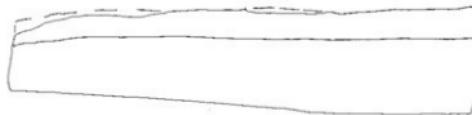
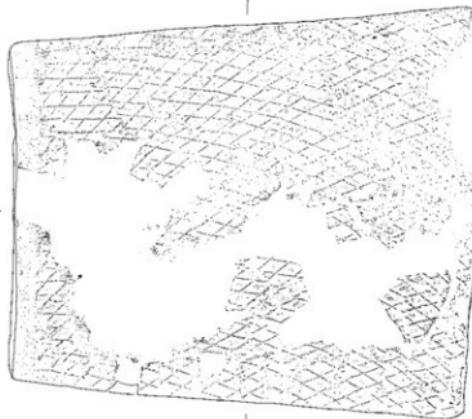
0 10mm



第247図 平瓦 5種(1)

K277

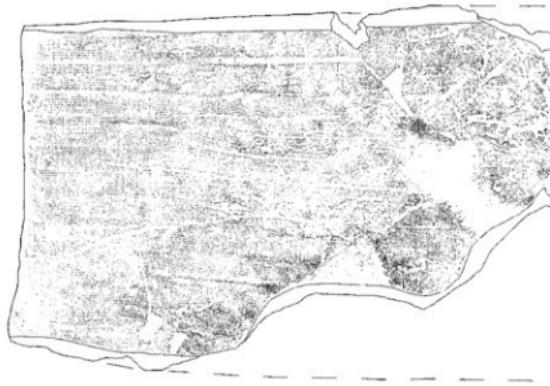
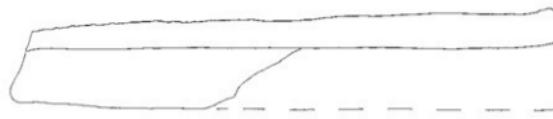
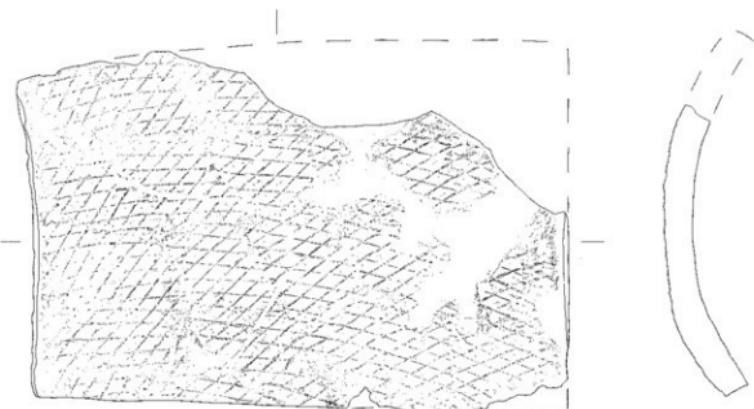
0 10cm



K278

第248図 平瓦 5類(2)

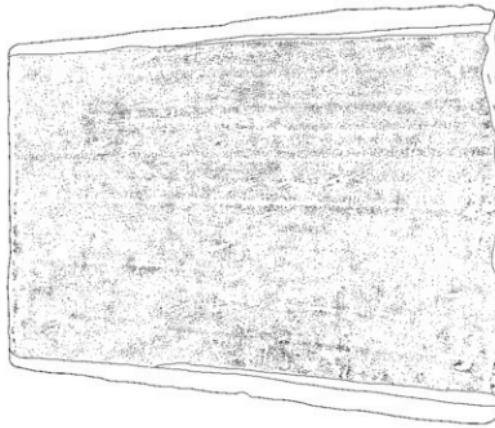
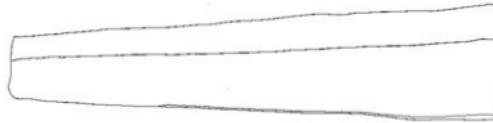
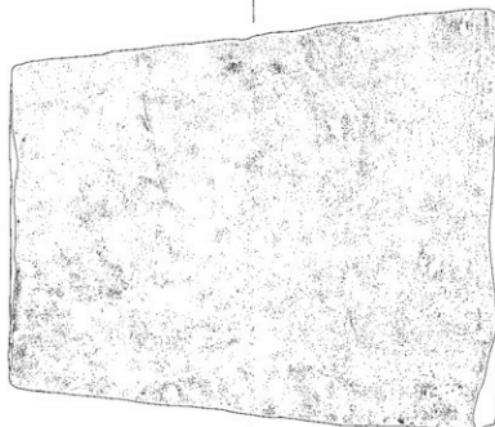
0 10cm



K279

第249図 平瓦 5類(3)

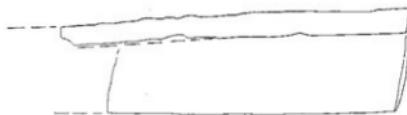
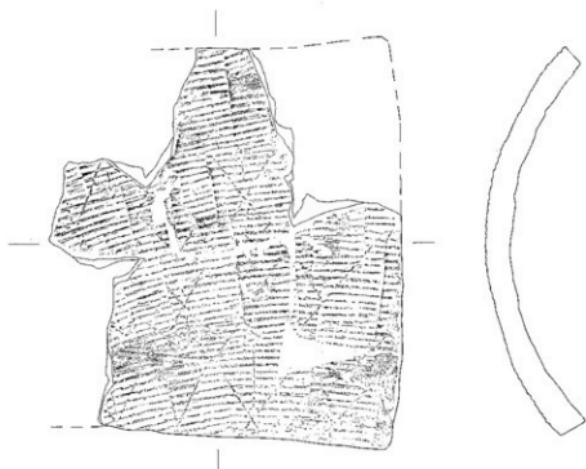
0 10mm



K280

第250図 平瓦 6類

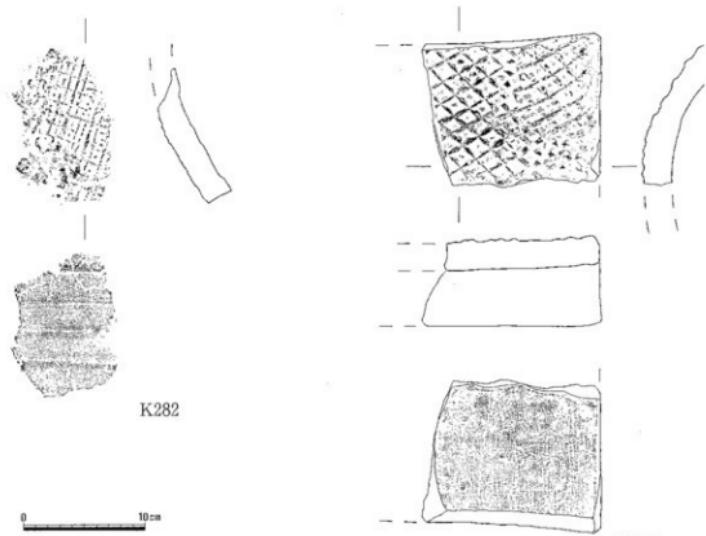
0 10cm



K281

第261図 平瓦 7類

0 10cm



第252図 平瓦 8類・9類

K283

りは行うものと行わないものがある。広端面・狭端面はいずれも凹面に対し鈍角であるが、側面については直角のものと鋭角のものとがある。K284は広端部を一部欠くが重さ3.4kg、K289では4kgである。

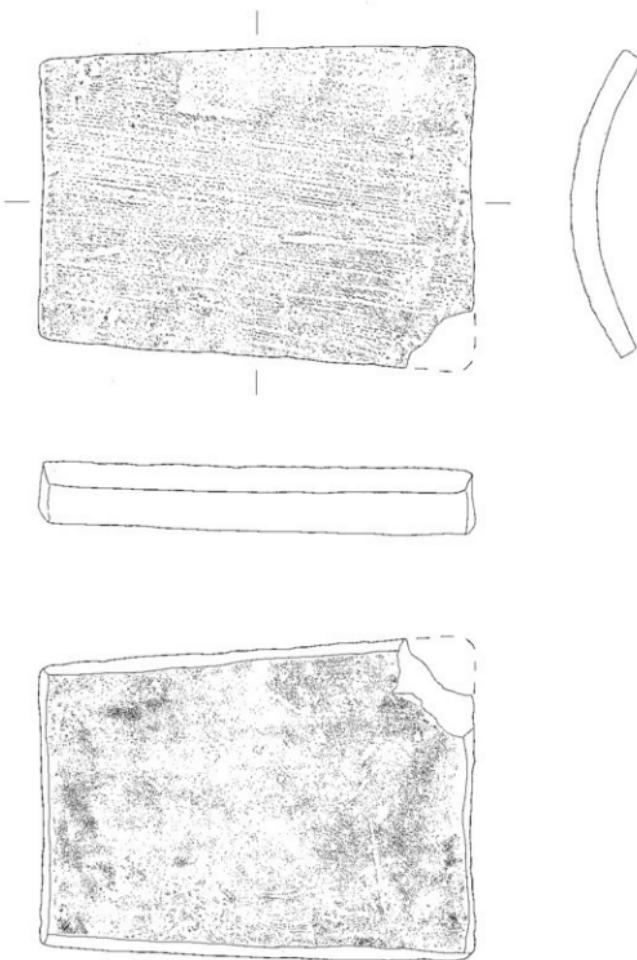
10B類(K290)の叩き目は、中央部は縦位の叩き目であるが左右へはそれぞれ湾曲している。凹面は未調整で側縁のみ面取りを行う。側面は凹面に対し鋭角である。全長34.2cm広端部復原幅24.5cm狭端部幅22.6cm厚さ2.4~2.8cm、広端部を一部欠くが重さ3.7kgである。

10C類(K291)は横位の叩きの後縦位を施すが、部分的に横位叩き目が残っている。凹面はほぼ全面にわたり布目痕跡をナデ消し、端面の面取りは行わない。凹面との角度は広端面と1側面が直角、狭端面と他側面が鈍角である。全長34.4cm広端部幅27cm狭端部幅24.5cm厚さ2~2.5cm重さ3.8kgである。

平瓦11類(第261図) 平行叩き目(K292)。模骨痕跡のみられない平瓦で、凸面には1cm間隔で平行叩き目を施す。凹面には布目痕跡が残るが部分的にナデ消している。厚さは2.5~3.8cmである。

平瓦12類(第261図) 長方形叩き目(K293)。模骨痕跡のみられない平瓦で、長辺4.5cm短辺0.5~1.8cmの長方形叩き目を施す。叩きの間隔は4cmである。凹面には布目痕跡が残る。厚さ2cmである。やや軟質の瓦質で、軒平瓦15類に対応する。

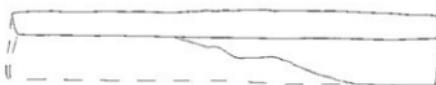
平瓦13類(第262図) 凸菱形叩き目(K294・K295)。模骨痕跡のみられない平瓦で、凸面には1辺1.5cmの横位に凸菱形叩き目を施す。凹面には粗い布目痕跡や糸切り痕跡が残り、面取りは広端部及び側縁部に行う。広端面には小さい単位のヘラ削りがあり、側面は凹面に対し鋭角であるが凹面側



K284

第253図 平瓦10A類(1)

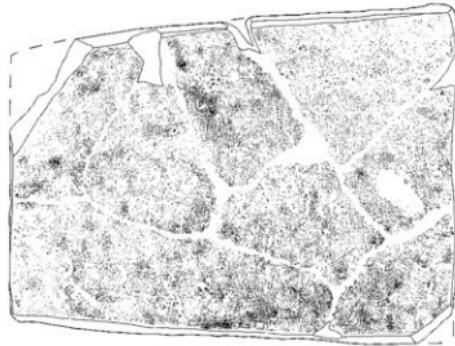
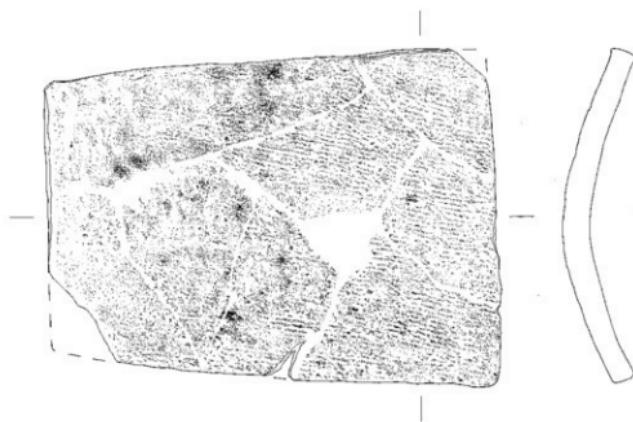




K285

第254図 平瓦10A類(2)

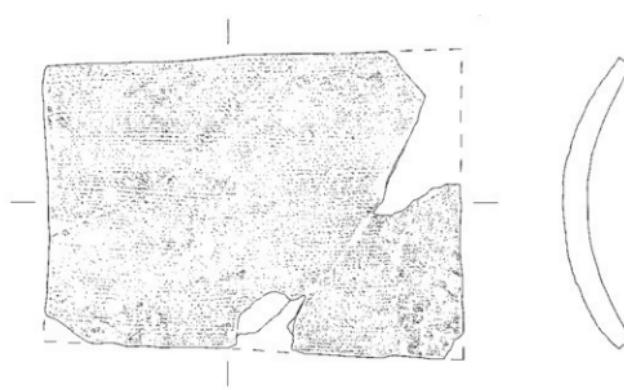
0 10cm



K286

第255図 平瓦10A類(3)

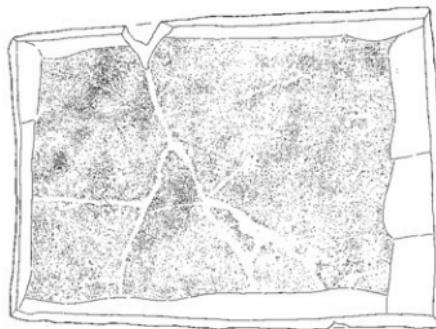
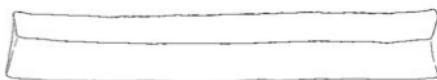
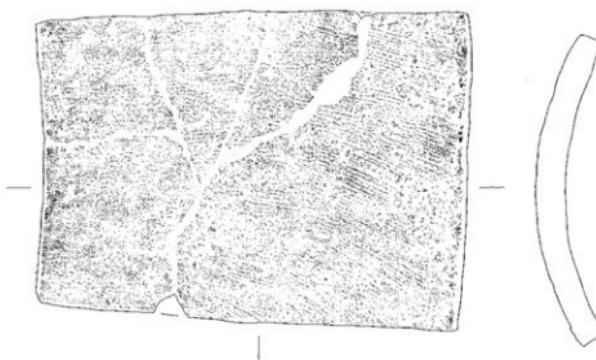
0 10cm



K287

0 10cm

第256図 平瓦10A類(4)



K288

第257図 平瓦10A類(5)

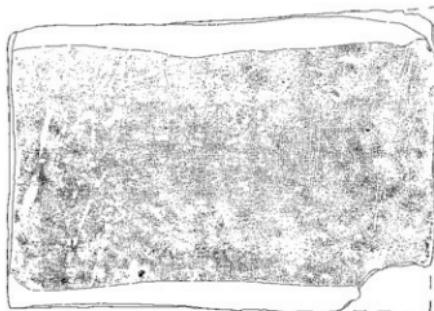
0 10cm



K289

第258図 平瓦10A類(6)

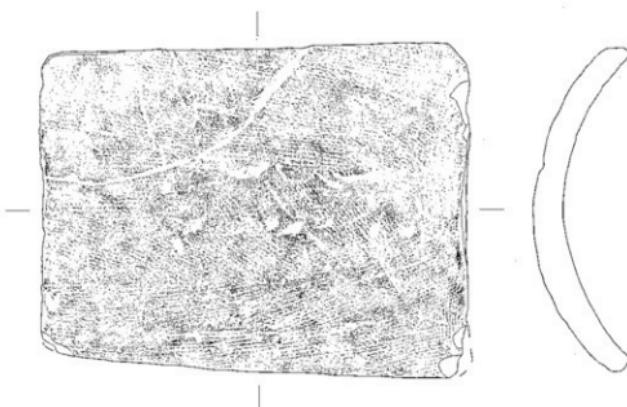
0 10cm



K290

0 10cm

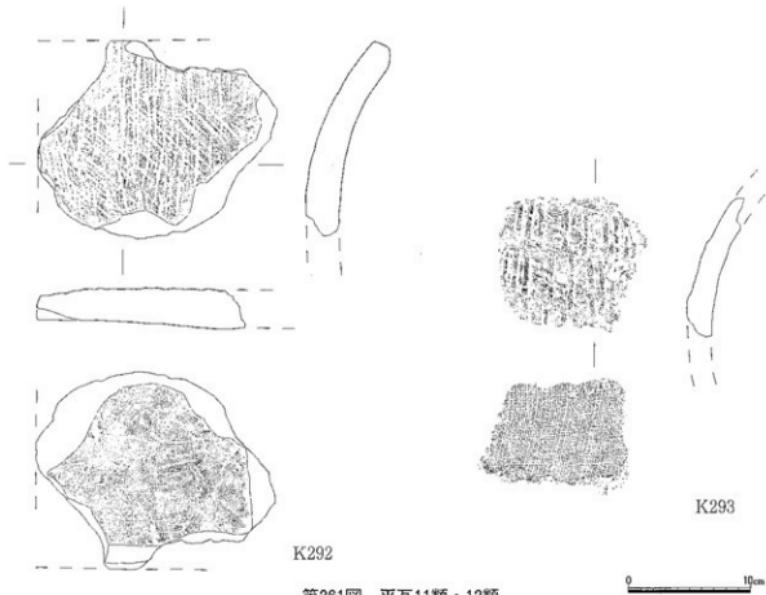
第259図 平瓦10B類



K291

第260図 平瓦10C類





第261図 平瓦11類・12類

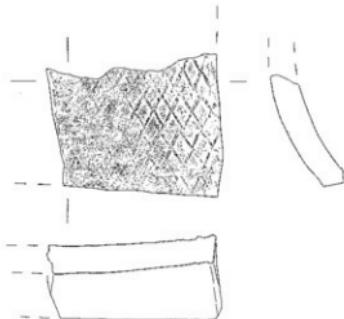
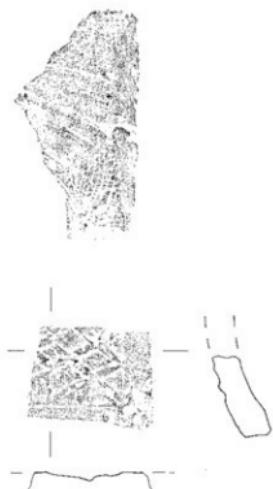
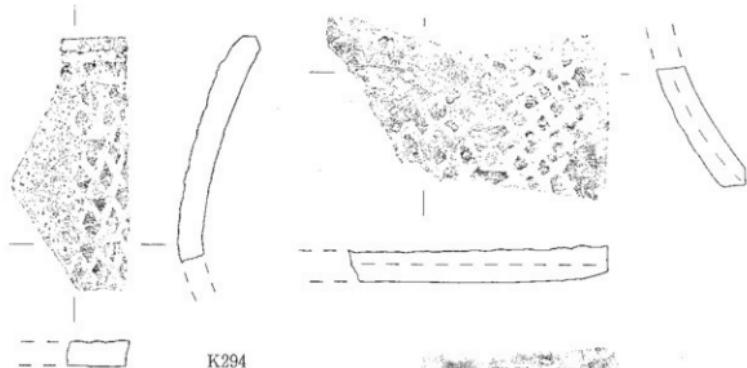
0 10cm

からの面取りのため側面中央に稜が走る。厚さ2~2.6cmである。硬質である。K295は広端部幅30.3cm高さ7.2cm厚さ2.3~2.6cmである⁽¹⁷⁾。

平瓦14類（第262図） 縞菱形叩き目（K296）。模骨痕跡のみられない平瓦で、凸面には縦位に1辺2.5cmの菱形叩き目を施すが、横方向に幅2cm以上叩きが施されない部分がある。離れ砂もみられる。凹面には布目痕跡や糸切り痕跡がみられ、側縁部に面取りを施す。側面は凹面に対し鋭角をなす。また、凸面の側縁部に布目痕跡がみられるため、成形台が側面に及んでいたと思われる。厚さ2.1cmである。側面部の残る長さ11cm幅8cmの小片である。叩き目は軒平瓦11類と共通する。

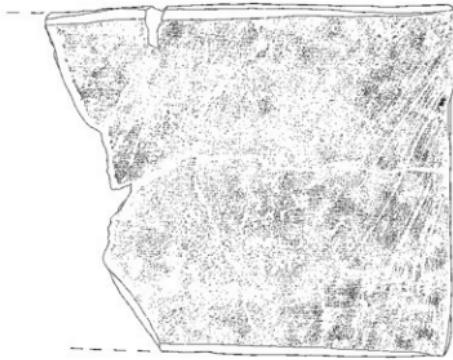
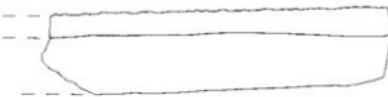
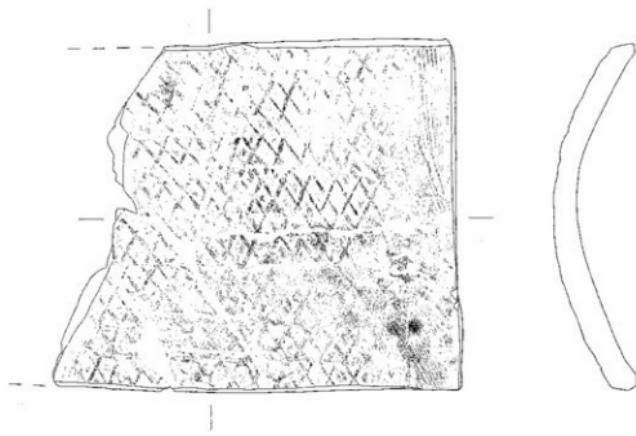
平瓦15類（第262図） 菱形叩き目（K297）。模骨痕跡のみられない平瓦で、凸面には1辺1.5cmの菱形叩き目を横位に施し、部分的にナデ消されている。叩きの間隔は3~4.5cmである。凹面には布目痕跡や糸切り痕跡が残り、側縁部の面取りを行う。側面は凹面に対し鋭角である。厚さ2~2.3cmである。硬質で、胎土に5mm以下の黒灰色粒を含む。広端部と側面部の残る長さ14cm幅13cmの破片である。

平瓦16類（第263図） 菱形叩き目（K298）。模骨痕跡のみられない平瓦で、凸面には1辺1.8cmで短軸のやや長い菱形叩き目を施し、叩きの重なりは4cm前後である。菱形の左角に高さ7mmと高さ1.3cmの三角形の傷が見られる。広端部側には糸切り痕跡が残る。凹面には布目痕跡や糸切り痕跡がみられ、側縁部を1cm未満の幅で面取りを行う。側面は凹面に対し鋭角である。広端部幅28.4cm厚さ2.2~2.5cmである。



0 10cm

第262図 平瓦13類～15類



K298

第263図 平瓦16類



平瓦17類（第264図） 菱形叩き目(K299)。模骨痕跡のみられない平瓦で、凸面には比較的形の整った1辺約2cmでやや短軸の長い横位の菱形叩き目を施し、叩きの重なりは4cm前後である。菱形の左角部に高さ0.8cmの三角形の傷を、別の右角に高さ1cmの三角形の傷を持つ部分がある。凹面には布目痕跡がみられ、面取りは側縁部を数mm幅で施す。側面は凹面に対し直角である。広端部幅28cm厚さ1.7~2.7cmである。

平瓦18類（第264図） 菱形叩き目(K300)。模骨痕跡のみられない平瓦で、凸面には1辺3cmの横位菱形叩き目を施す。菱形の左角に高さ1.2cmの三角形の傷を持つ部分がある。叩きの間隔は3~3.8cmである。凹面には細かい布目痕跡がみられ、残存部分には面取りは観察されない。側面は凹面に対しやや鋭角である。厚さ1.5~2.2cmである。広端部と側面部の残る長さ13cm幅21cmの破片である。

平瓦19類（第264図） 菱形叩き目(K301)。模骨痕跡のみられない平瓦で、凸面には1辺2cmで線の太い菱形叩き目を横位に施す。凹面にはやや粗い布目痕跡が残る。厚さ1.6cmで瓦質である。端面が残っていない長さ10cm幅8cmの小片である。

平瓦20類（第264図） 菱形叩き目(K302)。模骨痕跡のみられない平瓦で、凸面には1辺3.3cmでやや方形に近い横位の菱形叩き目を施す。刻線は2~3mmとやや細めである。叩きは4.7cmの間隔で施している。凹面には布目痕跡がみられる。厚さ1~1.5cmと薄手で、瓦質である。広端面ないし狭端面の残る長さ11cm幅12cmほどの破片である。

平瓦21類（第265図） 菱形叩き目(K303)。模骨痕跡のみられない瓦質の平瓦である。凸面には1辺3.5cmの横位の菱形叩き目を施す。刻線の太さは3~5mmである。叩きの間隔は4.7cmである。凹面にはやや細かい布目痕跡がみられる。厚さは1.7cmである。端面が残っていない長さ17cm幅13cmの破片である。胎土や質感は平瓦22類に近い。

平瓦22類（第265図） 山形叩き目(K304)。瓦質の平瓦で凸面には縱位の山形叩き目を施す。刻線は3~6mmと太めである。凹面には細かい布目痕跡がみられるが、模骨痕跡は観察されない。側面は凹面に対しほぼ直角である。厚さ1.2~1.6cmと薄目である。側面部が僅かに残る長さ9cm幅14cmほどの破片である。

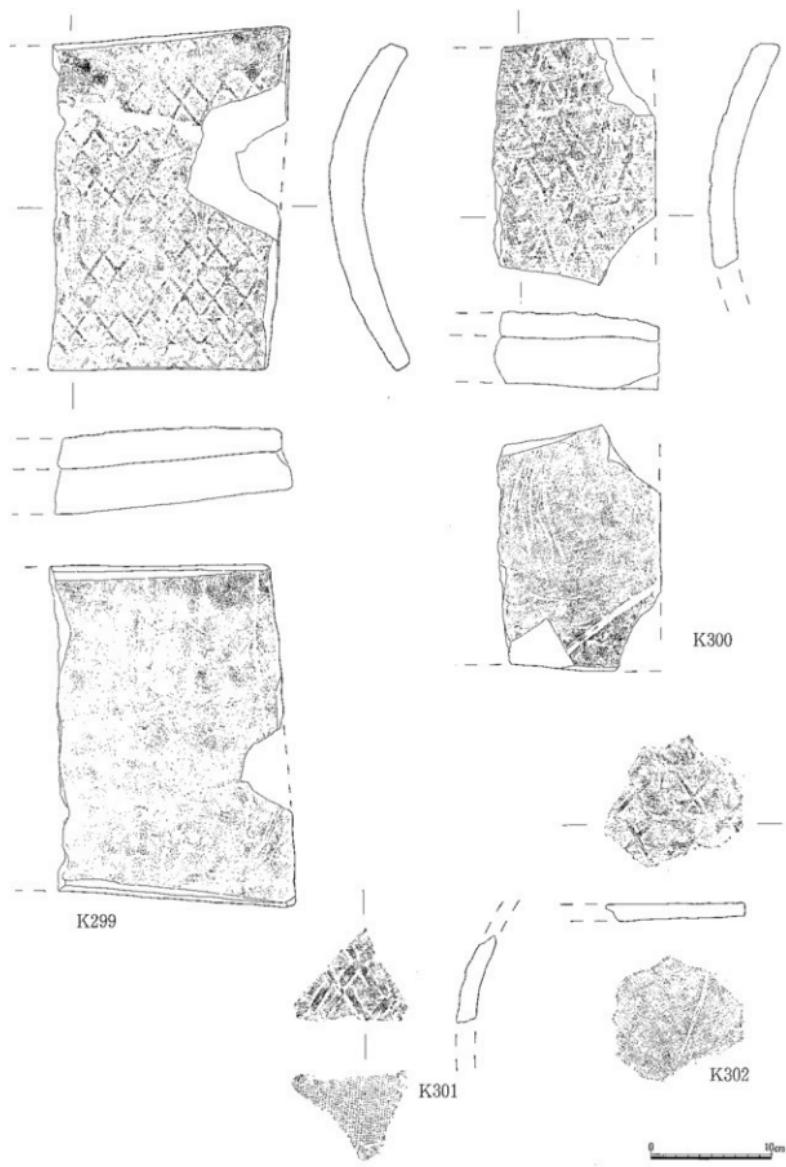
平瓦23類（第265図） 離れ砂(K305・K306)。完形品はないが、凸面には離れ砂が用いられた瓦質の平瓦である。凹面には布目痕跡のみられるものとそうでないものの両者がある。端部の面取りはみられず、側面は凹面に対し鋭角である。厚さは2.3cmである。K305は細かい布目痕跡がみられるが、側縁には及ばず、広端面には部分的に糸切り痕跡が残っている。

道具瓦ほか

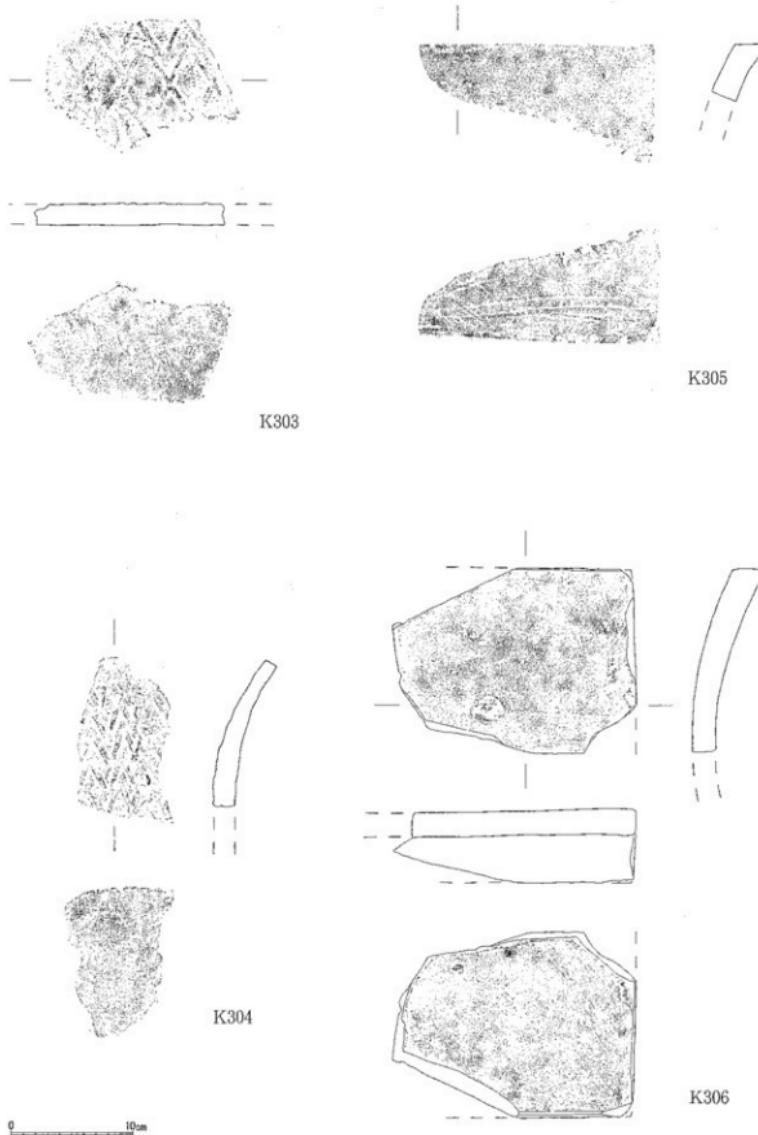
埠（第270図）

今回の調査では1点のみ出土している。1次調査で薄手の埠が1点出土しているので合計2点となる。

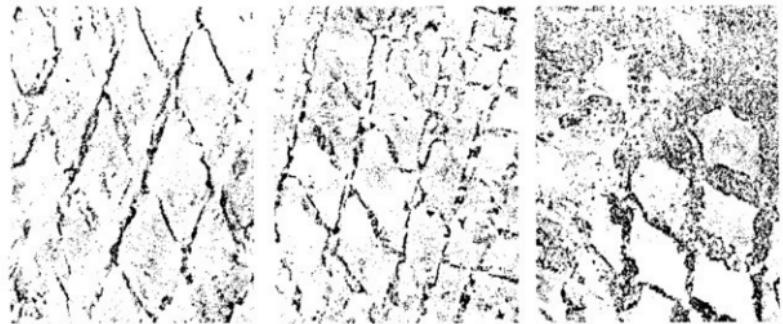
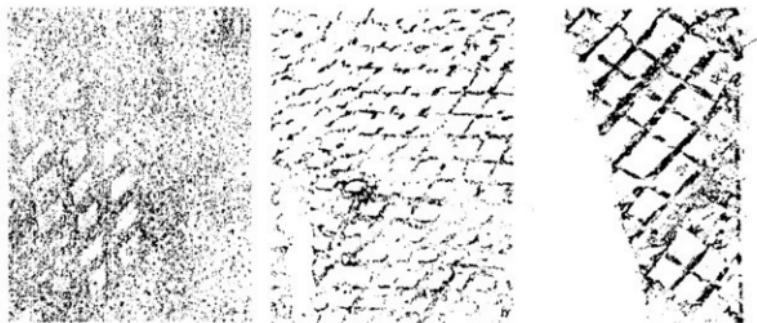
K307は1次調査で西塔瓦溜まりから出土した角を持つ小片で、残存長11cm幅8cm厚さ2.3cmである。表面と残存長辺はていねいにナデ仕上げされているが、他辺と裏面は調整が雑である。K308は



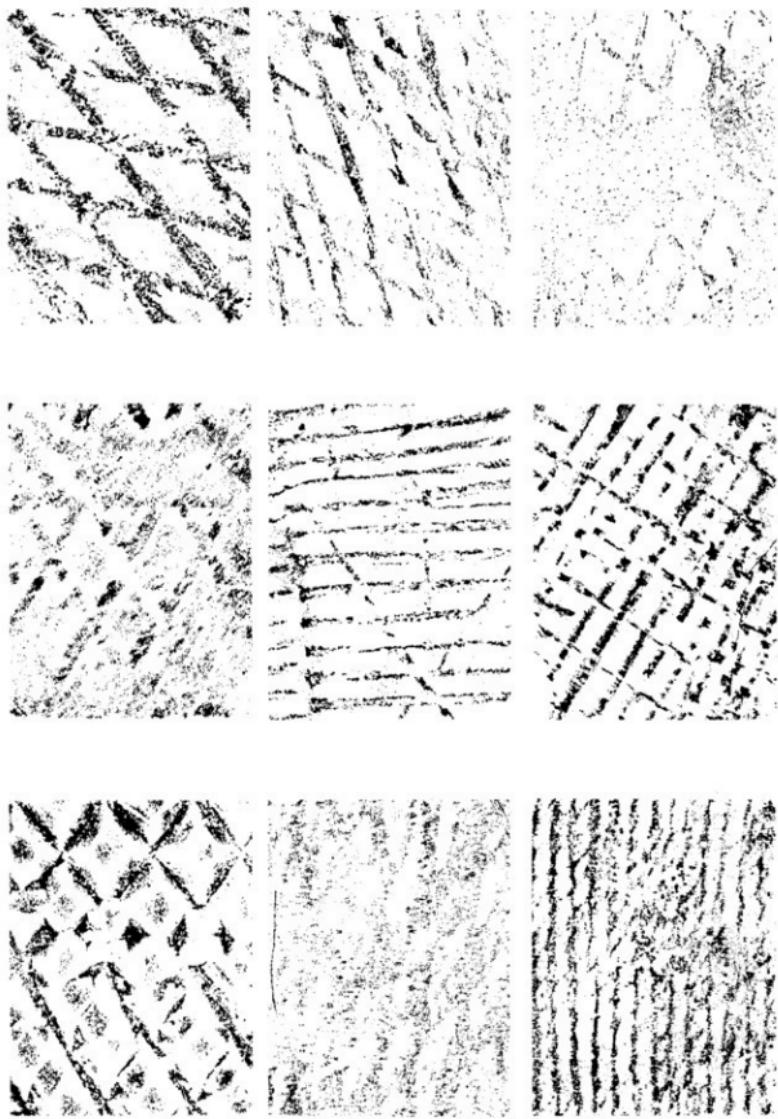
第264図 平瓦17類～20類



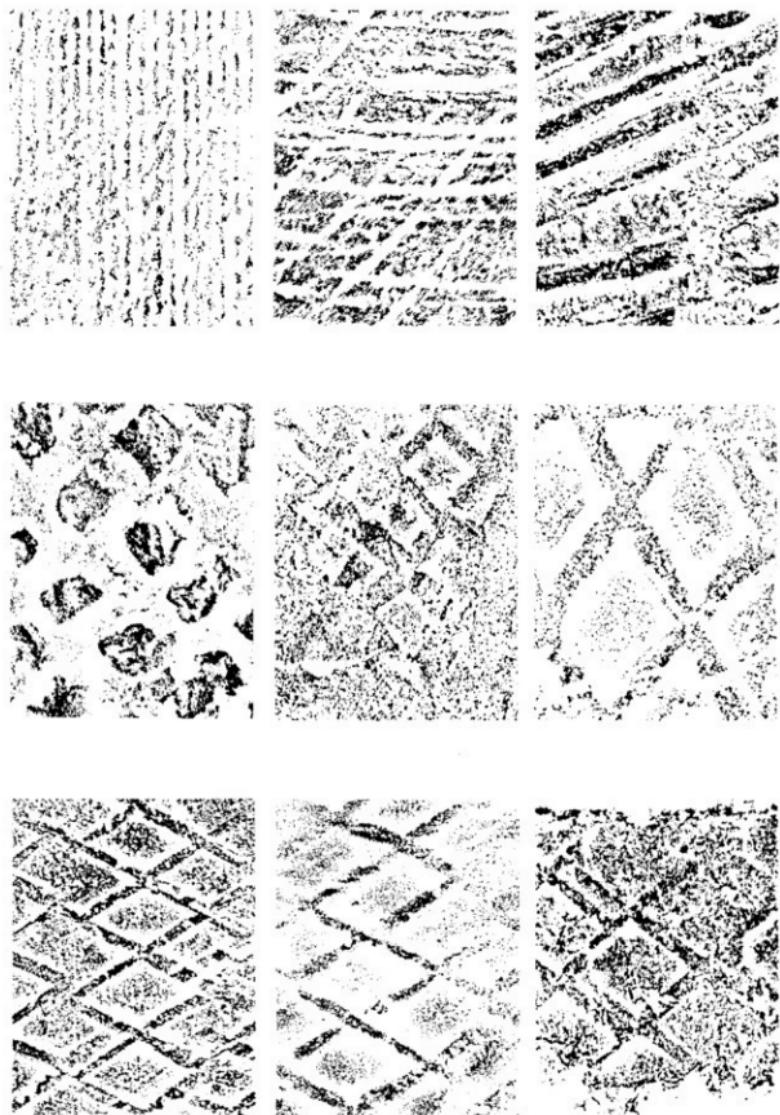
第265図 平瓦21類～23類



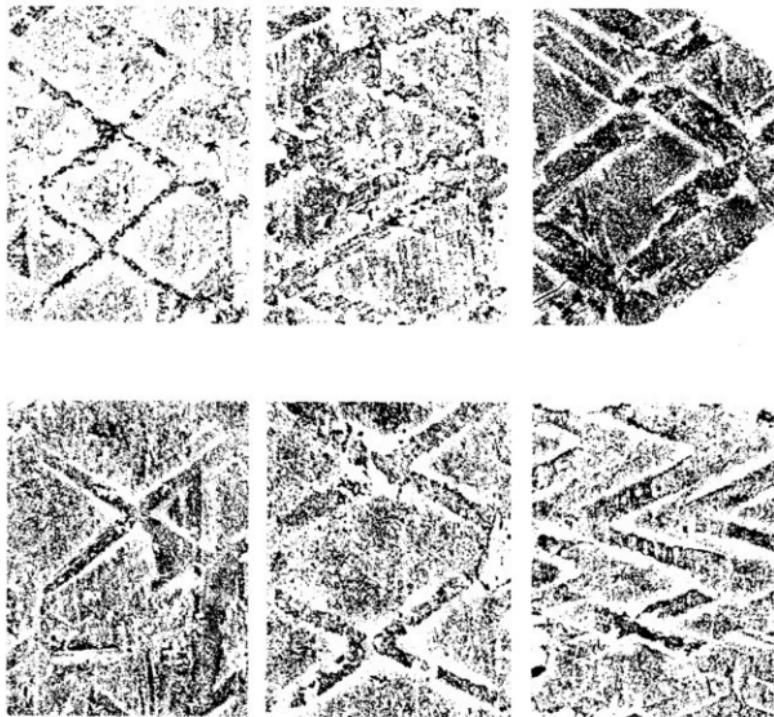
第266図 叩き目(1)



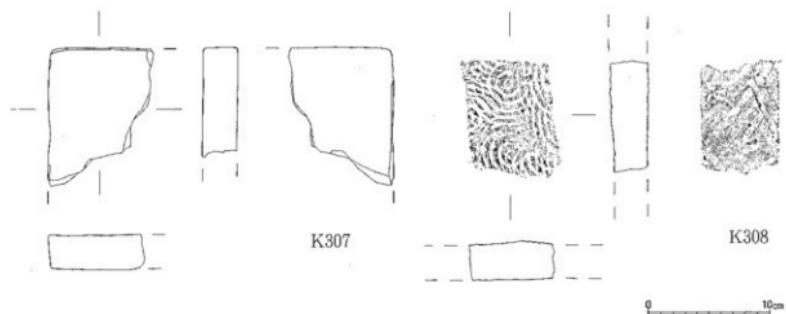
第267図 印き目(2)



第268図 叩き目(3)



第269図 叩き目(4)



第270図 塙

端面を持たない長さ9.5cm幅7cmの小片で厚さは2.7cmである。1面には布目痕跡と指ナデ痕跡がその反対面には同心円あて具痕がみられる。灰白色～灰橙色で硬質の須恵質である。

隅切り瓦（第271図）

2点出土している。いずれも製作時に角を切り落したものである。屋根葺き時に角を欠き落したものについては、平瓦の大多数が小片として出土しており、たとえある程度の接合をみられたとしても、広端部の角の欠落があきらかに意図的であるとは断定しかねるので取り上げなかった。この点は熨斗瓦についても同様である。

K309は純叩き目が施された瓦で、広端部左角が長さ11.5cm幅で三角に切り落されている。凹面の布目痕跡は狭端部側2/3がナデ消されている。広端面・狭端面はともに凹面に対し鈍角である。K310は残存長12cm幅14cmほどの小片であるが、残存端面が凹面の横骨痕跡や布目痕跡に対し斜交しているので隅切り瓦と判断した。凸面の叩き目はよくわからない。

不明瓦（第272図）

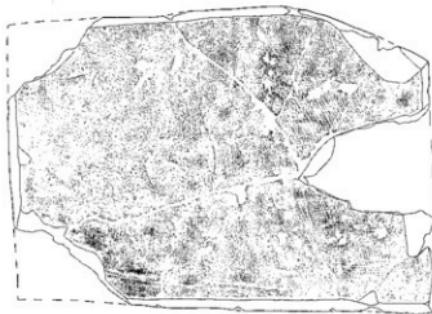
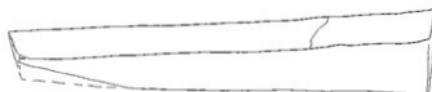
K311は現存長17.5cm幅11.5cmの小片であるが、平瓦2A類を長軸に沿って凹面側に120°位の角度で折り曲げており、折り曲げ部の凹面を強く指でなでている。側面が残っておらず折り曲げの幅は不明であるが、折り曲げの左右とも平瓦の丸みを取り平板にしている。残存する端部は、平瓦2A類の狭端部の作り方と同様であるので、こちら側が狭端部とみられる。全形がわからないが雁振り瓦の可能性を考えておきたい。

K312は純叩き目を施す平瓦で、残存長14cm幅13cm厚さ2.2cmの小片である。広端面ないし狭端面に竹串状のものを端面に直交して押しつけ端面を幅3cmに広げている。確証はないが瓦当面を意識したものとも考えられよう。焼成は硬質の須恵質で、凹面に自然釉が付着している。

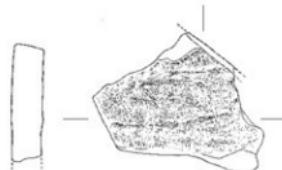
K314は縦格子叩き目が施された平瓦の端面に折れを持った直線が浅く2条施されている。瓦自体は軒平瓦4B類と同様であるので、あるいは重弧紋の施紋が浅かっただけにすぎないかもしれない。

K313は丸瓦であるが、K314と同様な工具を用いて広端面に施紋している。

K315は、やや軟質の須恵質で灰色を呈する丸瓦の凸面に2条の弧状のヘラ描きがなされている。小片のためヘラ記号であるのかヘラ描き紋様であるのかはわからない。



K309

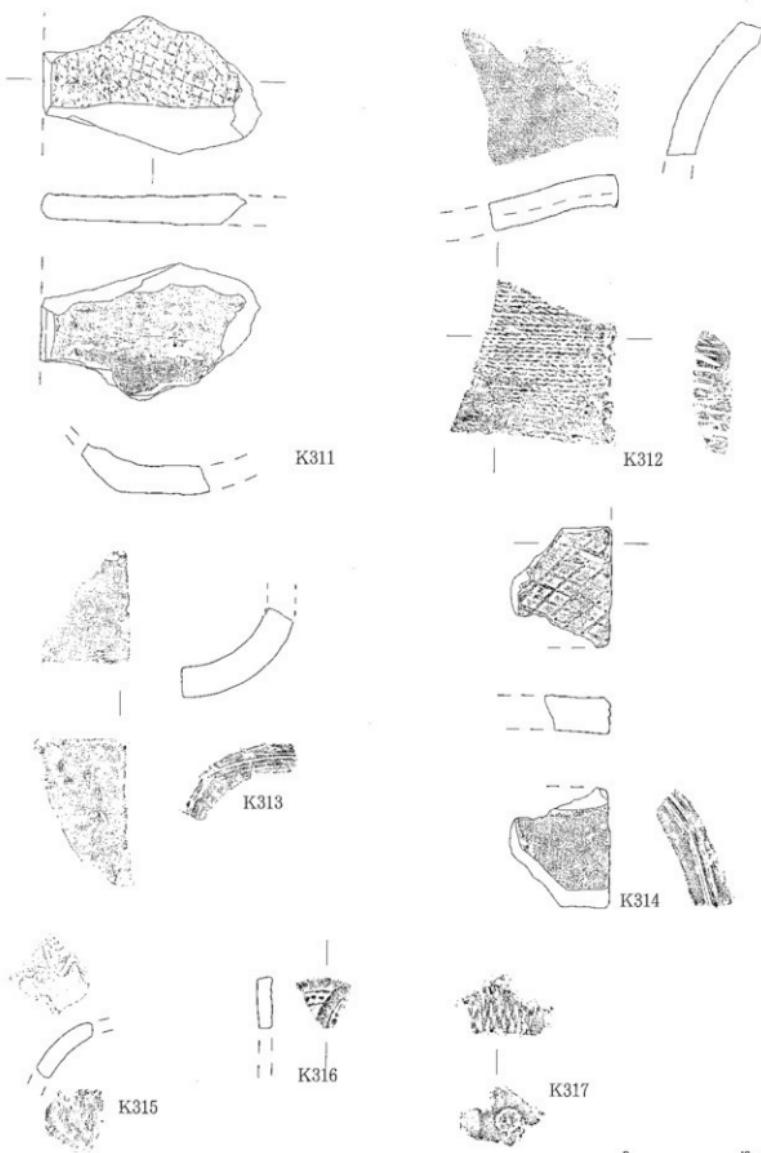


K310



0 10cm

第271図 隅切り瓦



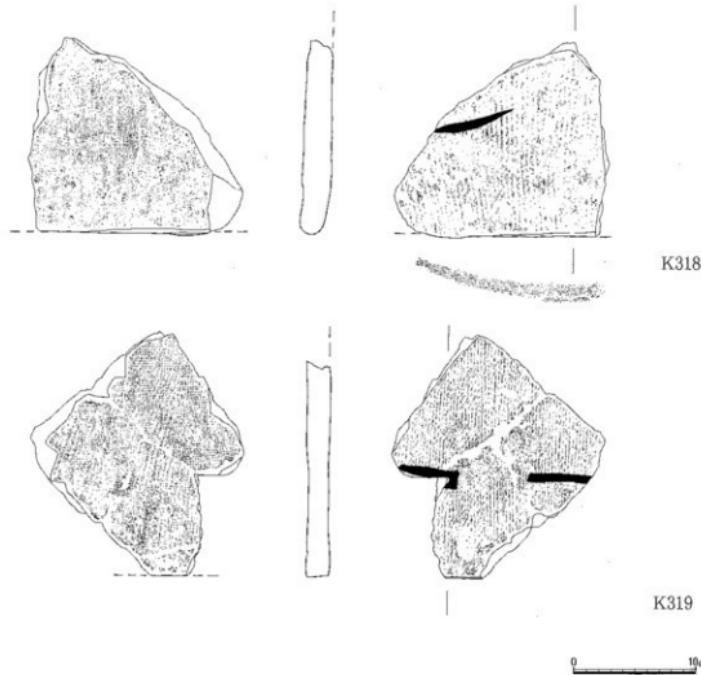
第272図 不明瓦

K316は土師質の小片で瓦であるかどうかも不明である。仮に軒丸瓦に例えるならば外区内縁は珠紋帶で、外縁は素紋の低い平縁である。外区紋様と同様の紋様が単位は不明であるが、外周から中心に向け弧状に施されている。

K317は凸面に粗い繩叩き目を持つ平瓦の小片であるが、扁平な山形の長辺に沿わせて豆粒をおいたものを背中合わせに配置した直径約2cmの円形のスタンプを押している。円形スタンプは破面にかかって一部みられるので凹面に複数施紋しているとみられる。T26から出土している。

朱線平瓦（第273図）

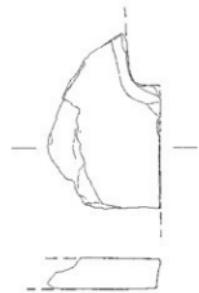
繩叩き目平瓦の凸面に朱線のついた瓦が2点出土している。どちらも小片であるが、朱線の位置が端面から9~10cmと端面に近接した所にあるので、残存している端面が広端面とみられる。繩叩き目を施していることからすると軒平瓦普及以前にさかのぼるとは思えない。軒平瓦の不足を応急的に補ったものであろう。K318は残存長15.8cm幅17.2cm厚さ2.5cmの土師質平瓦の破片で、広端面に布目痕跡が回っている。朱線は広端面から10cm離れて残っている。K319は残存長19.5cm幅18.6cm厚さ1.8cmの須恵質平瓦の破片で、胎土に白色シルトが縞状にはいる特徴がある。朱線は広端面から9cmのところに残っている。



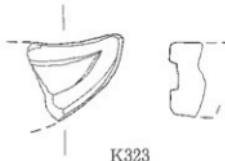
第273図 朱線平瓦



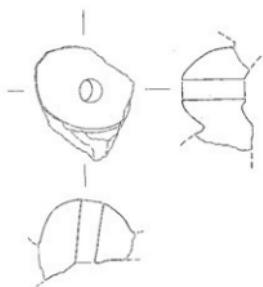
K320



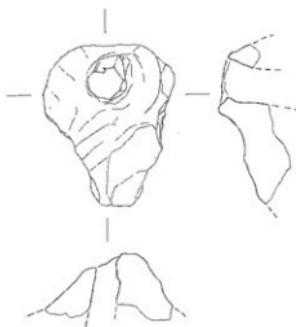
K322



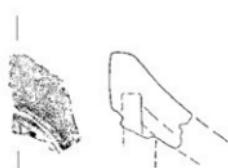
K323



K321



K324



K325

0 10cm

第274図 鬼瓦類・鳥糞

鬼瓦類（第274図）

鬼瓦類（K320～324）は西塔周辺の近現代水田の暗渠や表土などから出土している。

K320は、目から額にかけての大きな破片で、右目は半分欠失している。左目は眼球の突出がなくなっているが、K252の様であったと推測され、瞳孔は円孔で表現されている。目の上部は高く突出させ、眉間にこぶを持つ。鼻は鼻先が欠失しているので詳しいことはわからない。角は根元で折れている。額には山形紋を数条描いて髪を表現している。瓦質であるが焼け戻りがみられる。K321は突出した水滴状に表現した右眼球の破片である。瞳孔は円孔で表して瓦質である。

K324は水滴状の形状で円孔を持つが、表面に指ナデ痕跡が残り全体に雑な作りである。硬質の土師質で鬼瓦の破片であるかも定かではない。

K322・K323は部位の特定ができないが、鬼瓦ないし鬼板の破片と思われる。K322は板状の部分にL字状の割りが入っている。瓦質である。K323も葉状の小さな破片でK322同様に部位不明であるが、外縁部を一段高くしている。瓦質である。

鳥衾（第274図）

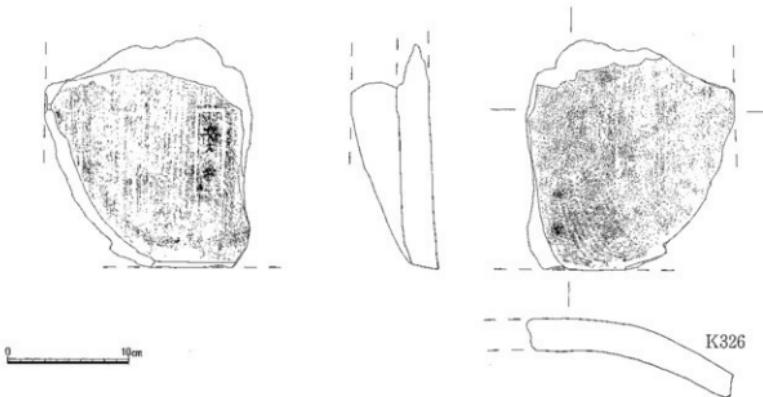
K325は外縁の幅が次第に広くなっているので鳥ぶすまの破片とみられる。内区は不明で外区内縁に珠紋帯をめぐらす。土師質であるが、瓦質の瓦の焼け戻りとみられる。

刻印瓦（第275図）

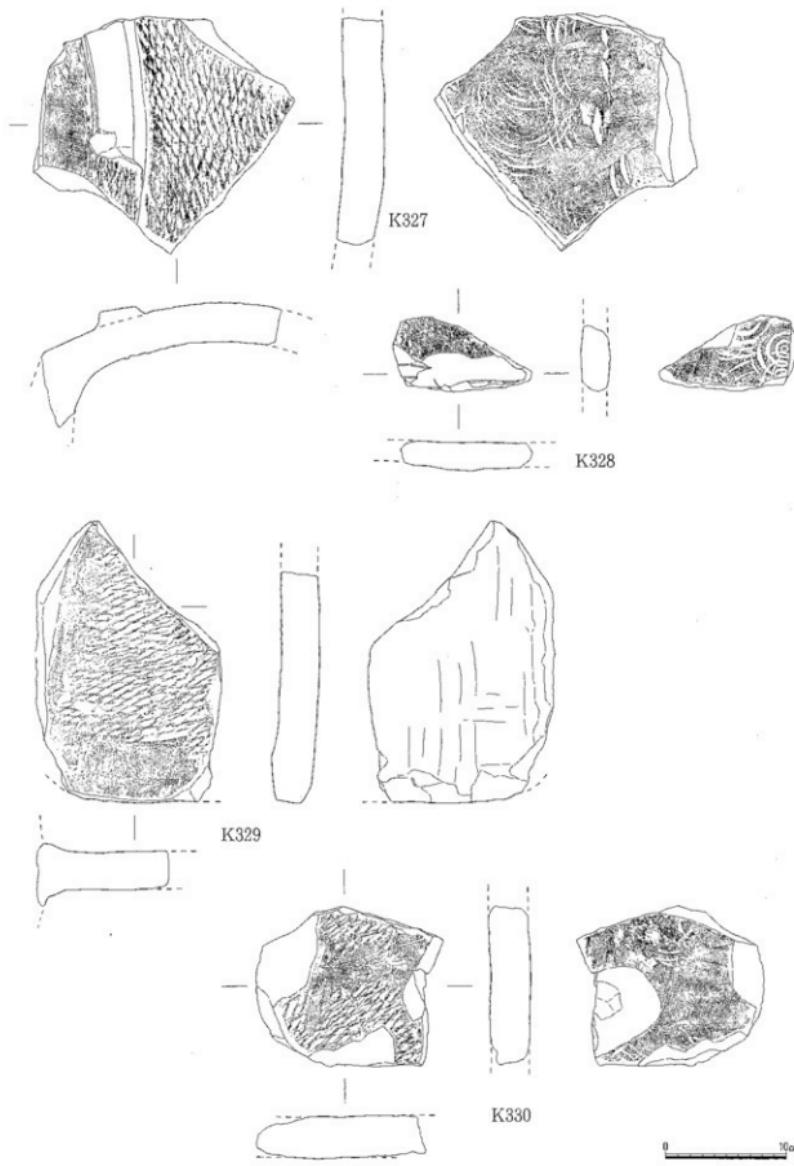
K326はT4の近現代水田の暗渠中から出土した。現存長18cm幅17.5cmの平瓦の破片で、凹面に「安養寺」陽刻印を押している。凸面には離れ砂・糸切り痕跡が残り、凹面には板状工具のナデがみられる。短辺（狭端か広端かは不明）・側面には面取りを行わない。短辺は凹面に対し鈍角で、側面は鋭角である。色調は淡橙色であるが、瓦質瓦の焼け戻りとみられる。

鷗尾（第276・277図）

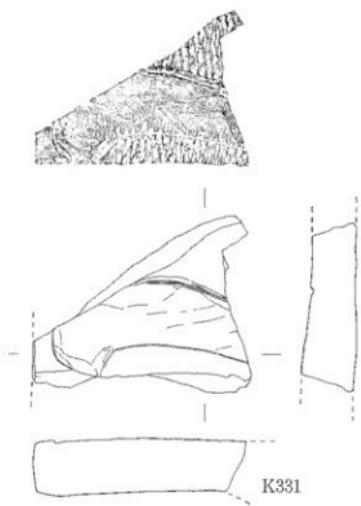
鷗尾は1次調査出土分も含め9点出土しているが、左右や部位の特定できないものもある。いずれも須恵質である。



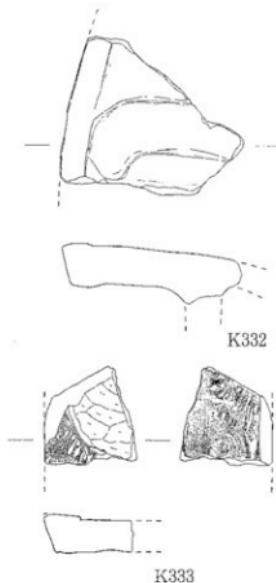
第275図 刻印瓦



第276図 鴟尾(1)

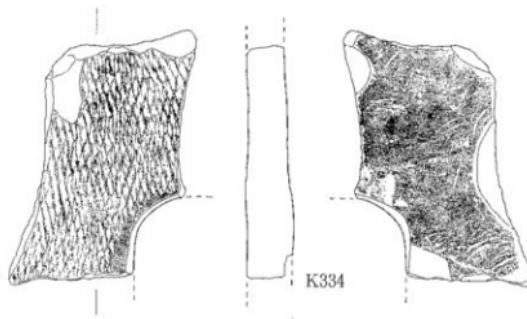


K331

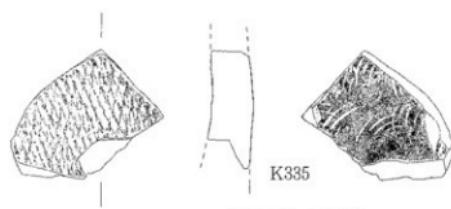


K332

K333



K334



K335

第277図 鶲尾(2)

0 10cm

K327は胸部から腹部にかけての破片で鰭部ははがれ落ちていると思われ、胸部と鰭部の境には幅4cmの突帯で縦帯をあらわす。胸部及び突帯がはがれた部分には1辺8mmでやや扁平な菱形叩き目がみられ、内面には同心円あて具痕が残っている。鰭部は叩き目をナデ消している。厚さは3cmと厚めである。T26のP234から出土している。K328は部位不明の小片で、外面には消し残された細格子叩き目痕跡が、内面には同心円あて具痕が見られる。厚さ2cmと薄手である。T26から出土している。K329は左基部の破片で鰭部がはがれ落ちているとみられる。胸部はK327と同様の叩き目を施し、基底部を5cm幅で叩き目を消している。縦帯は不明である。内面には粗い指ナデが見られる。厚さ3cmと厚めのタイプでT26のP224から出土している。K330は部位不明の小片で、外面にはK327と同様の叩き目が、内面には同心円あて具痕が見られる。厚さ3cmと厚手のタイプでT8から出土している。K331は左鰭部の破片である。先端が蕨手状になる陰刻の葉状紋を配する。端部や葉状紋内部以外にはK327よりやや小さめの叩き目が残る。厚さは3.5~4.5cmと厚めのタイプで、特に硬質である。T37の上段から出土している。K332は1次調査で出土した左鰭部の破片である。先端が蕨手状の葉状紋を正規型を意識して配している。厚さは2.5cmと薄手のタイプである。K333は鰭部の小片で葉状紋先端の蕨手状部分がみられる。紋様部以外はK332と同様の叩き目が施されており、内面には同心円あて具痕が消し残されている。厚さは3cmで厚手のタイプで、特に硬質である。T8から出土している。K334は胸部の破片で半円形透かし孔がみられる。外面にはK327と同様の叩き目が施されており、内面には同心円あて具痕が残っている。厚さは3cmと厚めのタイプで、T8から出土している。K335は胸部の小片で、外面にはK327と同様の叩き目が内面にはナデ消し残された同心円あて具痕が見られる。厚さは3cmと厚手のタイプである。T28から出土している。

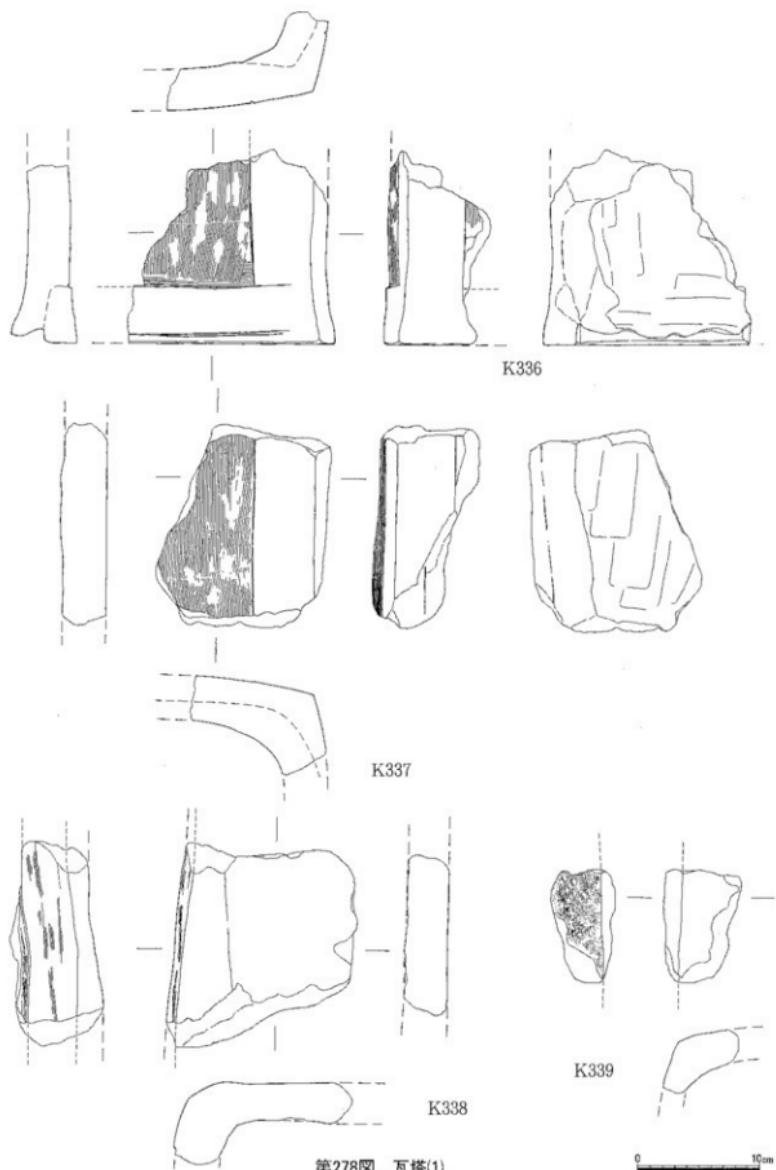
以上の鶴尾は叩き目が軒平瓦1類と類似していることから白鳳期と考えられる。

瓦塔（第278~281図）

瓦塔は屋根・基部など1次調査分もあわせて26点出土し、素紋のものと屋根部にスタンプ紋を押すものとがある。以下に詳細を述べるように明らかに重層建築物を示す資料を欠き、また、平面形が円形ないし多角形を呈することなどから、大半は塔というよりは堂というべきものであろう。

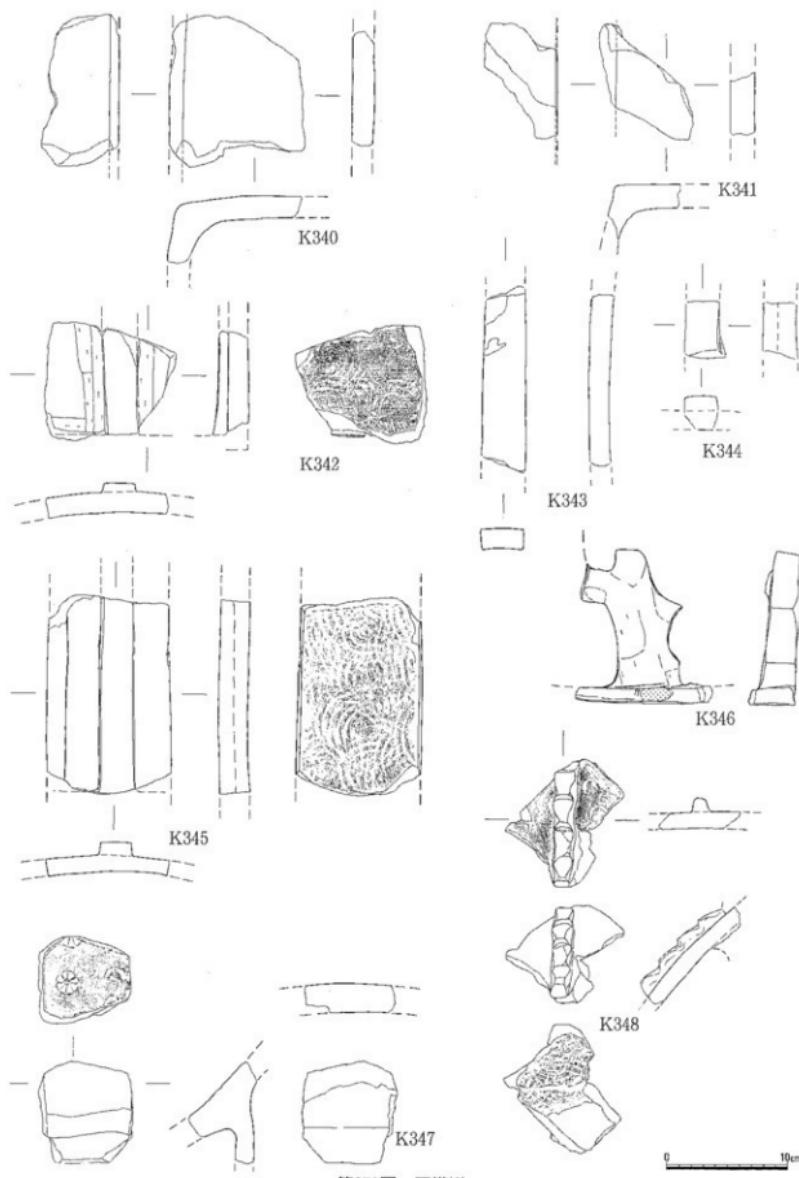
K336はT16の瓦溜まりから出土した基部の破片と思われる。底部をやや裾広がりにして安定性を持たせていることから基部と考えたが、底部内面を受け口状に作っていることからすると重ねて用いられた可能性もある。ヘラによる沈線や壁部分より1mm程度厚くすることにより柱や地盤を表現している。隣り合う辺となす角度はほぼ115°である。K337~K341は壁体部の破片で、いずれも角を持っている。K337・K338は胎土・焼成・厚みからしてK336と同一個体の可能性があり、T23から出土している。このほか図化していないが、K336と同一個体と考えられる破片が2点T16とT22から出土している。K340・K341はやや薄手の作りで、K340は隣り合う辺との角度が100°、K341は120°である。K340はT15から、K341はT17から出土している。

K342~K345は柱を突帯で表現した壁体部分の破片である。K343は方柱状の破片で、柱のみで構成し壁を空洞化させた建物の柱部分か、あるいはハガ遺跡出土例のように幅の狭い長方形の透かし孔を入れた建物の壁体部分かと思われる。T37の上段で出土している。K344は柱部分の破片で、1.7cmの壁体がつきK342やK345よりもやや厚い。T1から出土している。K342は壁体の下端が欠損しているが、柱部は下端でやや厚みを増し端部に粘土がはがれた痕跡があることから基部近くの破片と

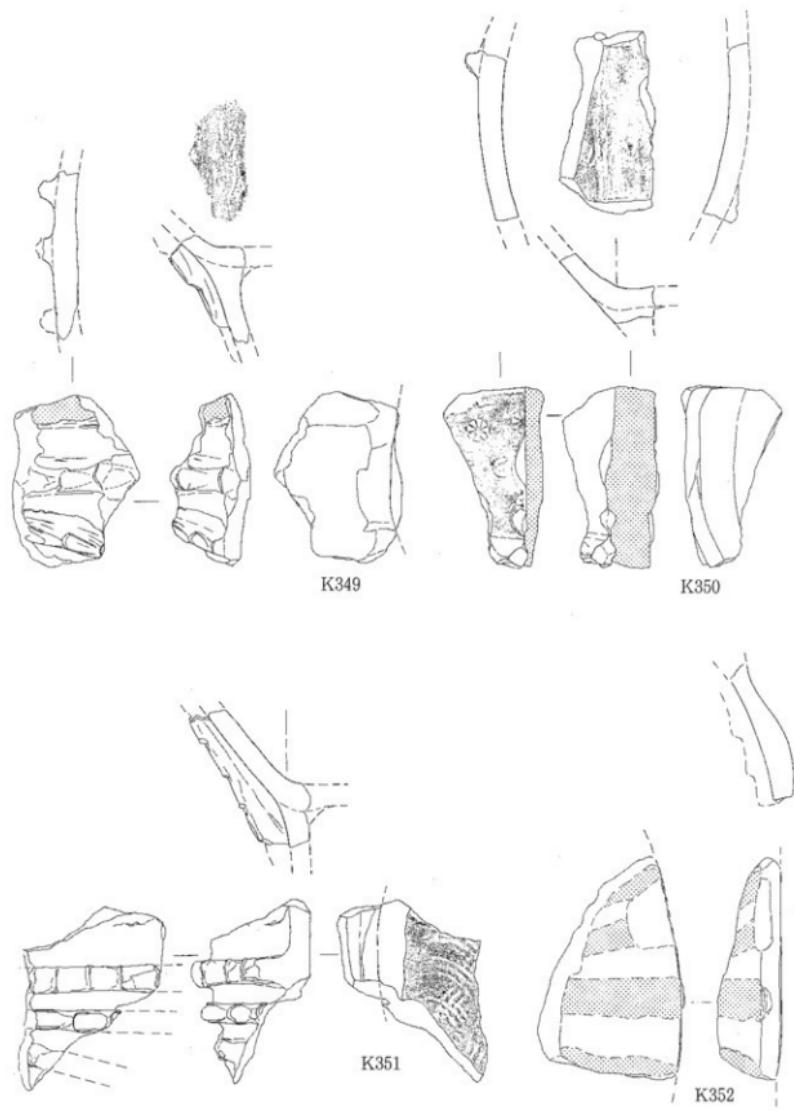


第278図 瓦塔(1)

0 10cm

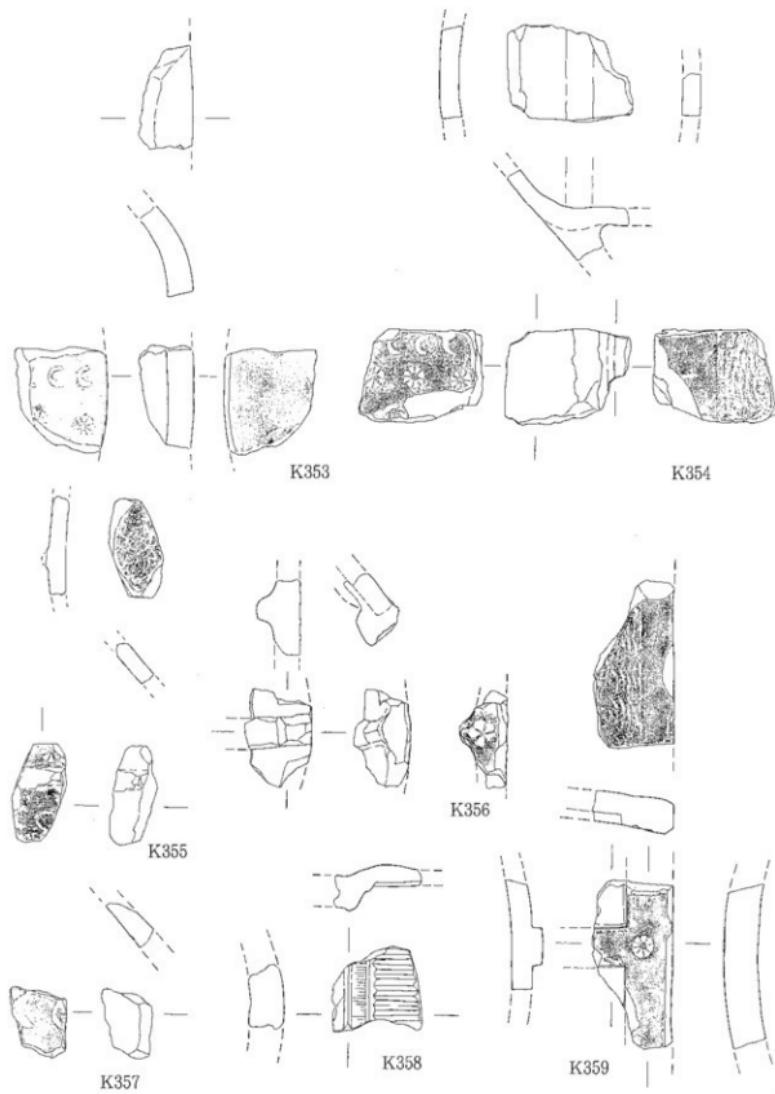


第279図 瓦塔(2)



第280図 瓦塔(3)

0 10cm



第281図 瓦塔(4)

0 10cm

みられる。内面にはナデが及ばず消し残された同心円あて具痕が見られる。K345も柱を実帯で表現した壁体の破片と考えられる。長辺の両横には透かし孔があけられている。緩い円形の壁体である。内面には同心円あて具痕が残る。T26から出土している。

K346は長方形の薄板に1辺は直線的でやや厚く他辺は波状に表現し、直線的な辺には柱状の連結部が付属する。連結部先端は粘土がはがれた状態である。確証は得られないが水煙の破片と思われる。T8から出土している。

K349・K351・K352は屋根部の破片で、丸瓦の葺き重ねを表現している。K349は屋根勾配が壁体上部で変換する部分の破片である。行基丸瓦を葺いた表現は粘土がはがれた部分を含め3条あって放射状に広がっている。壁体の厚みはK340・K341と同様である。1次調査で出土している。K351も屋根勾配が壁体部分で変換する部分の破片である。行基丸瓦を葺いた表現は3条あるが、右端の1条が幅2.2cm高さ1.5cmと他の2条(幅1.6cm高さ1.3cm)よりも高く表現されており、あるいは降棟の表現かとも思われる。降棟で良しとするならば、降棟の右側がやや広く残っていることからすると入母屋形式の屋根と考えられよう。丸瓦の葺き重ねは2.8~3.5cmである。屋根部内面には同心円あて具痕がみられる。壁体の厚みはK340・K341と同様である。T7のSD30から出土している。K352は軒先部分の破片である。丸瓦は剥落しているが軒丸瓦を表現した部分が下端のみ残っている。丸瓦の配置は痕跡から放射状に広がっていたことが分かり、また軒先も緩やかな弧状をなしているので、円堂のような建物が考えられる。T8から出土している。

K347・K348・K350・K353・K354・K355・K357は屋根部に八葉の蓮華紋と半月形のスタンプ紋をそれぞれ列にして交互に押している。蓮華紋は直径1.8cm半月形は直径1.7cmである。K347は屋根から壁体部への小片である。軒先に向け屋根勾配の変換点がわずかにみられる。屋根部には蓮華紋と半月形のスタンプ紋がそれぞれ1列残っている。1次調査で出土している。K348は丸瓦列の両横に半月形スタンプ紋の列がある。丸瓦は幅1.3cm高さ1.3cmとK349やK351よりも小さく、葺き重ねも2.5cmと狭い。内面には同心円あて具痕がみえる。T15・16で出土した破片が接合している。K350も屋根から壁体にかけての破片で、軒先部分は壁体から粘土がはがれ落ちている。屋根部には丸瓦列の右に順に蓮華紋と半月形のスタンプ紋が交互にそれぞれ2列残っている。壁体部は弧状である。T8から出土している。K353は軒先部分の破片で、蓮華紋と半月形のスタンプ紋がそれぞれ一条残っている。K354は軒先を欠くが屋根から壁体にかけての破片である。屋根部分には中央に蓮華紋スタンプが両横に半月形スタンプ紋が押されている。9cmほどしかないが屋根の傾斜はやや内湾しているとみられる。T1から出土している。K355は屋根部の小片で、丸瓦列の右に蓮華紋スタンプが左に半月形と蓮華紋スタンプが押されている。T8から出土している。K357は屋根部の小片とみられ詳細は不明であるが、直径2.9cmと他に比べて大きな半月形スタンプ紋が用いられている。T15から出土している。

K359は基部の破片で、柱や地覆を壁体よりも5~7mm粘土を貼り足して表現し、柱と地覆の交点に八葉蓮華紋のスタンプを1つ押している。横断面形は弧状でやはり平面円形の建物と考えられる。上記屋根部と基部に押された八葉蓮華紋のスタンプはいずれも同じ型を用いている。

K356は土師質の軒先部分の小片で、軒丸瓦相当部分には直径2.2cmとやや大きな五葉蓮華紋のスタンプを押している。T17から出土している。

K358は軒裏と連子上部の小片である。二次的に焼成を受けているためか白色から桃色を呈している。平面は弧状を呈し円堂とみられる。

註

- (1) 『板谷コレクション図録』 倉敷市教育委員会 2000
- (2) 亀田修一先生の教示による。亀田先生には、発掘調査や出土物全般にわたり幾度となくご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。
- (3) 以下同様とする。
- (4) 小田富士雄・武末純一 『図録 新羅の古瓦墳』 北九州市立歴史博物館 1975
亀田修一 「吉備の朝鮮系瓦」『青丘学術論集』第7集 1995
- (5) 亀田修一氏は平城宮6151A型式より先行する可能性を、草原孝典氏は6151型式の模倣ととらえている。亀田修一 註4文献。草原孝典 「第IV章 結語」『ハガ遺跡－備前国府関連遺跡の発掘調査－』 岡山市教育委員会 2004
- (6) 『特別展 吉備の古代瓦』 岡山市教育委員会・岡山市立オリエント美術館 1980
- (7) 平城宮式軒瓦については、奈良文化財研究所 千田剛道・清野孝之・今井晃樹、名古屋大学 梶原義実の各氏からご教示を得ました。記して感謝いたします。
- (8) 瓦当面を円形に復原したが、小田富士雄先生から梢円形になる可能性もあるとの御指摘をいただいた。
- (9) 註6文献。
- (10) 物部茂樹ほか 『百間川米田遺跡4』 岡山県教育委員会 2002
- (11) 池田 浩ほか 『服部廃寺』 長船町教育委員会 1997
- (12) 草原孝典 『ハガ遺跡』 岡山市教育委員会 2004
- (13) 註4文献。
- (14) 註6文献。
- (15) 『本町遺跡』 姫路市教育委員会 1984
- (16) 入稿直前にほぼ全形が判明した。数値の修正や写真の差し替えはできたが、図の修正はできなかった。
- (17) 入稿直前にほぼ広端部幅が判明した。数値の修正や写真の差し替えはできたが、図の修正はできなかった。

第2節 瓦 経

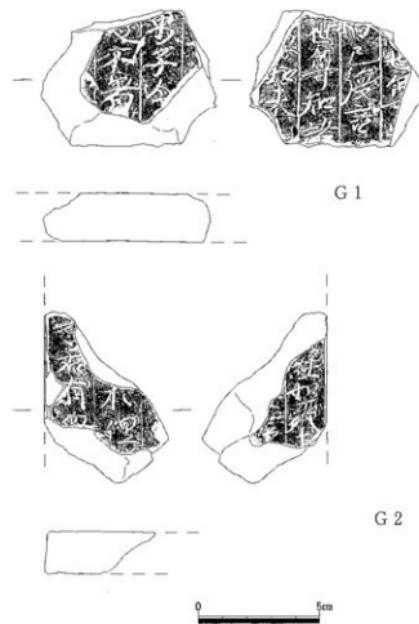
瓦経は2点(G1・G2)が出土しており、いずれも法華経の一部である。瓦経とは、方形の粘土板に仏教教典を錐や筆などで書き写して焼成したもので、平瓦と形態的には共通している。平安時代後期頃になると、武士階層の著しい成長などから、それまでの中央貴族を中心とした社会が大きく変貌を遂げつつあった。支配階層の側からみると、社会的には不安であったであろう。また、この時期は仏教教理でいうところの末法の世、つまり釈迦が入滅して後、正法・像法・末法へと時代が変遷するにつれ仏教が衰退し、それとともに天変地異や戦乱がおこるという時期に合致することから、とくに支配者層の精神的な不安は増大された。その救済を目的の1つとしたのが経塚の造営であった。経塚とは、書写した仏教教典を地中に埋納したもので、藤原道長が寛弘4年(1007)に金峯山で造立したものが最古の例である。その後12世紀後半には全国的に経塚の造営は広がるようである。経塚に埋納された教典類の多くは紙本であったが、数は少ないながらも粘土板に写されたものがあつた。それが瓦経である。県内では倉敷市安養寺裏山の経塚出土の瓦経が著名であるが、賞田廃寺の存在する旭東平野からも2点が出土している。百間川原尾島遺跡と岡山市沢田出土のものである。

瓦経の出土例の割合からすると、旭東平野部に3ヶ所もの出土地点が集中するのは、極めて特異な感じを印象付ける。これと同様の分布を示す同期の仏教関連の遺物が、泥塔である。泥塔とは高さが10cm前後の小さな土製の仏塔で、平安時代の後期には貴族層が盛んに寺院へ奉納したことが現在残る日記などからわかる。貴族層が来世への期待を託したものであり、本質的には経塚の造営と通じるものである。ただ泥塔にはその整形法から2種に分けられ、それは2つの型を用いるものと1つの型を粘土板に押しつけて整形するものである。両者の違いは時期差と考えられ、前者が平安時代後期、後者が鎌倉時代以降である。さらに前者は備前国府の存在する旭東平野に分布が集中するが、後者は散在的に分布し、しかも山間部の交通路を意識したことからも、前者が平安時代の支配層、すなわち貴族層に属するもので、後者は中世において新たな交通路を開拓していく民衆層に属するものと推測されている。旭東平野に集中する瓦経の分布も、泥塔と同様の位置づけが可能と思われる。中央貴族との直接的な窓口である国府とその周辺において、当時中央貴族層の間で流行していた経塚の造営、瓦経、泥塔の奉納などが浸透していたのであろう。倉敷市安養寺についても、出土している瓦には平安京出土瓦と共通するものが幾つか認められることからも、備中国府とのかなり親近的な関係がうかがわれる。いずれにせよ、賞田廃寺出土の瓦経も、同寺と備前国府が平安時代後期になってもかなり密接な関係を有していたことを示しているといえる。

瓦経の説解については、間壁忠彦氏より多大なご教示を頂いた。

参考文献

- 間壁忠彦「備前沢田、備中田中、備後西国寺の瓦経をめぐる」『考古論集』1993年
高田恭一郎「百間川原尾島遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106 1996年
草原孝典『ハガ遺跡』岡山市教育委員会 2004年



第282図 瓦経

及 男	世 白 世	若 於	如
不 子	尊 已 尊	有 涅	來
著 今	如 知 復	衆 槩	：
：	來 諸 言	：	
：	：	：	

G 1

G 2

第3節 土 器

土器は、調査区全体でコンテナ32箱分出土している。

T 1 出土の土器（第283図）

門の存在が想定されたT 1では、S D 9・10、S K11・12の各遺構からは少量の土師質土器が出土した以外は遺構外からの出土であるが、器種は土師質の杯類が多数をしめる。

1・2はS K11より出土した土師質の杯である。7・8はS D10より出土した土師質の皿である。時期は中世と考えられる。遺構以外の出土品として18は土師器楕で内外面には丹塗りが施される。時期は9世紀後半から10世紀頃と考えられる。20は須恵器の杯蓋で21は土師器の壺である。

遺構外出土の土器の大半は中世の2次堆積と考えられる褐灰色土より出土した。

T 2 出土の土器（第284図）

22は須恵器の蓋である。これ以外の遺物について少量の土師器、須恵器片が出土しているが、いずれも細片が多い。

T 3 出土の土器（第285図）

23・24は土師器の杯で、25は高台の付いた土師器杯でいずれも内外面に丹塗りが施される。時期は8世紀後半から9世紀初頭頃と考えられ、S K19から出土した。30から33は土師質の楕類でいずれも中世と考えられる。39は須恵器の杯である。

T 4 出土の土器（第286図）

T 4からの出土土器はきわめて少量で須恵器の杯類と土師質土器の細片が出土したのみである。40・41は須恵器の杯身である。40には灰釉が認められる。42は須恵器の杯蓋である。

T 6 出土の土器（第287図）

43・44はともに須恵質の杯底部で、底部に回転糸切り痕がみられる。

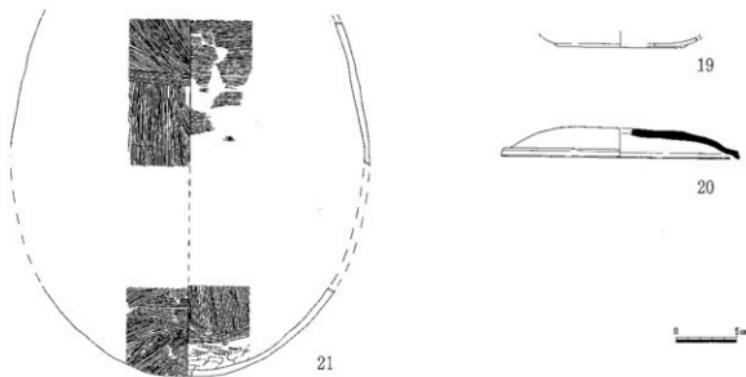
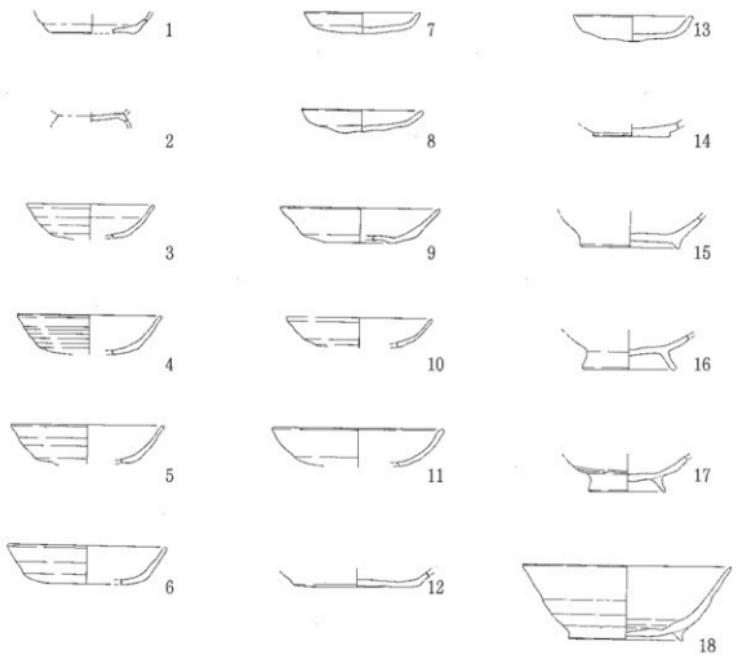
T 7 出土の土器（第288図）

45は須恵器の壺である。46は須恵器の壺底部である。47は土師質の杯底部片であるが、底部に穿孔が施されており、灯明具であったと考えられる。

T 8 出土の土器（第289図）

T 8では瓦溜まりから少量の須恵器と土師質土器類が出土した。

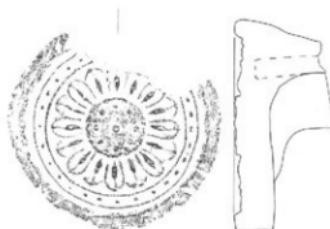
48から52は高台付きの土師質杯類である。時期はいずれも中世と考えられる。53は土師質の皿で内面には煤が付着する。54は須恵器の皿である。56は土師質の鍋である。57は土師質の鍋で脚部から脚部



第283図 T 1 出土土器



22



P 5、K30



第284図 T 2 出土土器



23



28



34



24



29



35



25



30



36



26



31



37



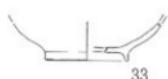
27



32



38

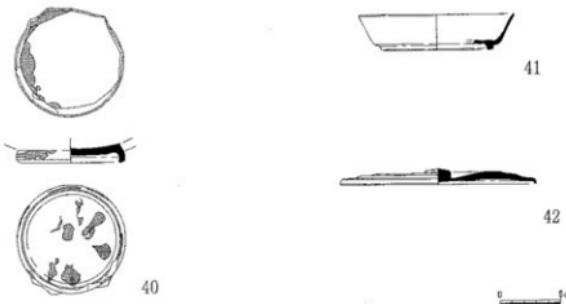


33



39

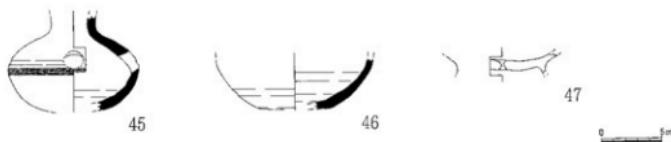
第285図 T 3 出土土器



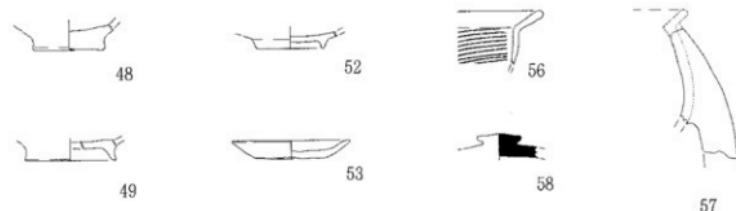
第286図 T 4 出土土器



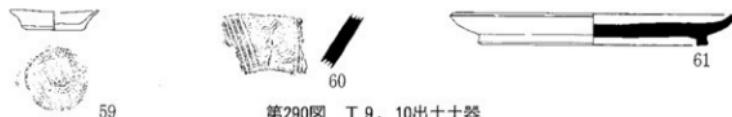
第287図 T 6 出土土器



第288図 T 7 出土土器

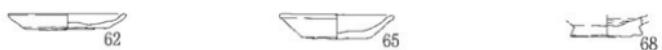


第289図 T 8 出土土器



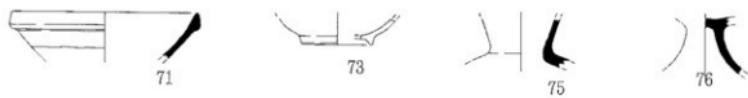
第290図 T 9、10出土土器

0 1cm



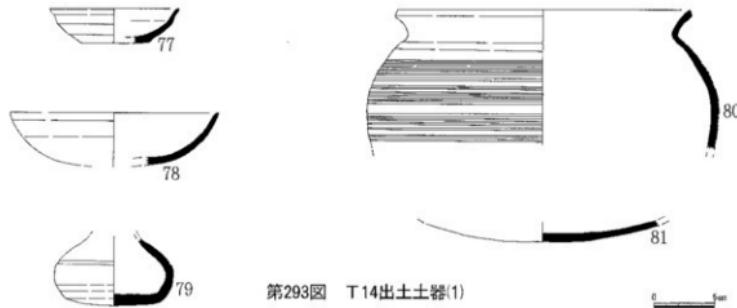
第291図 T 12出土土器

0 1cm



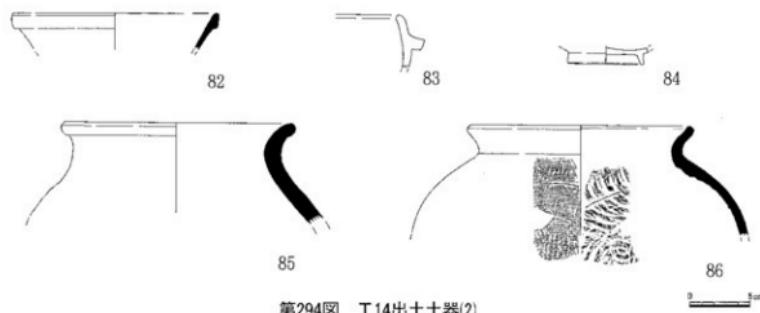
第292図 T 13出土土器

0 1cm

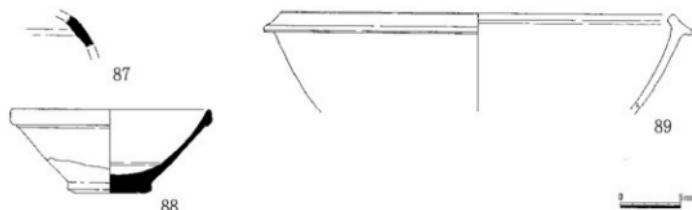


第293図 T 14出土土器(1)

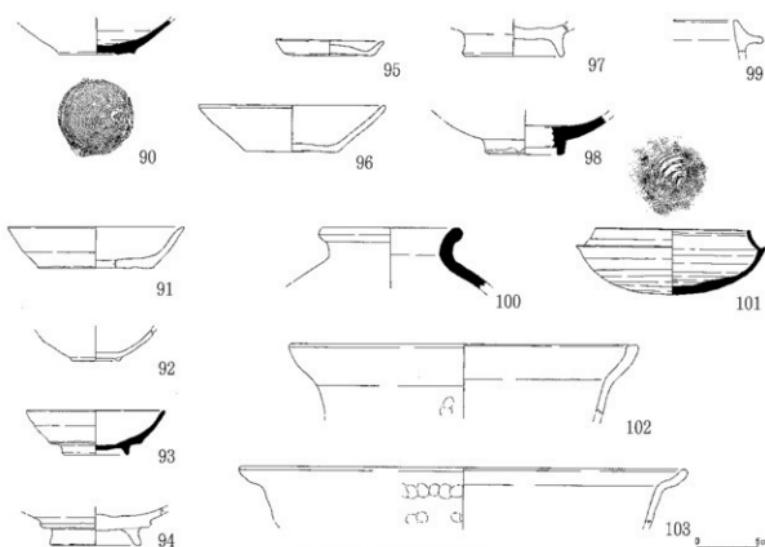
0 1cm



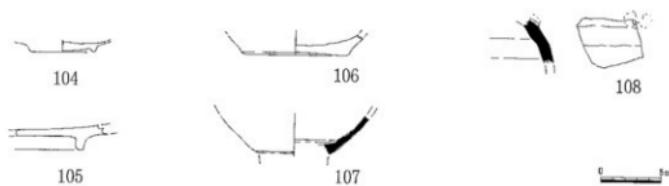
第294図 T14出土土器(2)



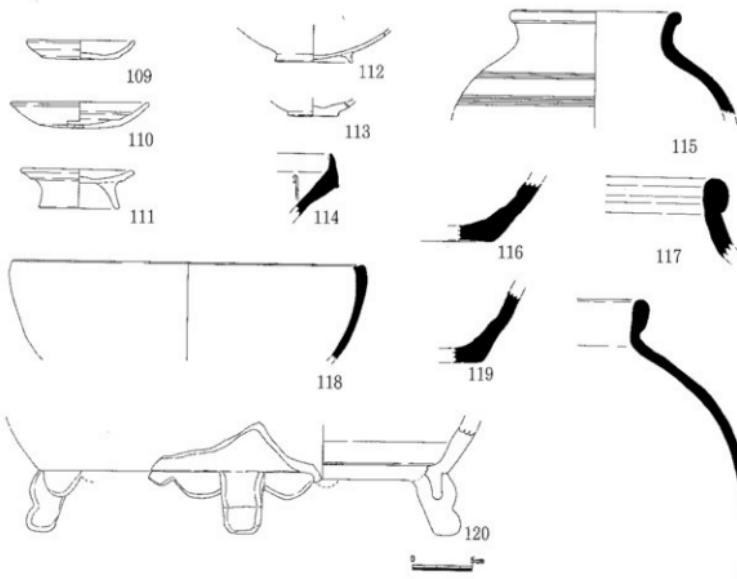
第295図 T15出土土器



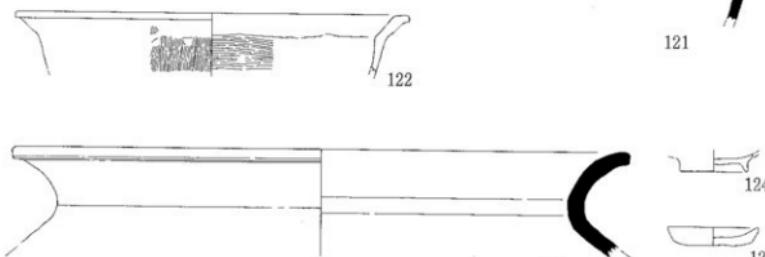
第296図 T16出土土器



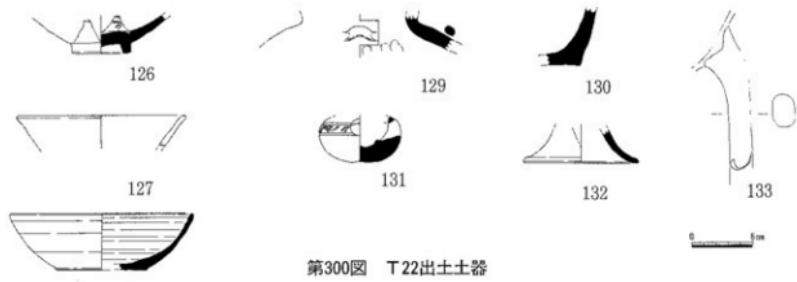
第297図 T 17出土土器



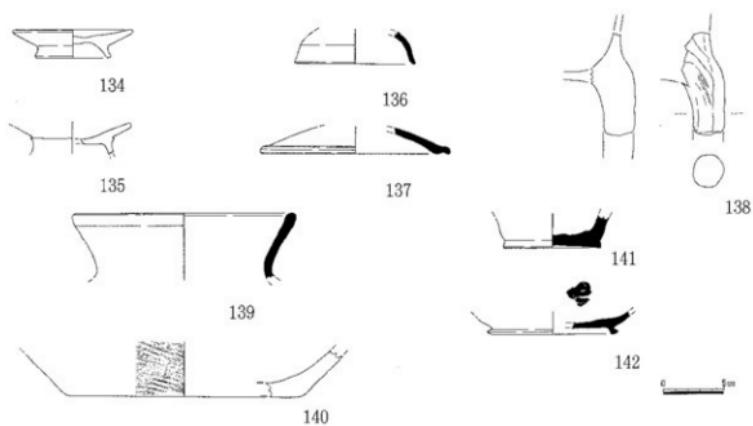
第298図 T 19出土土器



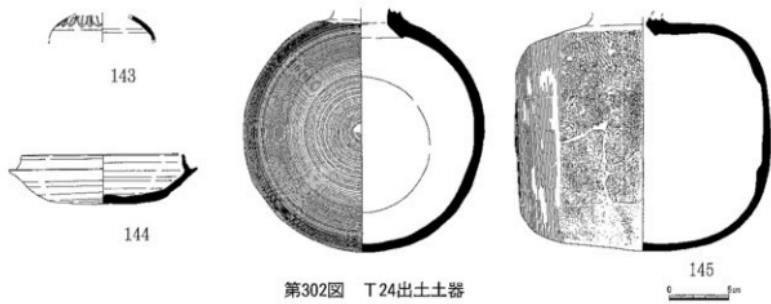
第299図 T 20出土土器



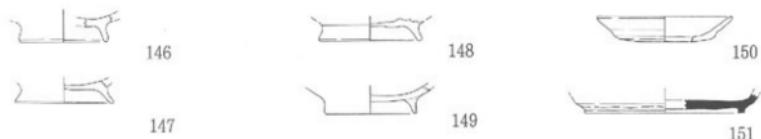
第300図 T22出土土器



第301図 T23出土土器

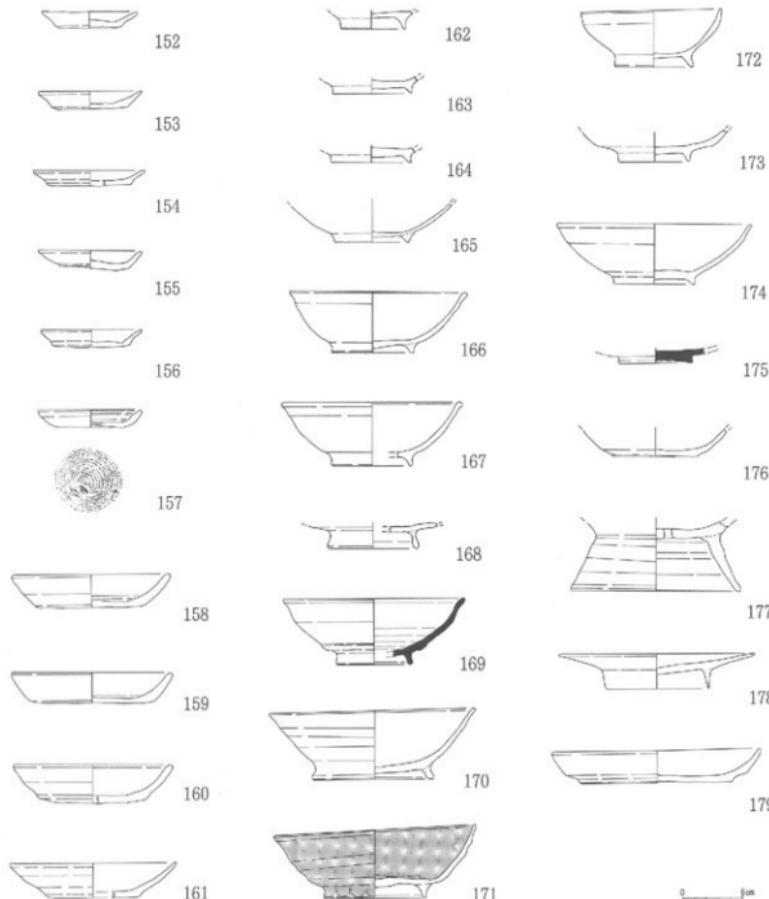


第302図 T24出土土器



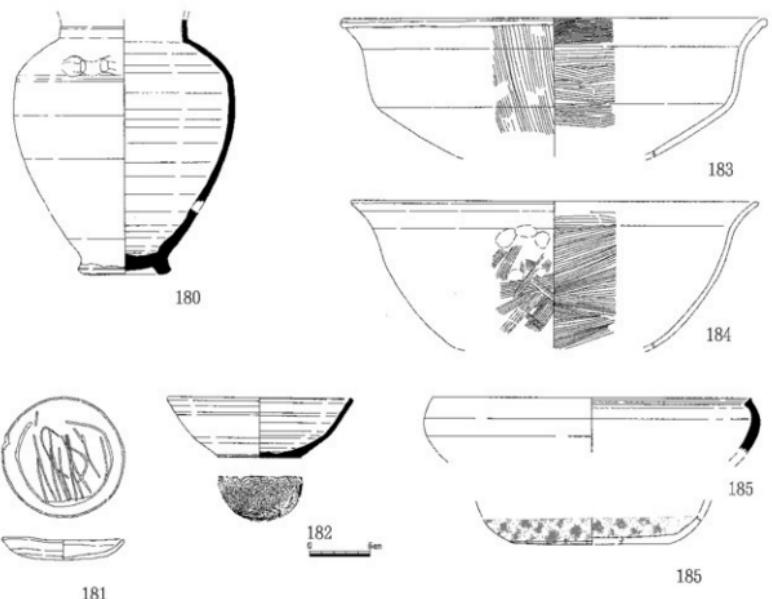
第303図 T25出土土器

0 5cm

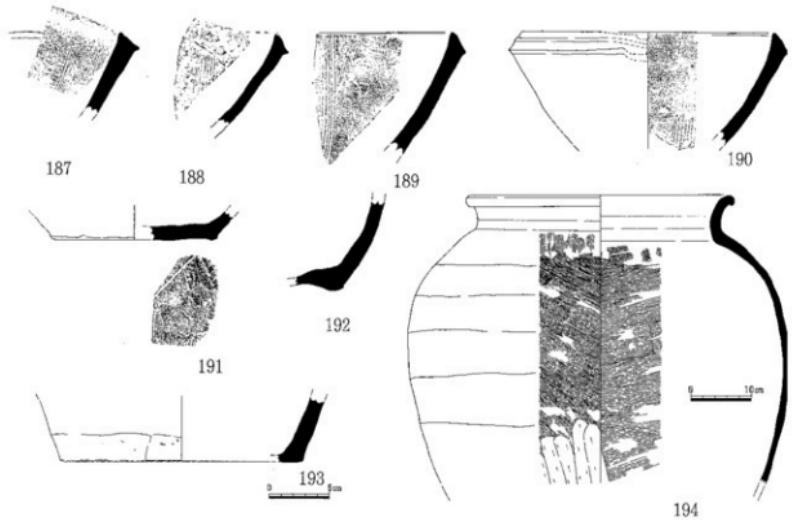


第304図 T26出土土器(1)

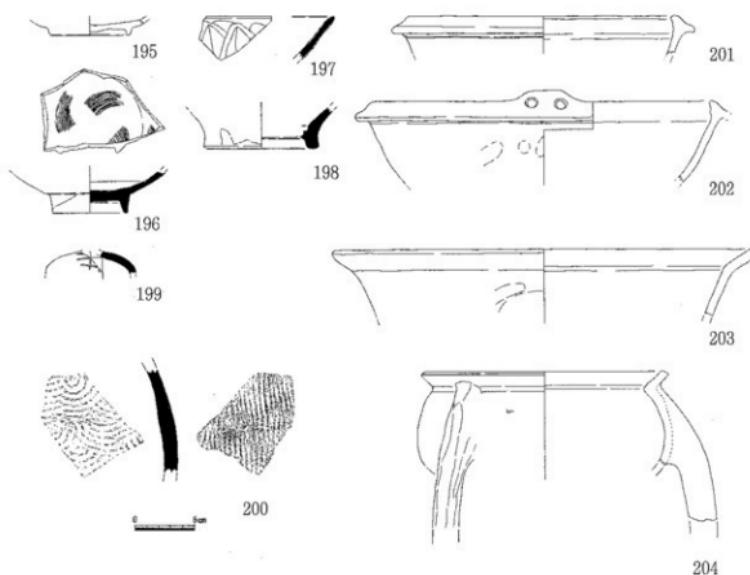
0 5cm



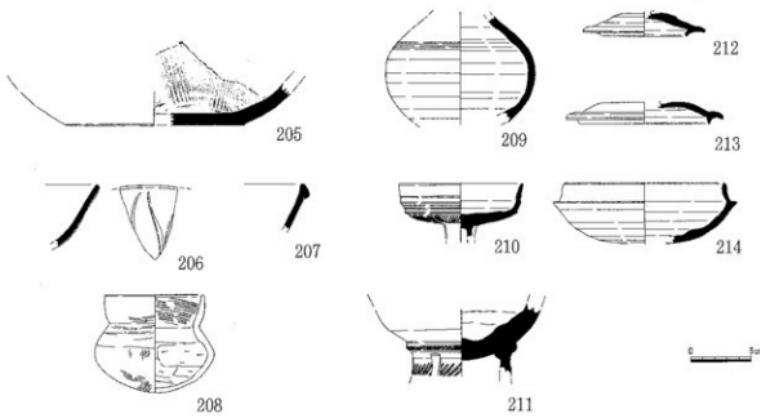
第305図 T26出土土器(2)



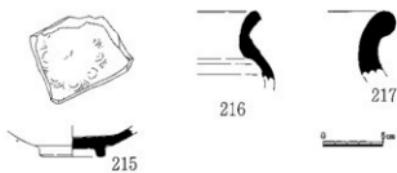
第306図 T27出土土器(1)



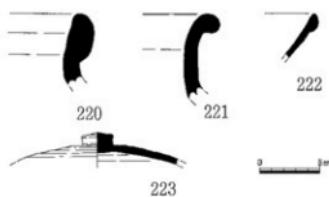
第307図 T27出土土器(2)



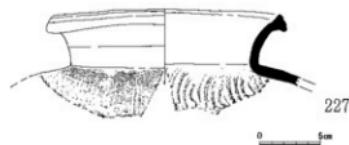
第308図 T28出土土器



第309図 T29出土土器



第312図 T32出土土器



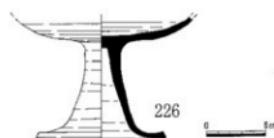
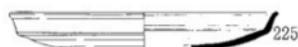
第314図 T34出土土器



第310図 T30出土土器



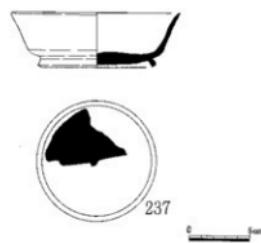
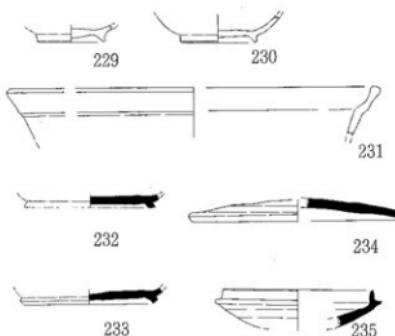
第311図 T31出土土器



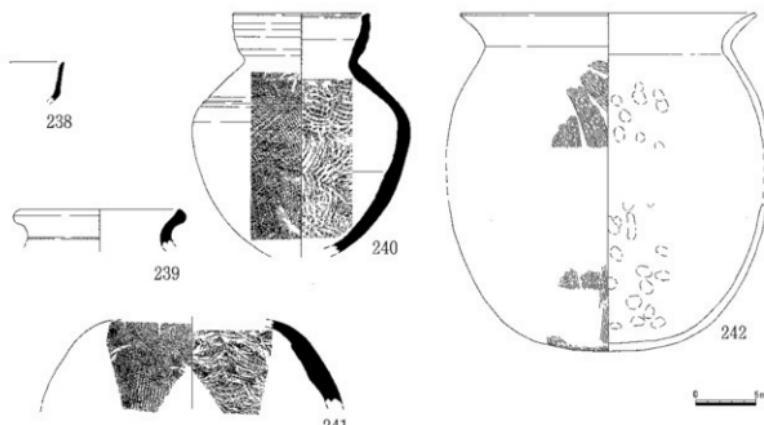
第313図 T33出土土器



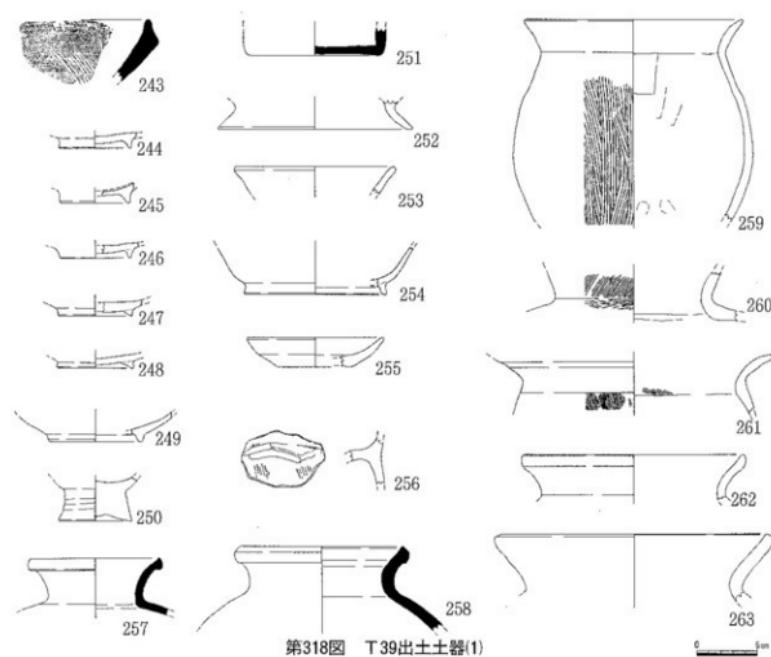
第315図 T35出土土器



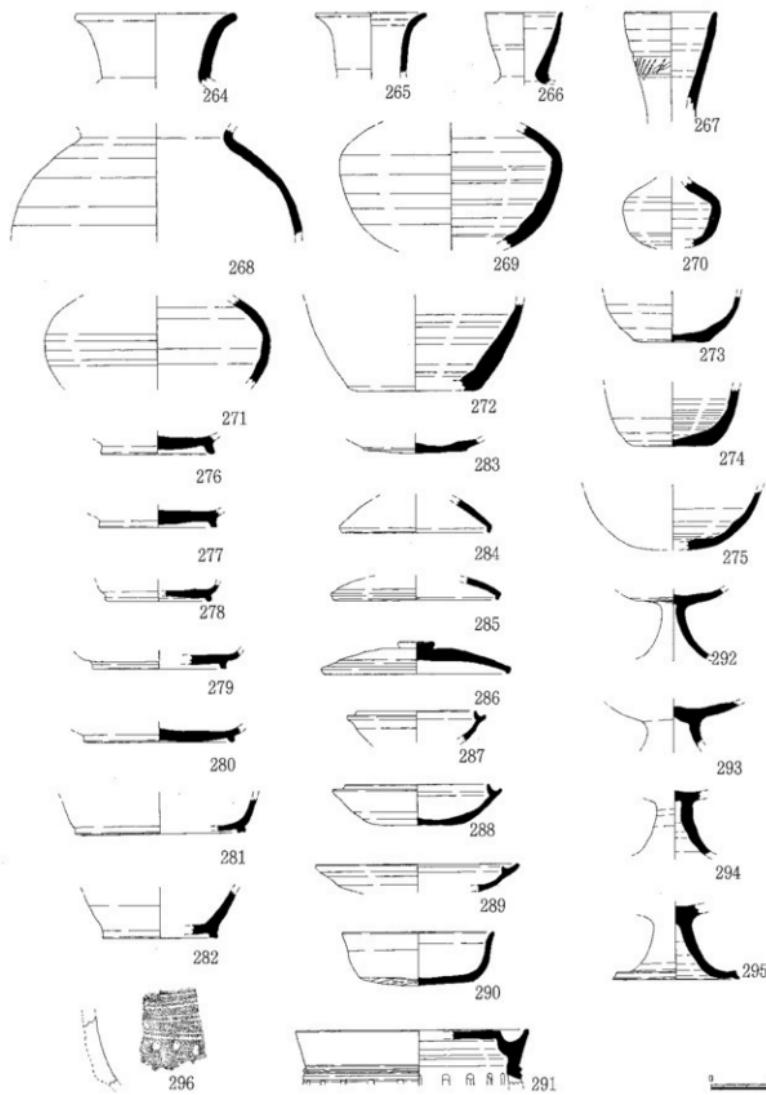
第316図 T38出土土器(1)



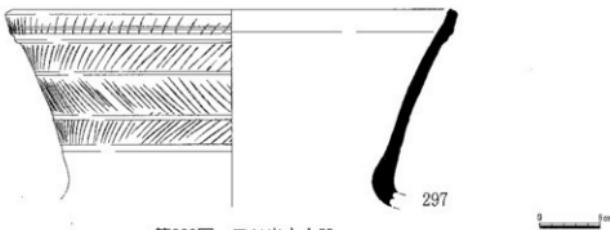
第317図 T38出土土器(2)



第318図 T39出土土器(1)



第319図 T39出土土器(2)



第320図 T41出土土器

の破片である。58は須恵器の杯蓋である。

T9・10出土の土器（第290図）

59は土師質の杯で底部にヘラ切り痕を残す。60は備前焼の擂鉢で15世紀の時期と考えられる。東塔の東方に位置するT10では瓦堆積層から少量の中世土器類と須恵器が出土した。61は須恵器の大型の盤状杯である。時期は7世紀末から8世紀初頭にかけてと考えられる。

T12出土の土器（第291図）

東塔の北辺部にあたるT12では瓦溜まりから土師質土器と少量の須恵器が出土した。62から65は土師質の杯である。68から70は土師質の杯類でいずれも中世と考えられる。67は須恵器の杯底部片で高台が付く。

T13出土の土器（第292図）

東塔の西に位置するT13では瓦溜まりから少量の土器類が出土した。71は白磁の碗である。72から74は土師質の杯類で中世の時期と考えられる。75は須恵器の壺もしくは平瓶、76は須恵器の高杯片である。

T14出土の土器（第293図、第294図）

トレチの中央部付近は寺院廃絶以後は流路となつたため深部まで中世土器が出土する。トレチ西側では炉が検出されており、炉の時期を示すと考えられる土器類も出土している。

77・78は須恵器の杯で、79は須恵器の壺である。80は須恵器の甕で胴部にはカキメが施される。これらは炉上面の堆積層から出土したもので、時期は概ね9世紀から10世紀頃と考えられる。82は白磁の碗である。85は備前の甕口縁で時期は15世紀である。86は須恵器の甕で、外面にはタタキが施され、内面には当て具痕がみられる。

T15出土の土器（第295図）

西塔の西辺に位置するT15では瓦溜まりから少量の土器が出土した。88は白磁の碗である。89は瓦質のこね鉢である。

T16出土の土器（第296図）

西塔北辺部にあたるT16でも土器のほとんどは瓦溜まりからの出土である。90・93は須恵質の杯で90は底部に回転糸切り痕がみられ、93は高台が付く。98は青磁の碗である。100は備前焼の壺で時期は15世紀である。101は須恵器の杯身で造成土層から出土したものであるが、時期は6世紀前半である。102・103は土師質の鍋口縁部である。

T17出土の土器（第297図）

金堂の周囲に形成された瓦溜まりから少量の土器が出土した。104から106は土師質の杯類である。107は青磁の碗である。108は須恵器の耳付き壺片である。

T19出土の土器（第298図）

108は須恵器の耳付き壺片である。114は備前焼の擂鉢で時期は14世紀と考えられる。115・116・117・119は備前焼の壺あるいは壺片で、121は備前焼大壺で、時期は16世紀中頃である。118は瓦質の鉢であり、いわゆる仏具の瓦鉢である。120は脚の付く瓦質の底部片であり大型の香炉もしくは鉢と考えられる。

T20出土の土器（第299図）

122は土師質の鍋である。123は須恵器の壺口縁部であり、大型品に属する。124・125は土師質の杯類と皿である。

T22出土の土器（第300図）

126は青磁の碗である。128は須恵質の杯で底部に回転糸切り痕が見られる。129・130は備前焼の壺である。131は須恵器の甌で132は須恵器の高杯である。これらは寺院の造営以前の遺物である。

T23出土の土器（第301図）

134・135は土師質の杯である。136・137は須恵器の杯蓋、139は須恵器の壺、141は須恵器の壺、142は須恵器の台付鉢である。140は須恵器の壺である。

T24出土の土器（第302図）

143は白磁の合子である。144は須恵器の杯身で、145は平瓶である。時期は6世紀後半頃と考えられ、造成土中からの出土である。

T25出土の土器（第303図）

146から149は土師質の甌で、150は土師質の杯である。151は須恵器の杯底部である。

T26出土の土器（第304図、第305図）

出土した土器の大半は寺院廢絶以後に形成された溝や柱穴にともなうものであるが、168は土師器の杯で内外面に丹塗りが施される。181は瓦器の皿であり、内面には暗文が施される。

185はS D141から出土した鉢である。118と同様にいわゆる仏具としての瓦鉢にあたるとみられる。

T27出土の土器（第306図、第307図）

西塔の南側にあたるT27では瓦溜まりから土器類の大半が出土した。187から190は備前焼の播鉢である。191・192・193は備前の甕もしくは壺の底部である。201から204は土師質の鍋である。204は比較的珍しい器形である。197は青磁の碗で、196は白磁の碗で198は白磁の壺である。

T28出土の土器（第308図）

205は備前の播鉢で時期は15世紀と考えられる。206は青磁碗で207は白磁の碗である。208は土師器の壺で、209は須恵器の壺、210・211は須恵器の高杯で6世紀後半と考えられる。寺院の造成土から出土した。

T29出土の土器（第309図）

215は青磁の碗である。216・217は備前焼の壺であり、時期は15～16世紀である。

T30出土の土器（第310図）

218は須恵器の杯蓋である。

T31出土の土器（第311図）

219は須恵器の壺である。

T32出土の土器（第312図）

220・221は備前焼の甕である。222は白磁の碗、223は須恵器の杯蓋である。

T33出土の土器（第313図）

T33では炉が集中的に検出されているものの、出土した土器はきわめて少量である。224・225は須恵器の皿である。226は須恵器の高杯である。

T34出土の土器（第314図）

227は須恵器の甕口縁部である。時期は6世紀後半である。

T35出土の土器（第315図）

228は須恵器の杯底部である。

T38出土の土器（第316図、第317図）

T38では寺域の東限を画するとみられる溝が検出され、この溝から須恵器の杯類が出土したほか、寺院建立以前の土坑から土師器、須恵器が出土した。

土師質の楕229・230と土師質の鍋231はS D531から出土した。232・233・235は須恵器の杯身、234・236は杯蓋でS D532から出土した。237は転用硯でS D535から出土した。238は須恵器の杯身、239・240・241は須恵器の壺である。242は土師器の甕でS K541から出土した。

T39出土の土器（第318図、第319図）

T39では流土堆積と考えられる砂礫層から多量の土師器、須恵器が出土した。243は擂鉢、251は函鉢でいずれも備前焼である。256は土師器の甕である。291は円面鏡である。

T41出土の土器（第320図）

須恵器の甕口縁部である。

出土土器の様相

トレンチ調査であることの制約上、寺院以外の時期の遺構の広がりについては不明瞭な点が多いが、出土した土器の様相から寺院建立以前及び以降の様相を整理してみたいと思う。

まず、寺院建立以前の土器については、T 7,T15,T24から出土している。最も古いのは、6世紀前半の時期であるが、中心となるのは6世紀後半である。比較的完形に近い須恵器があることから、かつては後期古墳が存在し、それを造成して寺院を建立した可能性が推測される。現況でも、同一山塊の裾部には後期古墳が認められ、さらに6世紀初頭頃の古墳も発掘調査されている。ただし、寺院建立に際し、その直前の時期の古墳を破壊したということは、賞田庵寺の性格を考える上で看過できないことである。具体的な古墳の痕跡を検出していない以上即断すべきではないといえるが、可能性は高いといえる。

7世紀末から8世紀の遺物はある程度認められるが、食膳具に偏る傾向がある。また仏具に関する瓦鉢や灯明皿などが含まれており、遺物としては当然といえる。しかしながら、出土した土器の量としてはそれ程多くないことから、遺物的には生活痕が少ない印象を受ける。当時の生活域からはやや距離をおいて存在していた寺院といえようか。

9・10・11世紀の遺物は比較的多いが、器種が食膳具に偏る傾向は変わらない。また、前時期と比べて遺物の量がやや増える傾向にあることからも、古代寺院（氏寺）が該期を境に衰退する例が多い中で、例外的な状況であるともいえる。

遺物の量・質が明確に変化するのが12世紀後半以降である。食膳具はもとより煮沸具などもある程度量的に伴うようになり、遺物の構成的には一般的な生活空間に転じたことがうかがわれる。しかしながら、瓦経などの遺物もあることから、寺院の空間も存続していたともいえる。あるいは、寺院がこの期になって世俗化したことなのであろうか。

土器観察表

番号	出土地	種別	器形	口径 (cm)	底深・ 高台径 (cm)	器高 (cm)	調査痕	胎土	色調	備考
1	T1 SK11	土師器	杯	不明	8.9	不明	外:ヨコナデ、底部:ヘラ切り後ナデ 内:ナデ?	0.5mm以下の長石・赤色酸化土粒	外・内:灰白色7.5YR8/2	
2	T1 SK11	土師器	杯	不明	不明	不明	外:ヨコナデ 内:ナデ	0.5mm以下の長石・石英	外・内:灰白色2.5YR8/1	
3	T1 褐灰色砂	丹波土師器	皿	10.3	不明	不明	外:ヨコナデ・剥落より調整不明瞭 内:ス付番	0.5mm以下の長石・赤色酸化土粒	外・内:褐7.5YR6/6	口縁部に底付番
4	T1 褐灰色砂	丹波土師器	杯	11.7	不明	不明	外・内:摩滅のため調整不明瞭	3.0mm以下の長石・雲母・赤色酸化土粒	外:褐SYR7/6 内:褐SYR7/6、浅黄緑7.5YR8/5	
5	T1 灰褐色	丹波土師器	杯	12.3	不明	不明	外・内:剥落のため調整不眞切	1.0mm以下の雲母・長石・赤色酸化土粒	外:にふい緑7.5YR7/4 内:褐2.5YR5/6	
6	T1 灰褐色	土師器	杯	12.8	6.4	3.1	外・内・全体に剥落のため調整不眞切	3.0mm以下の長石・赤色酸化土粒	外:にふい緑7.5YR7/4 内:にふい緑7.5YR7/4	
7	T1 SD10	土師器	皿	9.3	3	1.7	外:摩滅のため調整不眞切 内:摩滅のため調整不眞切	1.5mm以下の長石・赤色酸化土粒	外:にふい緑1.0YR7/2 内:にふい緑5.5YR7/4	
8	T1 SD10	土師器	皿	9.75	無	1.9	外・内:摩滅のため調整不眞切	1.5mm以下の長石・赤色酸化土粒	外・内:にふい緑7.5YR7/4	
9	T1 褐灰色砂	丹波土師器	杯	12.8	5.5	2.8	外:ヨコナデ・底留:ヘラ切り 内:ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外・内:褐5YR6/6	
10	T1 褐灰色砂	土師器	皿	11.7	不明	不明	外・内:剥落により調整不眞切	1.0mm以下の長石・赤色酸化土粒	外・内:褐5YR6/6	11と同一組合
11	T1 褐灰色砂	土師器	皿	13.7	不明	不明	外・内:摩滅のため調整不眞切	0.5~1.0mm前後の長石・赤色酸化土粒	外・内:褐5YR6/6	10と同一組合
12	T1 灰褐色砂	土師器	皿	不明	10.3	不明	外・内:摩滅のため調整不眞切	1.5mm以下の長石・赤色酸化土粒	外・内:灰白10YR8/2	
13	T1 褐灰色土 (中部)	土師器	皿	9.56	1.35	2.1	外:ヨコナデ? 摩滅のため調整不眞切 内:ヨコナデ? 黒斑有	1.5mm以下の石英・長石・赤色酸化土粒	外・内:にふい緑1.0YR7/3	
14	T1 灰褐色砂	土師器	台付杯?	不明	5.8	不明	外・内:摩滅のため調整不眞切・黒斑有	0.5~1.0mm前後の長石・赤色酸化土粒	外:にふい緑5YR7/4 YR 内:にふい緑7.5YR7/4	
15	T1 灰褐色	丹波土師器	台付杯	不明	7.9	不明	外・内・摩滅・剥落により調整不眞切 (底部) スズ? 黒斑? 有	0.5~2.0mm前後の長石・赤色酸化土粒	外・内:褐7.5YR7/6	
16	T1 褐灰色土 (中部)	土師器	台付杯	不明	7.25	不明	外・内:ナデ? ヨコナデ? 摩滅のため調整不眞切	1.5mm以下の長石・赤色酸化土粒	外・内:にふい緑7.5YR7/4	
17	T1 灰褐色砂	丹波土師器	台付杯?	不明	6.1	不明	外:摩滅のため調整不眞切 (脚部) 内:摩滅のため調整不眞切 (脚部) 摩滅のため調整不眞切 ユビコサウ	2.5mm以下の長石・石英・赤色酸化土粒	外:褐2.5YR7/6 内:褐2.5YR7/8、浅黄緑1.0YR8/3	
18	T1 上部、灰 褐色土上面剥り	丹波土師器	高台付椀	17	9.3	8	外・内: 不明	微砂	外:褐2.5YR6/8 内:にふい緑7.5YR7/3	
19	T1 褐灰色砂	内黒土器	高台付皿	不明	10.2	不明	外:摩滅のため調整不眞切	0.5mm以下の黒鐵合	外:にふい緑7.5YR7/3 内:暗灰N3/0	
20	T1 上部、灰 褐色土上面剥り	土師器	皿	19.4	なし	2.4	外・内:ナデ?	1mm~2mmの長石・石英	外・内:灰N6	
21	T1 灰褐色	土師器	皿	不明	不明	不明	外:ハガキ(日本/1枚)・黒斑? 有 内:ヨコナデ(日本/1枚)・ヨビコサエ ・黒斑? 有、二つの欠片からなる	4.0ミリ以下の長石・石英・赤色酸化土粒	外:褐灰7.5YR4/1 内:にふい緑7.5Y6/3	新規體大差 (不明)
22	T2 褐褐色土 上面	須恵器	皿	16	なし	2.7	外:ケズリ後ヨコナデ 内:ナデ?、仕上げナデ	0.5mm前後の長石・石英	外・内:BN5/0	
23	T3 SK19	丹波土師器	皿	13.4	11	1.8	外内:ナデ?、底:ヨビコサエ	構造・赤褐色粘合	褐色2.5YR7/8	
24	T3 SK19	丹波土師器	皿	13.4	11	1.8	外内:ナデ?、底:ヘラ切り	赤褐色粘合	淡黃褐色7.5YR8/4	丹波土師器 の丹か剥落か
25	T3 SK19	丹波土師器	台付杯	12.8	4.5	4.5	外内:ナデ?	微砂粒・赤褐色粘合	赤色10R6/8	
26	T3 倒溝 (北)	土師器	台付杯	不明	7.8	不明	外:ヨコナデ、底部:ヘラ切り 内:ナデ?、脚部:ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外:にふい緑7.5YR5/3 内:にふい緑7.5YR6/3 (脚部)にふい緑7.5YR7/3	
27	T3 倒溝 (北)	土師器	小皿	不明	7.7	不明	外:ヨコナデ、底部:ヘラ切り 内:ナデ?、剥落・摩滅のため調整不眞切	0.5mm以下の長石	外・内:にふい緑1.0YR7/3	
28	T3 土師器	杯	10.2	5.7	3.2	外・内:ヨコナデ	0.5mmの長石・石英	外:褐灰5YR5/1、 内:褐SYR6/6	29と同一組合	
29	T3 土師器	高台付杯	不明	5	不明	外・内:ヨコナデ	0.5mmの長石・石英	外:褐5YR7/6、 内:灰褐7.5YR5/2	29と同一組合	
30	T3 土師器	高台付椀	不明	6.6	不明	外・内:ナデ?	微砂	外・内:淡黃褐色1.0YR8/4		
31	T3 土師器	高台付椀	不明	5.8	不明	外・内:ナデ?	0.5mm~1mmの長石・石英	外・内:にふい緑5YR7/4		
32	T3 倒溝 (北)	土師器	高台付椀	不明	5.5	不明	外・内:剥落・摩滅のため調整不眞切	0.5mm以下の長石	外・内:灰褐7.5YR5/2	

番号	出土地	種別	器形	口径 (cm)	底面 高さ (cm)	器高 (cm)	調査度	胎土	色調	備考
33	T3 側溝 (北)	土師器	高台付桟	不明	6.5	不明	外: ヨコナデ・底面縁部が摩滅 内: ナデ・脚部・ヨコナデ・全体 に摩滅のため調整不鮮明	0.5mm以下の長石・石英、赤 色酸化土粒	外: にぶい塵7、5YR7/4、 内: 福良10YR6/1	
34	T3 側溝 (北)	土師器	高台付桟	不明	5.7	不明	外: ヨコナデ 内: ナデ・脚部・ヨコナデ・ナデ*	1.0mm以下の長石	外: 灰5Y6/1、 内: にぶい黄緑10YR7/2(稀)、 褐色5YR5/1(稀)	
35	T3	土師器	杯	不明	5.9	不明	外: ヨコナデ 内: 不明 底: 跡・切り	0.5mmの長石・石英	外: 灰褐7、5YR4/2、 内: 黒褐10YR3/2	
36	T3	土師器	皿	13	7	2.25	外: ヨコナデ 内: 不明	1mm~2mmの長石・石英	外、内: にぶい黄緑10YR7/3	
37	T3 差差舟	丹波土師器	高台付桟	不明	8	不明	外、内: ヨコナデ	0.5mm~1mmの長石・石英	外: にぶい塵7、5YR6/4、 内: 明赤2、5YR5/6	
38	T3 側溝 (北)	土師器	杯?	不明	10	不明	外: 屋根のため調整不鮮明 内: ナデ	1.0mm以下の長石・赤色酸化 土粒	外: 淡黄褐7、5YR8/4、 内: 淡黄褐7、5YR8/3	
39	T3 側溝	須恵器	高台付桟	不明	11.9	不明	外、内: ナデ	0.5mm~1mmの長石・石英	外、内: 灰N6/0	
40	T4 北 灰褐色	須恵器	高台付桟	不明	8.1	不明	外、内: ヨコナデ 底部: ヨコナデ・ヘラケズリ・ナデ*	0.5mm位の長石	外、内: 灰白色7Y8/1	自然難出か り
41	T4 北 灰褐色	須恵器	高台付桟	12.8	9.2	2.9	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ・ヘラケズリ・ヨコナ	0.5mm位の長石	外、内: 灰白色7Y8/1	
42	T4 北 灰褐色	須恵器	杯盤	15.9	無	1.3	内: ヨコナデ・ヘラケズリ・ヨコナ 外: ヨコナデ・ヨコナデ・ナデ	0.5~1mmの長石	外: 灰白色N7/0、 内: 灰褐色6/0	
43	T6	須恵器	杯	不明	4.1	不明	外、内: ヨコナデ・底: 駆止糸切り	0.5mm~1mmの長石・石英	外、内: 灰Y5/6/1	
44	T6	須恵器	杯	不明	6.8	不明	外、内: ヨコナデ・底: 駆止糸切り	0.5mm~1mmの長石・石英	外、内: 灰白2、5Y8/2	
45	T7 側溝	須恵器	ハソワ	不明	不明	不明	外: ヨコナデ・穿孔・カキメ、 内: ヨコナデ・穿孔	1.0mm以下の長石	外、内: 灰N7/0	昭和最大復 (10例)
46	T7 側溝	須恵器	壺?	不明	6.2	不明	外: ヨコナデ 底部: ナデ・工具の痕跡、 内: ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外: 灰N6/0、内: 灰白N7/0	
47	T7 東半瓦窯	土師器	台付盤	不明	不明	不明	外: ヨコナデ・穿孔・ 内: ナデ・脚部・ナデ・穿孔	1.0mm以下の長石	外、内: にぶい黄緑10YR7/2	底中央に外 から穿孔
48	T8 中の下豆皿	土師器	台付杯?	不明	5.4	不明	外: ヨコナデ・全体に摩滅のため調整 不鮮明	0.5mm以下の赤色酸化土粒	外、内: 灰白5YR8/1	
49	T8 中下灰褐色	土師質土器	高台付桟	不明	7.2	不明	外: ヨコナデ 内: ナデ・脚部のため調整不鮮明、 脚部: ヨコナ	2.0mm前の石英、1.5mm以下の 長石	外: 灰白10Y8/2、内: 浅黄褐 10YR8/3、灰白10YR7/ 1(脚部)	
50	T8 中の下瓦窯	土師質土器	高台付桟	不明	6.9	不明	外: ナデ・底縁部が摩滅 内: ナデ・脚部: ヨコナデ	1.0mm以下の砂粒	外、内: 灰白10YR8/1	
51	T8 中の上	土師質土器	高台付桟	不明	7	不明	外: ナデ? 内: ヨコナデ	細砂	外、内: 浅黄褐10YR8/4	
52	T8 中下灰褐色	土師質土器	高台付桟	不明	5.3	不明	外: 脚部のため調整不鮮明 内: 脚部のため調整不鮮明(細部) ヨコナ	0.5mm以下の長石	外、内: 灰白10YR8/2	
53	T8 下灰褐色粘土	土師器	皿	9.3	5.9	1.95	外: ヨコナデ? 内: ヨコナデ・底部: 墓のため調整不鮮明 ヨコナデ・内・外・底部に墨斑	1.0mm以下の長石・赤色酸化 土粒	外: 灰白10Y8/2、 内: 浅黄褐10YR8/3	
54	T8 中下灰褐色	須恵器	杯	9.2	6	不明	外: ヨコナデ・底部: ヘラ切り 内: ヨコナデ	0.5mm以下の長石	外: 灰N6/0、内: 灰白N7/0	
55	T8 下灰褐色粘土	土師器	皿	不明	8.2	不明	外: 脚部のため調整不鮮明・ ヘラ切り? 内: ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外: にぶい塵5YR6/4、 内: にぶい塵7、5YR6/3	
56	T8 中下灰褐色	土師質土器	盤	不明	不明	不明	外: ヨコナデ・ヨコナデ?・剥落 のため調整不鮮明 内: ヨコナデ・ハケ(3本/1枚)	1.5mm以下の長石	外、内: 灰白7、5YR8/2	
57	T8 下灰褐色粘土 (瓦窯上面)	瓦器	脚付盤	不明	不明	不明	外: ナデ 内: ナデ	0.5mm程度の長石・石英	外、内: 灰N4/0	
58	T8 中下灰褐色	須恵器	皿	不明	不明	不明	外: ヨコナデ 内: ナデ	1.5mm以下の長石	外: 灰白5Y7/1、 内: 灰白N7/0	つまみ程 3.6
59	T9 琉球	土師器	皿	7.3	5	1.5	外: ヨコナデ・底部: ヘラ切り? 落着のため調整不鮮明 内: ヨコナデ	0.5~1mmの長石・石英	外: にぶい黄緑10YR7/3、 内: 浅黄褐10YR8/3	
60	T9 琉球	傳前焼	椎鉢	不明	不明	不明	外: ナデ・底部: ヘラ切り? 内: ナデ	1.0mm以下の長石	外、内: 灰白色N7/0	
61	T10 瓦窯	須恵器	瓶状杯	23.4	18.8	2.6	外: ケズリ?後ヨコナデ 内: ヨコナデ	0.5mm~2mmの長石・石英	外、内: 灰白5Y7/1	
62	T12 瓦窯	土師器	皿	8.4	6.5	1.3	外: ヨコナデ・底部: ヘラ切り? 落着のため調整不鮮明 内: ヨコナデ	2.0mm以下の長石	外: にぶい塵7、5YR7/4、 内: 赤褐色7、5YR7/2	
63	T12 瓦窯	土師器	皿	9.9	5	0.95	外: ナデ・底部: ヘラ切り? 内: ナデ	1.0mm以下の長石	外、内: にぶい黄緑10YR7/3	
64	T12 瓦窯	土師器	皿	9.6	6.8	1.05	外: ヨコナデ?全体に摩滅・ 剥落のため 調整不鮮明 内: ヨコナデ・ヘラ切り?	1.0mm以下の長石	外: 灰黄2、5Y7/2、 内: 灰白10YR8/2	
65	T12 瓦窯	土師器	皿	9	5.5	2	外: ヨコナデ・底部: ヘラ切り 内: ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外、内: 明赤灰7、5YR7/2	

番号	出土地	種別	器形	口径 (cm)	底径 ・高台径 (cm)	器高 (cm)	調整痕	胎土	色調	備考
66	T12 瓦塗	土師器	碗	14.1	不明	不明	外:ヨコナデ・ヨコナデ? 内:ヨコナデ?	1.0mm以下の長石・赤色酸化土粒	外:にぶい黄緑10YR6/3、 内:にぶい橙7.5YR7/4	
67	T12 瓦塗	土師器	台付杯	12.9	不明	5.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ・脚部:ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外:灰N5/0、 内:灰N5/0(脚部)、灰白N7 /0(脚部)	
68	T12 褐黒色砂	土師器	碗	不明	5.0	不明	外:ヨコナデ(底部)ヘラ切り 内:ヨコナデ	0.5mm以下の長石	外:にぶい褐5YR7/4、 内:褐5YR7/6	
69	T12 瓦塗	土師器	台付皿	4.4	不明	4.4	外:摩滅・削落のため調整不鮮明 内:摩滅・削落のため調整不鮮明 ヨコナデ	1.5mm以下の長石	外:灰白2.5Y7/1、 内:灰白2.5Y8/1	
70	T12 瓦塗	土師器	台付杯	不明	0.7	不剛	外:ヨコナデ 内:剥離(剥離)・ヨコナデ	1.0mm以下の赤色酸化土粒	外:にぶい黄緑10YR7/2、 内:にぶい黄緑10YR7/4	
71	T13 瓦塗	白磁	碗	15	不明	不明	外:ウツグシリ・ケズリ 内:ウツグシリ	0.5mm以下の砂粒	外:明オリーブ灰2.5GY9/1 (ワクスル)、灰白5Y8/1、 内:明オリーブ灰2.5GY7/1 (ワクスル)	
72	T13 瓦塗	土師器	皿	8.1	5.4	1.1	外・内:ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外・内:にぶい黄緑10YR7/4	
73	T13 瓦塗	土師質土器	高台付碗	不明	5.5	不明	外・内:削落・摩滅のため調整不鮮明 ヨコナデ	2.0mm以下の砂粒	外・内:灰白2.5Y8/1	
74	T13 瓦塗	土師器	高台付碗	不明	0.5	不明	外:ヨコナデ 内:ナデ(脚部)・ヨコナデ	2.0mm以下の長石	外・内:にぶい黄緑10YR7/2	
75	T13 瓦塗	土師器	平底脚部	不明	不剛	不剛	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ・ナデ・脚部張り付け	1.0mm以下の長石	外・内:灰白N7/0	
76	T13 瓦塗	土師器	高杯脚部	不明	不明	不明	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ(脚部)・ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外・内:灰N6/0	
77	T14 SX85上面	土師器	杯	10.5	5.6	2.8	外:ヨコナデ 内:ナデ		外・内:灰白N7/	
78	T14 SX85上面	土師器	杯	17	無	不明	外下半:ケズリ	砂粒含む	外:灰色N6/、内:灰白色N7/	
79	T14 SX85上面	土師器	皿	無	無	不明				鉄物大径 9.8
80	T14 SX85上面	土師器	皿	24.2	無	無	外:カキメ 内:同心円凹き痕	砂粒含む	外:暗灰N3/、 内:灰白色N7/	鉄物大径 26.8
81	丹波土器	土師器	不明	不明	不剛	不剛	外底:ハラミ万キ	砂粒・赤色粒含む	外・内:赤褐色10R6/8	
82	青灰色粗粒	白磁	碗	17	不明	不明			明オリーブ灰2.5GY7/1	
83	瓦質土器	甕付壺	不明	不明	不明	不明		0.5mmの長石、石英	外・内:海灰N3	
84	T14 土師質土器	高台付碗	不明	6.2	不明	外・内:ナデ	0.5mm~1mmの長石、石英	外・内:にぶい黄緑10YR7/3		
85	T14 剥離的	陶	18.4	不明	不明	内:ナデ				ゴマ粒
86	T14 倒調	土師器	皿	17.8	不明	不明	外:タタキ後カキメ 内:当面痕	鐵鉢	外・内:灰白5Y7/1	
87	T15 瓦塗(下)	土師器	甕?	不明	不明	不明	外:縫跡 内:ヨコナデ			
88	T15 瓦塗(上)	白磁	碗	16	8.0	6.95	外・内:造詣			
89	T15 横溝?	瓦質土器	こね鉢	32	不明	不明	外・内:ナデ	1mm~2mmの長石、石英	外・内:灰白2.5Y8/2	
90	T16 瓦塗	土師器	碗	6.05	不明	外・ナデ	外:ヨコナデ、底面:糸切り 内:ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外・内:灰白N7/0	初期焼成?
91	T16 土師器	杯	14.4	9.5	3.4	不明	外:ヨコナデ、底:ヘラ切り 内:ナデ	1mm~2mmの赤色砂粒	外・内:暗5YR7/6	
92	T17 西 浄法師	土師質土器	高台付碗	不明	3.8	3.8	不規則	0.5mm~1mmの長石、石英	外・内:にぶい黄緑10YR7/3	
93	T16 土師器	高台付碗	11.3	5.4	3.6	内:ナデ	ヨコナデ	1mm~2mmの長石、石英	外・内:灰N5	
94	T16 土師質土器	高台付碗	不明	7.4	不明	外:ヨコナデ 内:不明	1mm~2mmの赤色砂粒	外・内:にぶい焼7.5YR7/4		
95	T16 瓦塗	土師器	8.6~ 8.9	7.25	1.15 ~1.3	外:ヨコナデ・底部:ヘラ切り 内:ヨコナデ	2.0mm以下の長石・石英・赤色 酸化土粒	外:横2.5YR6/6、 内:横5YR7/6		
96	T16 瓦塗	土師器	杯	15.1	7.5	3.8	外:ヨコナデ?・底部:ヘラケズリ 内:ヨコナデ?	0.5~1mmの長石、石英	外・内:浅黄色2.5Y7/3	
97	T16 瓦塗	土師器	台付杯	不明	7.8	不明	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ(脚部)・ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外・内:浅黄緑7.5YR8/4	
98	T16 褐褐色	青磁	碗	不明	高台径 6.5	不明				
99	T16 瓦質土器	甕付壺	不明	不明	外・内:ナデ	1mm~2mmの長石、石英	外・内:黄灰2.5Y4/1			
100	T16 備前焼	壺	不明	不明	外・内:ヨコナデ	1mm~2mmの長石、石英	外・内:にぶい赤褐2.5YR5/3			
101	T16 深埋燒褐色土	須磨器	杯身	12.45	筆	5.35	外:ヨコナデ・ヘラケズリ 内:ヨコナデ・ナデ・同心円タチ牛	0.5~1mmの長石	外:、内:	
102	T16 瓦塗	瓦質	罐	28.1	不明	不明	外:ヨコナデ・ユビオサエ 内:ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外・内:灰N5/0	
103	T16 瓦塗	瓦質	罐	30.6	不明	不明	外:ヨコナデ・ユビオサエ 内:ヨコナデ	1.0mm以下の長石・雲母	外:灰黃褐10YR4/2、 内:にぶい褐2.5YR7/4	

番号	出土地	種別	器形	口径 (cm)	底面 ・高台径 (cm)	基盤 (cm)	調査概要	胎土	色調	備考	
104	T 17 東沾褐色	土師質土器	高台付杯	不明	5.4	不明	外、内：不明	0.5mm~2mmの長石、石英	外、内：灰白10YR8/2		
105	T 17 西沾褐色	土師器	台付皿	不明	不明	外、内：不明		0.5mm~2mmの長石、石英	外、内：灰黄2.5Y7/2		
106	T 17 西底部	土師器	杯	不明	8	不明	外：ヨコナデ、底部：ヘラ切り 内：ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外、内：浅黄緑10YR8/4		
107	T 17 西底部	青磁	瓶	不明	不明	不明					
108	T 17 西瓦瀬	須恵器 (灰釉)	耳付壺?	不明	不明	不明				自然釉面か り	
109	T 19	土師器	皿	8.6	8.2	1.85	外：ヨコナデ、底部：糸切り 内：ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外、内：ぶい黄緑10YR7/3		
110	T 19	土師器	皿	11.1	6.6	2.15	外：ヨコナデ、底部：ヨコナデ・穿孔 内：ヨコナデ・穿孔	1.0mm以下の砂粒	外、内：灰白10YR8/2	底部に穿孔 あり	
111	T 4 灰褐色	土師器	盤	8.8~8.6	6.3	3.15	外：ヨコナデ・剥落のため調整不明 内：ヨコナデ・脚部：剥落のため 調整不鮮明・ヨコナデ	1.0mm以下の長石・赤色顔化 土粒	外：ぶい赤褐5YR5/4、内： 橙5YR7/6		
112	T 17 西瓦瀬2	土師器	高台付杯	不明	6.1	不明	外、内：厚底・剥落のため調整不明 壁	3.0mm以下の長石	外：ぶい黄緑10YR7/4、 内：灰白2.5Y8/1		
113	T 17 西瓦瀬2	土師器	杯	不明	4.1	不明	外、ヨコナデ・工具による(?)ヨコナデ、底部：糸切り、 内：ヨコナデ	1.0mm以下の長石・石英	外、内：灰白2.5Y8/1		
114	T 19 備前焼	すり鉢	不明	不明	不明	不明	外、ナ・内、仕上げナデ	2mm~3mmの長石、石英	外、内：灰赤2.5YR5/2		
115	T 19 備前焼	甕	14	不明	不明	内：ヨコナデ	0.5mm~1mmの長石、石英				
116	T 19 備前焼	甕	不明	不明	不明	外、ナ・内：不明	2mm~3mmの長石、石英	外、内：灰褐5YR6/2			
117	T 19 備前焼	甕	不明	不明	外、内：ヨコナデ	1mm~2mmの長石、石英	外：灰褐7.5YR4/2、 内：褐灰7.5YR4/1				
118	T 19 瓦質	鉢	28.4	不明	不明	外：ヨコナデ?・ビヨオサエ工? 剥落のため調整不明	1.0mm以下の長石	外：灰褐2.5Y4/1、 内：灰褐2.5Y6/1		剥落既大傷 (29.2)	
119	T 19 備前焼	甕	不明	不明	外、ナ・内：不明	2mm~3mmの長石、石英	外：灰褐6.5YR5/2、 内：褐灰5YR5/1				
120	T 19 瓦土	土師器	盤	不明	33.4	不明	外：ヨコナデ	0.5~1mmの長石・石英、赤土色・糸切り	外：ぶい黄緑10YR7/3、 内：灰白2.5Y7/1		
121	T 19 瓦質	備前焼	甕	不明	不明	不明	外、内：ナデ	1mm~2mmの長石、石英	外、内：ぶい赤褐5YR5/3		
122	T 20	土師質土器	皿	23.2	不明	不明	外内：ハケメ、口縁：ヨコナデ	0.5mm~1mmの長石、石英	外、内：ぶい赤褐10YR6/3	スヌ普者	
123	T 20	須恵器	甕	49	不明	不明	外：平行タキ7・ヨコナデ、 内：陶内タタキ	0.5~1mmの長石	外、内：灰色N6/0		
124	T 20	土師質土器	高台付杯	不明	5.5	不明	外：ヨコナデ、内：不明	微砂	外、内：灰2.5Y7/2		
125	T 20	土師質土器	皿	7.4	6.6	1.6	外内：不明、底：ヘラクセリ	微砂	外、内：模5YR7/6		
126	T 22 青磁	瓶	不明	4.8	不明	不明	外：陶ケツだし				
127	T 22 丹波土師器	瓶	不明	不明	外内：草葉・剥落のため調節不鮮明	0.5mm以下の砂粒・長石輝か	外、内：模2.5YR6/6				
128	T 22 灰綠色	須恵器	鏡	14.7	7.5	4.6	外内：ヨコナデ、底：糸切り	0.5mmの長石	外：灰N6/0、 内：灰N7/0		
129	T 22 丹波	備前焼	耳付壺	不明	不明	不明	外：草葉による調節不鮮明、ナデ 取っ手付環、内：ヨコナデ、ビヨオサエ工	2.0mm以下の長石、4.0mmの砂 粒一つ	外：模灰5YR5/1、 内：灰赤2.5YR4/2		
130	T 22 丹波	備前焼	甕	不明	不明	外、内：ナデ	1mm~2mmの長石、石英	1mm~2mmの長石、石英	外、内：灰N5	須恵質	
131	T 22 丹波	須恵器	ハソワ	不明	不明	不明	外：工具ナデ・孔・自然釉・沈線2 筆・刻文列文点・内：ヨコナデ			須恵質既大傷 (8.85)	
132	T 22 中瓦瀬	須恵器	高杯	不明	静岡徑 9.1	不明	外：ヨコナデ・すき有、 内：ヨコナデ	2.0mm以下の長石	外、内：灰N5/0		
133	T 22 沖縄色	土師質土器	三足付鍋	不明	不明	外、内：ナデ、内：不明	1.0mm以下の長石	外：赤灰7.5Y7/4、 内：褐灰4.5Y6/1			
134	T 23 南瓦瀬	土師器	台付杯	9.4	5.9	2.3	外、内：ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外：灰白7.5YR8/6		
135	T 23 東瓦瀬下	土師器	台付杯	不明	不明	不明	外：ナデ・ヨコナデ、内：ナデ (脚部)ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外、内：模5YR7/6		
136	T 23 南灰褐色	須恵器	皿	9.6	不明	不明	外、内：ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外：灰N6/0、内：灰白N7/0		
137	T 23 中央土手	須恵器	甕	16.1	不明	不明	外、内：ヨコナデ	2.0mm以下の長石	外、内：灰白N7/0		
138	T 23 南瓦瀬	瓦質土器	鍋	不明	不明	外、手ナデ?、内：ナデ	1.0mm以下の長石	外：模灰2.5Y5/1、 内：灰白N7/0			
139	T 23 中央土手	須恵器	甕	17.6	不明	不明	外：ヨコナデ・自然釉、 内：ヨコナデ	2.0mm以下の長石	外：灰N4/0、内：灰N6/0		
140	T 23 中央土手	須恵器	甕	不明	不明	外、手ナデ?、内：ナデ	1.0mm以下の長石	外：灰N7/0、内：灰白N8/0			
141	T 23 中央土手	須恵器	壺	否?	不明	7.8	外：ヨコナデ、底部：糸切り、 内：ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外、内：灰白N7/0		
142	T 23 南瓦瀬	須恵器	台付鉢?	不明	9.7	不明	外：ヨコナデ、内：ヨコナデ (脚部)ヨコナデ・糸切り無	1.0mm以下の長石	外、内：灰白N7/0		

番号	出土地	種別	器形	口径 (cm)	底径 ・高台径 (cm)	器高 (cm)	調整痕	胎土	色調	備考	
143	T 24	白磁	合子	不明	不明	外: ワクダスリ・文様、内: ワクダスリ	1.0mm以下の砂粒	外・内: 白灰2. 5GY8/1			
144	T 24 盛土中	須恵器	杯身	13.1	無	4.2	外: ヨコナデ・ヘラケズリ、内: ヨコナデ・ナデ	0.5~1mmの長石	外: 灰色7. 5Y8/1、内: 灰白色7/0		
145	T 24 盛土中	須恵器	平瓶	不明	無	外: 楕子型のタキ・ヨコナデ・ヨコナデ後ナデ・ナデ	0.5~1mmの長石	外: 灰色N6/0、内: 灰白色N7/0	残存器高18.4、胸部最大径20.95		
146	T 25 灰褐色	土師器	台付皿	13.5	不明	外: 内: 摩滅のため調整不鮮明	0.5mm以下の長石	外・内: 灰2. 5YR6/6			
147	T 25 灰褐色	土師器	高台付盤	不明	8	不明	外: ナデ、ヨコナデ、内: 不明	1mm~2mmの赤色砂粒	外、内: 灰7. 5YR7/6		
148	T 25 灰褐色	土師器	高台付盤	不明	8	不明	外: ヨコナデ	0.5mm位の長石・赤色土粒、金うらも含む	外: にぶい7. 5Y7/4、内: にぶい褐色7. 5Y6/3	丹塗り?	
149	T 25 灰褐色	土師器	杯	不明	不明	外: ヨコナデ、内: ナデ	0.5mm~1mmの長石、石英	外、内: 浅褐色10YR8/3			
150	T 25 灰褐色	土師器	皿	11	不明	外: ヨコナデ、内: 不明	0.5mm~1mmの長石、石英	外、内: にぶい7. 5YR7/4			
151	T 25 灰褐色	須恵器	高台付杯	不明	13	不明	外: ヨコナデ	砂粒	外、内: 黄灰2. 5Y6/1		
152	T 26 P 246	土師質土器	小皿	7.8	4.7	1.3	外: ヨコナデ、底: ヘラケズリ		浅黄色7. 5YR8/4		
153	T 26 P 282	土師質土器	小皿	8.4	6.2	1.4	外: ユビナデ、底: ヘラケズリ	赤褐色粒を含む	灰白色10YRB/2		
154	T 26 P 319	土師質土器	小皿	9.3	6.8	1.2	外: ヨコナデ、底: ヘラキリ、内: ユビナデ	赤褐色粒を含む	浅黄色7. 5YR8/3		
155	T 26 P 326	土師質土器	小皿	8.4	5.5	1.8	外: ヨコナデ、底: ヘラ切り、内: ユビナデ				
156	T 26 P 397	土師質土器	小皿	8.2	6.2	1.4	外: ヨコナデ、底: ヘラ切り	砂粒・赤褐色粒	褐色5YR7/6		
157	T 26 淡褐色	土師質土器	小皿	8.2	5.2	1.8	外: ヨコナデ、底: ヘラ切り、内: ヨコナデ・ナデ	0.5~1mmの長石			
158	T 26 淡褐色	土師器	皿	12.65	9.05	2.78	外: ヨコナデ (底部) ヘラケズリ、内: ヨコナデ	0.5mmくらいの覆石	外: にぶい7. 5YR7/4、内: にぶい褐色10YR7/4		
159	T 26 淡褐色	土師器	皿	12.9	10.2	2.5	外: ヨコナデ (底部) ヘラケズリ、内: ヨコナデ	0.5~1mmの長石、0.5~2mmの赤色土粒混	外・内: 浅褐色10YR8/3		
160	T 26 淡褐色	土師器	皿	12.7	8.6	3.1	外: ヨコナデ (底部) ヘラケズリ、内: ヨコナデ	0.5mm位の長石とし、0.5mm位の赤色土粒含む	外: にぶい7. 5YR7/4、内: 浅黄色7. 5YR8/4		
161	T 26 P 266	土師質土器	皿	13.5	7.4	2.8	外: 摩滅のため調整度は不明	赤褐色粒を含む	褐色5YR7/6		
162	T 26 P 146	土師質土器	高台付皿	不明	5.6	不明	外: ナデ		砂粒微量、赤褐色粒含む		
163	T 26 P 287	土師質土器	高台付盤	不明	5.5	不明			灰白色2. 5Y8/1		
164	T 26 P 283	土師質土器	高台付盤	不明	6.4	不明		砂粒・赤褐色粒含む	灰白色2. 5Y8/1		
165	T 26 淡褐色	土師質土器	高台付盤	不明	5.6	不明	外: ヨコナデ・ナデ・内: ナデ? (脚部) ヨコナデ・ナデ	0.5~1mmの長石・石英	外・内: 灰白色2. 5Y8/2	残存高3. 2	
166	T 26 淡褐色	土師質土器	高台付盤	14.2	6.5	5	外: ヨコナデ・ユビオサエ、内: ヨコナデ (脚部) ヨコナデ	0.5~5mmの長石多	外: 浅黃褐色10YR8/3、内: 灰白色2. 5Y8/1		
167	T 26 SD141下層	土師質土器	高台付盤	14.3	6.1	5.2	外: ヨコナデ、内: ナデ	1.5mm以下の石英	外: 灰白2. 5Y8/1、内: 灰白2. 5Y8/1		
168	T 26 P 222	丹塗土師器	台付杯	不明	7.1	外: ヨコナデ、内: ヨコナデ? 摩滅のため調整不鮮明 (底部) ヨコナデ	0.5~2mm前後の長石、赤色土粒・黒母を含む	外: にぶい褐色5YR8/2、内: にぶい褐色5YR7/4 (杯) 灰白2. 5Y8/2 (脚)			
169	T 26 淡褐色	須恵器	高台付盤	14.7	6.0	5.4	外: ヨコナデ、内: ヨコナデ	0.5mmくらいの長石	外・内: 灰色5Y6/1		
170	T 26 SD141	土師器	高台付盤	16.6	6.6	5.6	外: ヨコナデ (底部) ヨコナデ、内: ヨコナデ? 重ね燒き痕アリ	0.5mm位の長石	外・内: にぶい褐色7. 5YR7/4		
171	T 26 淡褐色	丹塗土師器	高台付盤	16.2	6.1	5.9	外: ヨコナデ・ユビオサエ・赤色顔料、内: ヨコナデ・ユビオサエ・赤色顔料 (脚部) ヨコナデ・ユビオサエ	0.5~1mmの長石・石英、半シングルモ合む	外: 浅黃褐色10YR8/3、内: にぶい褐色7. 5YR7/4		
172	T 25	土師器	杯	11.35	6.2	4.75	外: ヨコナデ、内: ヨコナデ	0.5~1mm位の長石、石英	外: にぶい褐色5YR6/3、内: 灰白7. 5YR8/2		
173	T 26 段状造構	土師質土器	高台付盤	不明	5.5	不明	外: ナデ、内: ミガキ	砂粒含む	灰白色2. 5YR8/2		
174	T 26 段状造構	土師質土器	高台付盤	16	6.8	4.9	外: 砂粒微量		灰白色2. 5Y8/1		
175	T 26 淡褐色	綠釉	皿	不明	6.0	不明	外: 施釉、内: 施釉 (脚部) 施釉		外、内:		
176	T 26 P 151	土師器	杯	不明	7	不明	外: ヨコナデ、内: ヨコナデ	0.5~1.5mm前後の長石・黒母・赤色顔料化土粒を含む	外: にぶい褐色5YR6/3、内: にぶい褐色5YR7/4		
177	T 26 淡褐色	土師器	高台付盤	不明	13.6	外: ヨコナデ、内: ナデ	0.5~1mmの長石・石英、赤色土粒含む			残存高5.7	
178	T 26 SX217	土師器	高台付皿	16	高台径8.4	2.9	外: ナデ、高台: ケズリ	砂粒・赤色粒含む	褐色2. 5YR7/8		
179	T 26 SD395	土師質土器	皿	17	12.4	2.7	外: ヨコナデ、内: ナデ	赤褐色粒を含む	灰白色10YRB/2		

番号	出土地	種別	巻形	口径 (cm)	底径 (高台径) (cm)	壁厚 (cm)	調査状況	胎土	色調	備考	
180	T26 淀南邑 白磁	有耳壺	不規	7.5	不規	ケズリだし高台				現存高20.8	
181	T26 P312	瓦器	小皿	9.7	7.2	1.5cm	内：ナデ・根文様三ガニ 外：ヨコナデ・底端：平行タクキ	0.5~1mmの長石	外・内：灰褐色N4/0		
182	T26 倒溝 須惠器	甌	15.9	8.8	4.0cm	外：ヨコナデ・底端：ホ切り底、 内：ヨコナデ・ナデ	0.5mmの長石	外・内：灰白Y5B/1	初期備前焼		
183	T26	土師質器	鏡	34.9	不規	不規					
184	T26 SD362	土師質器	鏡	33.4	不規	不規					
185	T26 SD141下層	須惠器	鉢	不規	不規	不規					
186	T26 SD141	丹波土師器	皿	13.6	不規	外：ヨコナデ、内：ヨコナデ	淡沙粒、赤色粒	外・赤褐色10R6/8			
187	T27 瓦器 備前焼	すり鉢	不規	不規	不規	不規	1mm~2mmの長石、石英	外・内：黒、灰7、5YR4/1			
188	T27 瓦器 備前焼	すり鉢	不規	不規	不規	外：ナデ・内：カキメ	1mm~2mmの長石、石英	外・内：赤褐色10YR5/1			
189	T27 瓦器 備前焼	すり鉢	不規	不規	不規	外：ヨコナデ・ヨウチャク痕、 内：ヨコナデ・カキメ	1.0mm以下の長石	外・赤褐色10Y5/3、 内・灰赤10R4/2			
190	T27 瓦器 備前焼	すり鉢	20.5	不規	不規	外：ヨコナデ・ヨウチャク痕、 内：ヨコナデ・カキメ	1.0mm以下の長石	外・内：淡青褐色2、5YR3/2			
191	T27 瓦器 (備前焼?)	壺	不規	12.5	不規	外：ヨコナデ・余剰粘土、 内：ナデ	1.5mm以下の長石	外：褐色10YR6/1、にぶい黒 縹10YR7/2(底)、 内：褐色5YR5/1	底部：木の 埋立痕		
192	T27 瓦器 備前焼	壺	不規	不規	不規		1mm~2mmの長石、石英	外・内：淡青褐色2、5YR5/3			
193	T27 瓦器 備前焼	壺	不規	19	不規	外：ナデ・ヨコナデ?・ケズリ(底) 内：工具跡有り・ナデ、 内：ヨコナデ	0.5~3.0mm前後の長石	外・灰N6/0、 内：褐7、5YR5/1			
194	T28 SE218	備前焼	壺	42.4	不規	不規	外：ヨコナデ・ハケメ(タテ・5本/ cm)・ハメ(ナメ・5本/cm)、 内：ラケズリ・ナデ、内：ヨコナデ・ ハケメ(ナメ・4本/cm)・ナデ	0.5~1.5mmの長石、石英	外・内：灰色2、5Y8/1	胴部最大径 61.7	
195	T27	土師質土器	高台付碗	不明	6.6	不規	不規	0.5mm~1mmの長石、石英	外・内：灰白10YR8/2		
196	T27 瓦器 白磁	高台付碗	不規	6.1	不規	内・外：		外・内：		残存器高 3.35	
197	T27、T28 青磁	碗	不規	不規	不規						
198	T27 造成土 白磁	壺?	不規	9.4	不規	外：ウワフシリ、 内：ウワフシリ(脚部) ヨコナデ	1.0mm以下の砂粒	外・灰オーブ7、5Y6/2、 内・灰オーブ7、5Y6/2、 灰白5Y7/1			
199	T27 瓦器 須惠器	小皿	不規	不規	不規	外：ヨコナデ・輪、文様、 内：ヨコナデ	0.5mm以下の長石	外・灰10Y6/1(輪無し)、 内：にぶい黒縹10YR7/1			
200	T27 瓦器 須惠器	壺・壺?	不規	不規	外・内：タクキ	1mmの長石、石英	外・内：黄灰2、5Y6/1				
201	T27 瓦器 瓦質土器	莉釜	21.4	不規	不規	外：ヨコナデ・張り付け有、 内：ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外・内：灰Y5/1			
202	T27 瓦器 瓦質土器	附付鍋	27.4	不規	不規	外：ヨコナデ・穿孔(外から内へ)・ ビコビサ(裏側)、内：ヨコナデ・ 穿孔		外・褐灰10Y4/1、 内・灰白N7/0	胴部最大径 (31.4)		
203	T27 瓦器 土師質土器	鏡	33.9	不規	不規	外：ヨコナデ・ヘラナデ? 指ナデ?、 内：ヨコナデ	2.0mm以下の長石	外・内：褐色5YR7/3			
204	T27、T28 瓦質土器	附付鍋	10.1	不規	外・ナデ、内：ナデ	0.5mm程度の長石、石英	外・内：灰黃2、5Y7/2				
205	T28 SK493	備前	建跡	不明	14.6	不規	外：ヨコナデ	0.4~10mmの長石、石英	外・内：明褐色7、5YR7/1		
206	T28 造成土 青磁	碗	不規	不規	不規	外：文様、内：		外・内：			
207	T15 傾溝 白磁	碗	不規	不規	不規						
208	T28 淀南邑	土師器	壺	7.95	無	外：ヘラミガ牛残る・ハケメ残る、 内：ハケメ・ヘラケズリ、 内：ハケメ残る	0.5~2mmの長石、石英多	外・にぶい黄褐色10YR6/3、 内：褐色7、5YR6/6	胴部最大径 9.75		
209	T28 南隅 淀南邑	須惠器	壺?	不規	不規	外：ヨコナデ・ヨウチャク痕、 内：ヨコナデ・ナデ	0.5~1mmの長石	外・内：灰褐色5Y6/1	胴部最大径 12.2		
210	T28 たちわ り寺院造出土	須惠器	高杯	10	不規	外：ヨコナデ、 内：ヨコナデ・ナデ	0.5~1mmの長石	外・灰色N6/0、 内・灰白色N7/0	残存器高 4.4		
211	T28 掛土 須惠器	器台					0.5mm位の長石	外・灰褐色N5/0、 内・灰褐色N6/0			
212	T28 中 淀南邑	須惠器	壺	6.4	なし	外：ナデ・ケズリ・ヨコナデ、 内：ヨコナデ	砂	外・内：灰褐色5Y7/1	最大径： 10.5		
213	T28 中 淀南邑	須惠器	壺	10.6	なし	外：ナデ、内：ヨコナデ	砂	外・内：灰白2、5Y7/1	最大径： 12.8		
214	T28 中 淀南邑	須惠器	杯身	13	不明	外：ヨコナデ、 内：ヨコナデ	2mm前後の長石、石英	外・内：青灰5PB5/1	最大径： 15		
215	T29 青磁	碗	不規	5.4	不規						
216	T29 須惠器	壺	不規	不規	外・内：ヨコナデ	0.5mm~1mmの長石、石英	外・内：灰N4				
217	T29 須惠器	壺	不規	不規	外・内：ヨコナデ	0.5mm~1mmの長石、石英	外・内：灰N6				
218	T30 傾溝 須惠器	杯蓋	14.6	7.2	4.3	外：ヨコナデ・ナデ	0.5~1mmの長石、石英	外・内：灰褐色N6/0			

番号	出土地	種別	器形	口径 (cm)	底径・ 高台径 (cm)	標高 (cm)	調整度	施土	色調	備考	
219	T 31	黄褐色 (灰白色)	壺	10	不明	不明	内: 施釉、外: 施釉		褐釉		
220	T 32	側削頭	壺	不明	不明	不明	外、内: ヨコナデ	1mm~2mmの長石、石英	外、内: 青灰2、5YR4/1		
221	T 32	側削頭	壺	不明	不明	不明	外、内: ヨコナデ	1mm~2mmの長石、石英	外、内: 褐灰10YR5/1		
222	T 32	白磁	壺	不明	不明	不明	外、内: 不明				
223	T 32	須惠器	壺	不明	不明	外: ケズリ後ヨコナデ、 内: ヨコナデ、仕上げナデ	0.5mm前後の長石、石英	外、内: 灰N6/0			
224	T 33 解2-3灰墨	須惠器	盤	19.4	なし	3.1	外: ヨコナデ、ヘラケズリ、 内: ヨコナデ	0.5mm位の長石	外: 灰色7、5Y6/1、 内: 灰白色7、5Y7/1		
225	T 33 第3剖面	須惠器	盤	21.8	不明	3.1	外: ヨコナデ、ヘラケズリ、 内: ヨコナデ	0.5mm位の長石	外: 灰色7、5Y6/1、 内: 灰色7、5Y5/1		
226	T 33 第3剖面	須惠器	高环	不明	10.4	不明	外: ナデ、ヘラケズリ、内: ナデ	0.5mm位の長石	外: 灰色7、5Y6/1、 内: 灰白色7、5Y7/1		
227	T 34 SX 5.37炉壁面	須惠器	壺	18.9	不明	不明			外、内: 灰N6/		
228	T 35	須惠器	高台付杯	不明	8.6	不明	外、内: ヨコナデ	0.5mm~1mmの長石、石英	外、内: 灰5Y5/1		
229	T 38 SDS51	土師質土器	高台付楕	不明	5.6	不明	外内: ナデ	砂粒含む	灰白色2、5Y8/2		
230	T 38 SDS51	土師質土器	高台付楕	不明	6.4	不明		砂粒大含む	灰白色2、5Y8/2		
231	T 38 SDS51	土師質土器	楕	30.6	不明	不明	外: ハケナデ、内: ヨコナデ		橙色7、5YR7.66	スヌ付着	
232	T 38 SDS52	須惠器	台付杯	不明	高台径 10.8	不明	外内: ヨコナデ	砂粒含む	灰白色N7~8/		
233	T 38 SDS52	須惠器	台付杯	不明	高台径 10.8	不明	内: ナデ、高台: ヨコナデ、 外: ケズリ	砂粒含む	灰白色N7/		
234	T 38 SDS52	須惠器	壺	17.8	なし	不明	外: ケズリ+ナデ、内: ナデ		明青灰色5PB7/1		
235	T 38 SDS52	須惠器	杯舟	12.2	不明	不明	外内: ヨコナデ		灰白色N8~/~7/		
236	T 38 SDS54	須惠器	壺	11.8	不明	不明	外: ケズリ+ナデ、内: ナデ	砂粒粘合	外: 褐灰N8/2、 内: 灰白色N8/		
237	T 35 SDS53	須惠器	台付杯	13.8	高台径 9.6	4.5	外内: ナデ、高台: ケズリ	砂粒を含む	灰白色5Y8/1	高台内腹付着	
238	T 38 SK54.1	須惠器	杯	不明	不明	不明	外内: ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外: 灰N6/0、内: 灰N5/0		
239	T 38 SK54.1	須惠器	壺	13	不明	不明	外: ヨコナデ+沈、内: ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外: 灰白N7/0		
240	T 38 SK54.1	須惠器	壺	10.8	不明	不明	外: ヨコナデ+沈、内: ナデ+タキ タキ(横子目タキ)と普通のタキ(タキ? ハケ?)、内: ヨコナデ+当て具痕	1.0mm以下の長石	外: 灰白N7/0、内: 灰N6/0	崩れ最大径 (17.75)	
241	T 38 SK54.1	須惠器	壺	不明	不明	不明	外: タタキ+ナデ、内: 当て具痕	0.5mm以下の長石	外: 海灰7、5YR5/1、 内: 灰白N7/0		
242	T 38 SK54.1	土師器	壺	23.7	無	27.6	外: ヨコナデ+沈、内: ヨコナデ+ナデ、 タキ(横子目タキ)と普通のタキ(タキ? ハケ?)、内: ヨコナデ+当て具痕	1.0mm以下の長石・赤色酸化 土粒・砂粒	外・内: 须惠器10YR8/4		
243	T 39 倒溝	側削頭	すり鉢	不明	不明	不明	外: ヨコナデ、内: ヨコナデ+カホメ	2.0mm以下の長石	外・内: 灰赤10R4/2		
244	T 39	土師質土器	高台付楕	不明	不明	不明	外: ヨコナデ、内: ヨコナデ、圓印: ヨコナデ+ヘラ切り?	0.5mm以下の石英	外・内: 灰白2、5Y8/1		
245	T 39	砂漬層	土師質土器	高台付楕	不明	5.5	不明	外: ヨコナデ、内: ヨコナデ、圓印: ヨコナデ+ヘラ切り?	1.0mm以下の長石	外: 灰白10YR8/1、 内: 灰白10YR8/2	
246	T 39	砂漬層	土師質土器	高台付楕	不明	5.8	不明	外: ヨコナデ、内: 摩滅、圓印: ヨコナデ+カズレ	1.0mm以下の長石	外・内: 须惠器7、5YR8/4	
247	T 39	砂漬層	土師質土器	高台付楕	不明	6	不明	外: ヨコナデ、内: 摩滅、圓印: ヨコナデ+カズレ	1.0mm以下の長石	外・内: 灰白2、5Y8/1	
248	T 39	砂漬層	土師質土器	高台付楕	不明	6.1	不明	外: ヨコナデ+カズレ、内: 摩滅、圓印: ヨコナデ+カズレ	1.0mm以下の長石・石英	外: 灰白2、5Y8/2、 内: 漆黄2、5Y8/3	
249	T 39 倒溝	土師器	台付杯	不明	7.4	不明	外: 摩滅により磨耗不鮮明、ヨコナデ 内: 摩滅により磨耗不鮮明、圓印: ヨコナデ	1.0mm以下の長石・赤色酸化 土粒	外: にぶい緑7、5YR7/4、 内: 漆黄5YR8/4		
250	T 39 倒溝	土師質土器	壺	不明	5.8	不明	外: ヨコナデ、内: ヨコナデ、圓印: ヨコナデ+カズレ、内: 摩滅、圓印: ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外・内: 灰白5YR6/6		
251	T 39	側削頭	鉢	不明	10.3	不明	外: ヨコナデ、底面: ヘラ切り、 内: ヨコナデ	2.0mm以下の砂粒	外: 磁赤鉢2、5YR3/2、 内: にぶい赤鉢2、5YR4/2		
252	T 39 倒溝	土師器	台付杯	不明	15.7	不明	外・内: ヨコナデ	0.5mm以下の長石	外・内: 灰5YR6/6		
253	T 39	砂漬層	土師器	杯	12.8	不明	外: 内: 摩滅、圓印のため磨耗不鮮明 有機物付着、内: 摩滅、圓印のため 調整不鮮明	1.0mm以下の長石	外・内: にぶい緑7、5YR7/4		
254	T 39	砂漬層	須惠器	台付杯	不明	11.4	不明	外: 内: 摩滅、圓印のため磨耗不鮮明 有機物付着、内: 摩滅、圓印のため 調整不鮮明	1.0mm以下の長石	外・内: 灰白N8/0	
255	T 39 痴溝	土師器	皿	11	2.4	6	外・内: 内: 摩滅により調整不鮮明	0.5mm以下の長石・赤色酸化 土粒を含む	外・内: にぶい緑7、5YR7/3		
256	T 39 痴溝	土師器	壺	不明	不明	不明	外: ハク+ナデ+ユビオサエ、 内: ユビオサエ+ナデ	1.0mm以下の長石・赤色酸化 土粒	外: 漆赤器2、5YR7/4、 内: にぶい緑5YR6/4		

番号	出土地	種別	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調 整 症	胎 土	色 調	備考	
257	T 39 側溝 滅惑器	甕	10.6	不明	外: ヨコナデ、内: ヨコナデ、ナデ	0.5mm~1mm前後の長石	外: 灰白N7/0、 内: 灰白N7/0				
258	T 39 砂漠層 滅惑器	甕	13.2	不明	外: ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外・内: 明灰赤5B7/1				
259	T 39 砂漠層 土師器	甕	17.5	不明	外: ヨコナデ・タキ、 内: ヨコナデ・当て具痕	2.0mm以下の長石・砂粒	外・内: にびい黄橙10YR7/3	頭部最大径 (19.5)			
260	T 39 土師器	甕	不明	不明	外: ハケ(5本/6mm)・ミガキ、 内: ナデ・ケズリ	1.0mm以下の長石・赤色酸化土粒	外: にびい模様5YR7/4、 内: 緑5YR7/6				
261	T 39 土師器	甕	不明	不明	外: ヨコナデ・ハケ(5本/5mm)、 内: ヨコナデ・タケ・ケズリ	1.0mm以下の長石・赤色酸化土粒	外: にびい黄橙10YR7/3、 内: にびい黄橙10YR7/2				
262	T 39 砂漠層 滅惑器	甕	17.7	不明	外: ヨコナデ・剥落のため調整不整 内: ヨコナデ	1.0mm以下の長石・石英	外・内: 灰白NB7/0				
263	T 39 砂漠層 滅惑器	甕	21.6	不明	外・内: ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外: 灰N6/0/6/0、 内: 灰白N7/0				
264	T 39 側溝 滅惑器	甕	12.7	不明	外・内: ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外: 灰N6/0、 内: 青灰5PB6/1				
265	T 39 滅惑器	甕	8.5	不明	外: ヨコナデ・沈線? 1条、 内: ヨコナデ	2.0mm以下の長石	外・内: 灰白N7/0				
266	T 39 側溝 滅惑器	甕	8.2	不明	外: ヨコナデ、内: ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外: 灰白T7/0、 内: 灰白N8/0	平底口縁 西?			
267	T 39 砂漠層 滅惑器	甕	7.4	不明	外: ヨコナデ・内: ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外・内: 灰白N7/0				
268	T 39 滅惑器	甕	不明	不明	外・内: ヨコナデ	2.0mm以下の長石	外: 灰白N7/0				
269	T 39 砂漠層 滅惑器	甕	不明	不明	外: 補強(吹けかけ)・ヨコナデ・ タキ後づき、内: ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外: 黄灰2.5Y6/1、 内: 緑オーブ灰2.5GY3/1、 内: 灰白N7/0	頭部最大径 (18.1)			
270	T 39 滅惑器	ハソウ?	不明	不明	外: ヨコナデ・ケズリ、 内: ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外: 灰N6/0、内: 灰白N7/0	頭部最大径 (8.0)			
271	T 39 滅惑器	壺?	不明	不明	外: ヨコナデ・ケズリ、 内: ヨコナデ	2.0mm以下の長石	外・内: 灰白N7/0	頭部最大径 (18.4)			
272	T 39 側溝 滅惑器	壺	不明	9.4	不明	外・内: ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外: 灰白T7/0、 内: 灰白N7/0、 灰白NB7/0			
273	T 39 砂漠層 滅惑器	杯	不明	8.3	不明	外: ヨコナデ、底部: ヘラ切り、 内: ヨコナデ	2.0mm以下の長石・石英	外: 灰白T7/0、 内: 灰白NB7/0			
274	T 39 砂漠層 滅惑器	甕	不明	6.4	不明	外: ヨコナデ	2.0mm以下の長石	外: 灰N3/0、 内: 灰N6/0、 灰N4/0			
275	T 39 砂漠層 滅惑器	甕	不明	無	不明	外・内: ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外: 灰N3/0、 内: 灰白N7/0			
276	T 39 砂漠層 滅惑器	台付杯	不明	8.95	不明	外: ヨコナデ、内: ヨコナデ、脚部: ヨコナデ・ヘラ切り	1.0mm以下の長石・石英	外: 灰N4/0、内: 灰N5/0	瓦礫土化 している		
277	T 39 砂漠層 滅惑器	台付杯	不明	9.95	不明	外: ヨコナデ・ナデ・ヘラ切り	1.0mm以下の長石	外・内: 灰N7/0			
278	T 39 砂漠層 滅惑器	台付杯	不明	8.1	不明	外: ヨコナデ、内: ヨコナデ、脚部: ヨコナデ	0.5mm以下の長石	外・内: 灰白N7/0			
279	T 39 側溝 滅惑器	台付杯	不明	10.9	不明	外: ヨコナデ、内: ナデ、脚部: ヨ コナデ・ヘラ切り	2.0mm以下の長石・石英	外: 灰白N8/0、 内: 灰白N8/0、反白N7/0			
280	T 39 砂漠層 滅惑器	台付杯?	不明	11.9	不明	外: ヨコナデ、内: ヨコナデ・ナデ、 脚部: ヨコナデ・ヘラ切り	1.0mm以下の長石	外・内: 灰白N8/0			
281	T 39 側溝 滅惑器	台付杯	不明	9.1	不明	外: ヨコナデ、内: ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外: 灰5Y7/1、 内: 灰N6/0			
282	T 39 砂漠層 滅惑器	台付杯?	不明	9.2	不明	外: ヨコナデ、内: ヨコナデ、脚部: ヨコナデ・ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外・内: 灰N6/0			
283	T 39 側溝 滅惑器	杯	不明	8.4	不明	外: ヨコナデ?、底部: ヘラ切り、 内: ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外・内: 灰白N8/0			
284	T 39 砂漠層 滅惑器	甕	12	不明	不明	外・内: ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外・内: 灰N7/0			
285	T 39 砂漠層 滅惑器	甕	13.2	無	不明	外: ヨコナデ、内: ヨコナデ	0.5mm以下の長石	外・内: 灰白NB7/0			
286	T 39 側溝 滅惑器	甕	14.9	不明	不明	外: ヨコナデ・ケズリ、 内: ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外・内: 灰N7/0	つまみ足 (3.0)		
287	T 39 砂漠層 滅惑器	杯身?	不明	9.8	不明	外・内: ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外: 灰N6/0、内: 灰N7/0			
288	T 39 砂漠層 滅惑器	杯身?	不明	11.8	3.3	外: ヨコナデ、底部: ヘラ切り(?) 脚部ナデ式或は螺旋形、内: ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外・内: 灰N6/0			
289	T 39 砂漠層 滅惑器	杯身?	不明	16.3	不明	外: ヨコナデ・ケズリ、 内: ヨコナデ・有機物付着	1.0mm以下の長石	外・内: 灰N7/0			
290	T 39 砂漠層 滅惑器	杯	12.2	4.35	9.25	外: ヨコナデ、底部: ケズリ、 内: ヨコナデ	1.0mm以下の長石	外: 灰白5Y7/1、 内: 灰白N7/0			
291	T 39 滅惑器	円鏡面	17.9	不明	不明	外: ヨコナデ	0.5mm位の長石少し	外・内: 灰色N7/0	自然釉		
292	T 39 側溝 滅惑器	高坏	不明	不明	外: ヨコナデ、内: ヨコナデ、脚部: ヨコナデ	1mm以下の長石	外: 灰白N7/0、 内: 灰白N7/0				
293	T 39 砂漠層 滅惑器	高杯	不明	不明	外: ヨコナデ、内: ヨコナデ、脚部: ヨコナデ	1.0mm以下の石英・赤色酸化土粒	外・内: 灰白N8/0				
294	T 39 砂漠層 滅惑器	高坏縫	不明	不明	外: ヨコナデ、内: ナデ、脚部: ヨ コナデ・ナデ残り	1.0mm以下の長石	外・内: 灰白N7/0/7/0				
295	T 39 滅惑器	高坏縫	不明	10.15	不明	外: ヨコナデ、内: ヨコナデ、脚部: ヨコナデ	2.5mm以下の長石	外: 灰N6/0、内: 灰N5/0			
296	T 39 乳生土器	甕	不明	不明	外: 沈線7条・竹筋文(2コ1セツ) 内: 刃部・割れ・断面に黒斑	1.0mm以下の長石	外: 淡青5YR8/4、内: 不明				
297	T 41 表土~砂漠	須恵器	甕	35.6	不明	外: ヨコナデ、刺文四列・凹縫4 条・自然釉、内: ヨコナデ	1.5mm以上の長石	外: 黄灰2.5Y5/1、 内: 黄灰2.5Y6/1			

第4節 金属製品

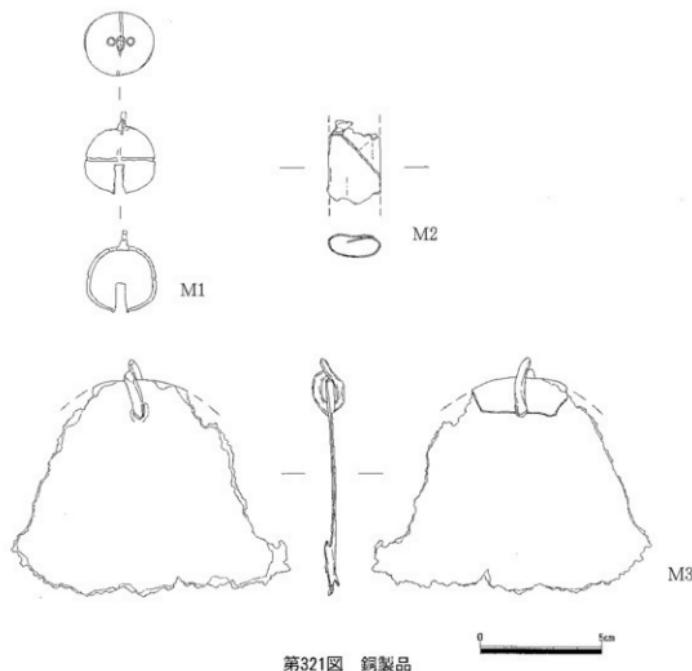
賞田廃寺の発掘調査で出土した金属製品はごく僅かである。ここでは賞田廃寺に関連すると推定される銅製品と鉄釘について記述する。

銅鈴（第321図）

M1は銅鈴である。T26のP279より出土した。造構の時期は中世ではあるが、銅鈴は古代のものと思われる。

不明銅製品（第321図）

M2は西塔中央部の基壇造成土層から出土した。厚さ0.1cmほどの板状の銅製品を巻いたものである。鏡壺具の一部である可能性も考えられる。



第321図 銅製品

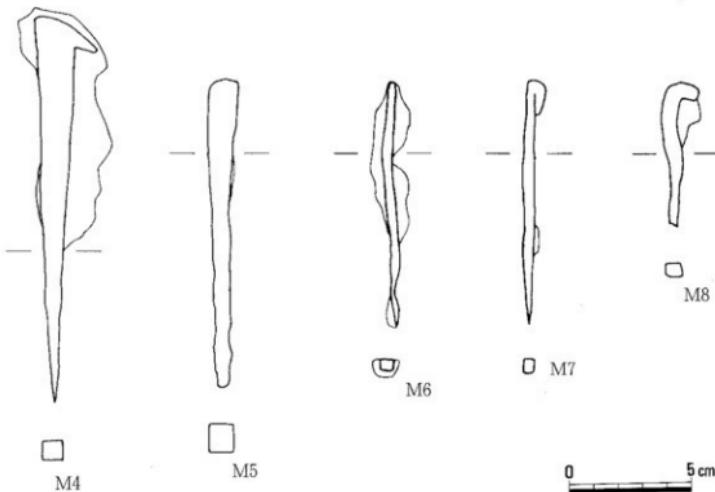
風鐸（風招部）（第321図）

M 3は風鐸の風招部である。T23の西塔基壇東側の瓦溜まりから出土した。断定はできないものの塔に使用されていたと推定される。

鉄製品（第322図）

鉄製品は鉄釘5点が出土した。そのほとんどが瓦溜まりから出土したものである。

M 4は完形で、全長16cm、最も太いところで一辺1.5cmの角釘である。M 5は現存長12.5cm、最も太いところで一辺1.3cmである。M 6は現存長10.0cm、最も太いところで一辺0.5cmである。M 7は全長10.0cm、最も太いところで一辺0.5cmである。頭部は端部を折り曲げて整形している。いずれも瓦溜まりから出土しており、しかも瓦の大半は古代の時期であることから、寺院の建物に伴うもののか可能性が高いように思われる。しかしながら、サイズは様々であり、数も限られていることから、全てを寺院の建物に帰属させることは困難のように思われる。しかしながら、M 4については、かなり大きな部類に属するものであり、一般的な建物に使用されたものとは考えられない。したがって、瓦溜まりから出土した鉄釘には寺院の建物に属するものがあるものの、出土数が少ないことからも、その多くが再利用などによって抜き取られたものと思われる。



第322図 鉄釘

第5節 石製品

石材・石製品

擦管（第323図）

T28の西塔南方の瓦堆積層上層の真砂土（近世）から出土した。外径25.5cm、高さ27.2cmの筒状で、内径は15.5cm、深さ13.0cmである。外面は滑らかに調整されているが、内面には加工痕である鑿痕が明瞭に残っており、仕上げ加工を施してはいない。これは、塔相輪部の擦管と考えられる。岡山県下の古代寺院において、相輪部品が出土しているのは関戸廃寺跡などで、凝灰岩製の相輪としては奈良県の山村廃寺跡の例がある。

凝灰岩切石積基壇（壇上積基壇）化粧石各部品

S2は東塔で出土した延石で、長さ87cm、幅34.0cm、厚さ13.6cmである。S3は東塔で出土した地覆石で、長さ88.4cm、幅33.3cm、溝幅11.0cmである。S4は西塔で出土した延石で、長さ92.5cm、幅43.0cm、厚さ14.4cmである。S5は西塔で出土した地覆石で、長さ92.2cm、幅44.4cm、厚さ15.1cm、溝幅11.5cmである。S6は西塔で出土した地覆石で、長さ86.5cm、幅43.0cm、厚さ15.5cm、溝幅14.5cmである。S7は西塔で出土した延石で、長さ83.0cm、幅43.0cm、厚さ13.4cmである。S8は西塔で出土した延石で、長さ91.0cm、幅37.9cm、厚さ16.2cmである。S9は東塔で出土した地覆石で、溝幅は18.5cmである。S10は東塔で出土した地覆石で、溝幅17.1cmである。S11は東塔で出土した羽目石で、長さ46.0cm、幅37.2cm、厚さ9.5cmである。S12は西塔で出土した束石である。東塔と西塔の基壇化粧石を比較すると、石材は極めて類似しているが、サイズが異なる。西塔の方が一回り大きい。

両塔はほぼ東西に並んで、同一プランで建築された様相を呈しているが、おそらく前後関係があるものと考えられる。それについては、出土した瓦でも確認されている。また両塔に使用されたものとは異なるサイズのものがあり、両塔以外にも基壇化粧石を用いた建物があったことを示唆している。しかし、これについては現況では不明である。

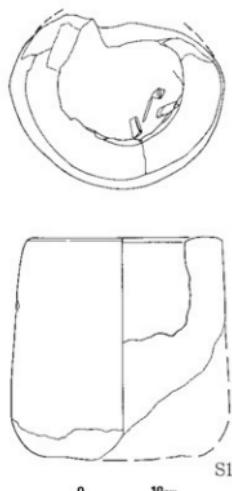
礎石

礎石1（第325図）

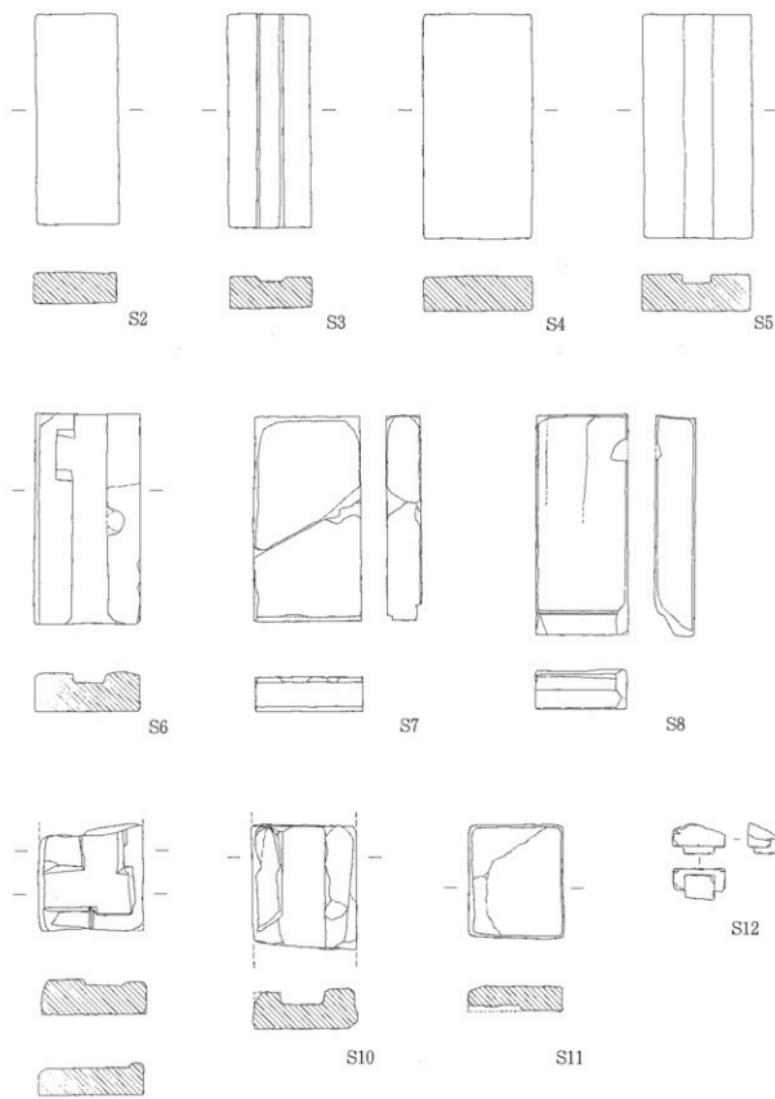
西塔の北西コーナー付近で出土した礎石で、花崗岩製である。上面を径約50cmの円形に若干掘り窪めている。

礎石2（第325図）

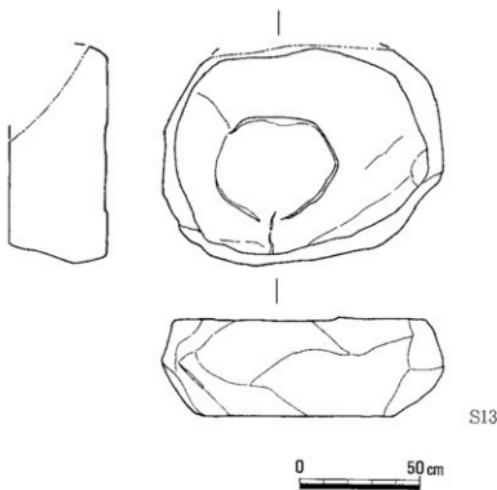
西塔の北側で出土した礎石で、花崗岩製である。上面を径約38cmの柱座として削りだしている。



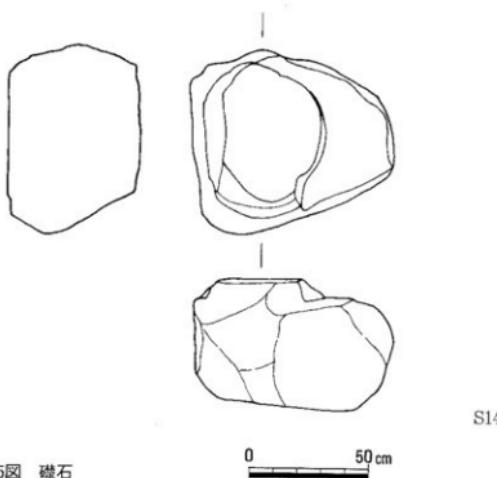
第323図 擦管



第324図 基壇化粧石 (S=1/20)



S13



S14

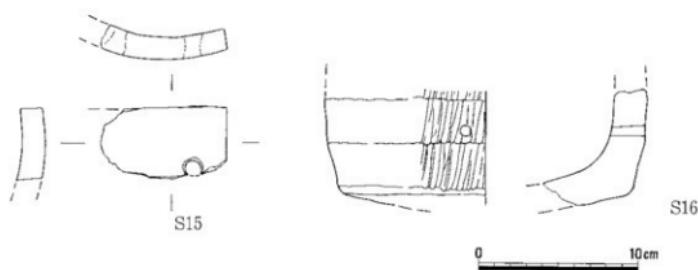
第325図 磚石

石鍋（第326図）

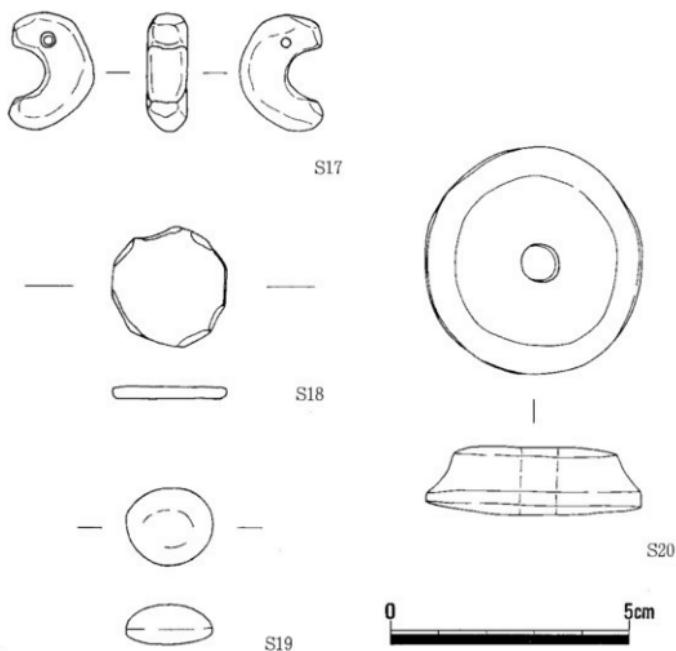
いずれも中世に属する時期のもので、滑石製である。

その他の石製品（第327図）

S17・S18はいずれも滑石製で、勾玉と鏡形石製品である。S20は石製紡錘車で、これも滑石製である。いずれも古墳時代に属するものである。S19は西塔で出土したもので、碁石と考えられる。時期は不明であるが、古代の可能性も考えられる。



第326図 石鍋



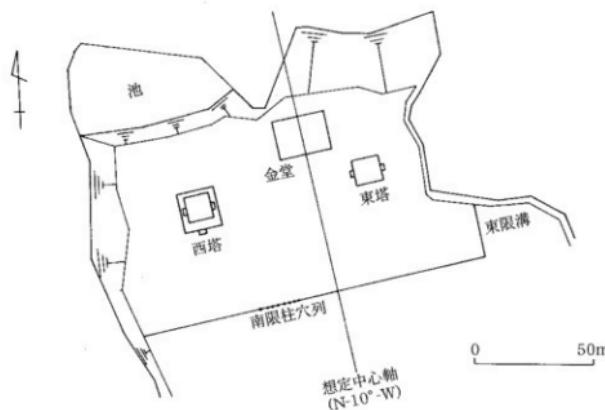
第327図 石製品

第6章 考察

第1節 伽藍配置と堂塔の変遷

今回の調査によって、賞田廃寺には東西方向に並ぶ2つの塔が存在していたことが明らかとなった。東塔については、前回の調査によって存在は確認されていたが、西塔については部分的なトレンド調査であったことや、想定していた伽藍配置との関係から西門としていたものである。ただし、門にしては規模が大きいことや、堂・塔に遜色のない壇上積基壇が施されていること、西面にそのような門を建築する理由が明らかでないといった疑問点が存在していた。したがって、西門が西塔になったことにより、それらの疑問は一応解決したといえよう。

また、寺域の南限については前回の調査で南の築地とされる位置付近から東西方向の柱穴列が検出された。当初築地とされていたものについては、中世の地下げの痕跡であることが確認されたが、柱穴列に平行する東西方向の溝も認められたことから、かなり削平の影響を受けているが、それらが築



第328図 伽藍配置

地に伴う雨落溝であった可能性はあると思われる。柱穴列の時期は、埋土から出土した土器を見る限り9世紀後半から10世紀にかけてであり、寺院当初のものではない。築地に関する明確な根拠は少ないが、柱穴列と平行する方向性を有する溝を築地の痕跡とすると、当初は築地塀が南限施設としてあったが、後に板塀になったと理解される。また、柱穴列は2条あることから何度も作り替えられたようである。寺域南東部では南北方向の溝が検出されており、それが柱穴列の方向とほぼ直交することから、寺域の東限と考えられる。すなわち賞田廃寺は、南側と東側については人工的な遮蔽施設

によって画されていたのである。それでは北側と西側についてはどうであろうか。これらの部分は、丘陵部と接しており、全体に築地や板塀などを設置することは困難である。さらにこれらの部分の地形の形状をみると、南限と東限の方向性とかなり近い。発掘調査によって寺域内は中世以降、かなり人為的地形の改変を受けていることがわかっているが、その影響を考慮しても寺域に則した地形の造成が背後の丘陵地形にも及んでいたことが推測されるのである。そうすると、賞田廃寺の中心伽藍域は東西約150m、南北約80mの長方形を呈していたと想定されるのである。

次に伽藍配置について整理しておきたい。確認されているのは東西の両塔と金堂だけである。金堂は、礎石が本来の位置のままで残存していたものが1個検出されたことによって示されているように、南側をのぞくと、全体的な残存状態は良好であった。しかしながら、塔のように基壇化粧は認められなかった。前回の調査では、後世の改変の結果であるが結果として乱石積基壇であったとされる。今回の調査では基壇化粧の石積などは全く検出されなかった。そのため金堂がどのような基壇化粧であったかについてはよくわからないが、金堂裾部や周囲から多量の瓦が出土しており、当然金堂建物に属する可能性が最も高いわけではあるが、1つの可能性として瓦積基壇であったことも推測しておきたい。また、両塔とはサイズの異なる壇上積基壇の部品が検出されており、それらが金堂の基壇に本的には用いられていた可能性もある。いずれにせよ、金堂の化粧基壇については、現況ではやや不明瞭であるといえる。

しかもしも、寺院の中心建物である金堂よりも塔の方にだけ壇上積基壇が採用されていたとするとき、その理由については、それらの堂・塔の建築順序に関係してくる。賞田廃寺から出土した瓦からすると、その創建時期は飛鳥期である。しかしながら飛鳥期の建物については未検出で、瓦の量も極めて少ないのである。おそらく一部に瓦を象徴的に用いる程度の小堂が当初の賞田廃寺であったと考えられる。本格的な建築物の出現は白鳳期であり、金堂が建築される。この期に属する瓦は飛躍的に増加するが、現況では金堂以外の建物は検出されていない。奈良時代に入ると東・西の両塔が建築される。ただし、両塔は基壇化粧石材のサイズが異なることや、それぞれから出土する軒丸瓦の範囲の進行具合を追求した結果などから東塔が先に建築されたといえる。つまり、小堂→金堂→東塔→西塔の順に寺院が整備されていったのである。そして、奈良時代に造営された塔については当時の最も格の高い基壇様式である壇上積基壇が採用されたのである。この事情については、賞田廃寺の造営氏族の動向を反映させていると考えられるが、これについては後で触れたい。したがって、金堂が壇上積基壇ではなかったのは、賞田廃寺の造営氏族が興隆する奈良時代にはすでに建築されていたからということも考えられる。さらに、想像を逞しくするならば、その興隆は塔造営の後に金堂を改変するまでは続かなかつたということなのではなかろうか。『日本書紀』によると、飛鳥寺は塔に先立って金堂と回廊が完成しており、山田寺も発掘調査の成果によると、金堂が最初に完成している。賞田廃寺に最初に建築された小堂も、おそらく金堂であって、白鳳期に本格的な寺院として建立された時点でも金堂がまず整備されたということなのであろう。

さて、前回の調査でも課題として残っていたものに講堂の存在がある。幾つかの候補があったが、今回の調査でも検出することはできなかった。伽藍配置からすると、金堂の背後が適地と考えられるが、検出されておらず、また想定した伽藍域が正しいとすると、金堂の背後は寺域外となるため、現

況ではその位置に講堂を想定することは無理である。講堂だけが後世に全く削平されてしまったということがない限り、講堂は存在していなかったと考えざるえないと思われる。地方寺院においては、伽藍配置が畿内の寺院のように整備されていたというわけではないことを示す事例の1つになるようにも思われる。この問題については、中央氏族と地方氏族の安定性や性格などの質的な相違に起因するのではなかろうか。

さて、それでは金堂・東西両塔の配置について整理しておきたい。これらのうち金堂が最も古いことや、金堂の方向性に平行して両塔や南限域が設定されていることから、建物配置の基軸になるのは金堂であることは明らかである。したがって金堂の中心に中心軸(N-10°-W)を設定するが、東・西両塔はその軸線に対してシンメトリーにはならない。最も後出して建築された西塔を除外して考えてみると、金堂の正面左側に塔が位置することになる。背後に講堂の存在が現況では認められないものの、金堂と東塔の配置は大官大寺の伽藍配置に通じる。大官大寺式の伽藍配置は、国分寺の伽藍配置として採用されている事例が多い。また、大官大寺式伽藍配置は、それ以前の飛鳥寺や川原寺などのいわゆる飛鳥諸寺と比べると金堂の前に空間地を確保していることに大きな相違がある。金堂前に空間地を設定することは平城京の諸寺にも通じることであり、奈良時代の寺院の中央的な要素の1つといえる。この空間地については、仏教行事や儀式がおこなわれた場であるとされる。そうすると、最後に築かれた賞田廃寺の西塔はこの空間地を確保するために西よりに建築されたということが考えられる。

煩雑となつたため、若干整理してみると、賞田廃寺は白鳳期から奈良期に本格的な寺院として整備された当初は、当時の最先端の伽藍配置である大官大寺式の伽藍配置を意識していたが、後に西塔を建築する状況が生じたため大官大寺式の要素である金堂正面の空間地を確保する必要から西塔を西よりに建築したというのである。したがって、当初は二塔を配置する薬師寺式のような伽藍配置でなかったことから、金堂中軸にシンメトリーとなるような塔配置にならなかったのである。大官大寺式の伽藍配置は、大官大寺の名が示すように、東大寺が建立されるまでは国家的仏教行事の拠点であり、国分寺の伽藍配置にもよく認められることは、地方における影響も多大であったことを示している。中央でも有力な寺院にしか採用されていない壇上積基壇が存在していることからも、中央との関係において賞田廃寺の建立がすすめられたと考えられ、その際に中央の最先端の伽藍配置を導入した可能性は十分考えられるといえる。

それでは、後に西塔を建築した事情とはどういうものであったのだろうか。この点については明確な理由はわからないが、『続日本紀』にててくる寺院統合令(靈亀元年)などが参考になるのではなかろうか。寺院統合令とは壇越が没落して荒廃した寺院を統合して維持せよという内容であるが、賞田廃寺の西塔についても別の寺院の塔を移築したという可能性を推測するのである。こう考えると、大官大寺式の伽藍配置であった金堂と東塔に、西塔をいわば別院のような格好で付属させたということになる。そのため、西塔については、1塔で1院を構成しなくてはいけないことから東塔よりも基壇を多くめぐらすような莊嚴化が施されたのではなかろうか。この問題については、賞田廃寺だけでなく統合されたと推測される寺院の発掘調査などの事例も必要となってくるために、俄には解決できないが、現況では1つの可能性として考えておきたい。

第2節 備前国府との関係

旭東平野の中央には備前国府の推定地が存在している。それは賞田廃寺跡と幡多廃寺跡の中間に位置することになり、両寺が同じ軒瓦を共有することによってうかがわれる緊密な関係に楔を打ち込んだかのような景観にある。両寺が極めて有力な在地豪族の氏寺であったとすると当然の立地といえるのかもしれない。備前国府については、『和名類聚抄』において三野郡に国府があったと記されているが、三野郡は旭西平野である。旭西平野には今のところ国府に比定されるような遺跡は見あたらぬ。この点を国府所在地を否定する根拠にはならないが、旭東平野には平城宮で用いられた軒瓦と極めてよく似た瓦が濃密に分布している。それらを出土する遺跡を個々にみてみると、官衙的な性格のうかがわれる遺跡が主体である。軒瓦の文様分布の傾向については、単に造営氏族の好みや造瓦集団の動向に依拠した経済的な理由も考えられるが、瓦葺建物が地方においては極めて希な存在であることを考えると、それらの背後には極めて政治的な要因が存在していたと考えざるえない。さらに、そのような状況にあって選択される軒瓦の文様についても同様であろう。そうすると、平城宮式系の軒瓦については、畿内中央との極めて緊密な関係のあったことを示唆していると考えられる。旭東平野における平城宮式軒瓦の分布の中心は、旭東平野の備前国府推定地付近である。これは畿内中央との緊密な関係の中心がこの場所にあったことを示しているとすると、やはり最も可能性の高いのは、「国府市場」の地名が残っていることからも、備前国府である可能性が高いといえる。

備前国府については政府の調査が行われていないため直接的な比較はできないが、関連遺跡であるハガ遺跡や南古市場遺跡と比較すると、国府の整備は賞田廃寺の白鳳期の整備に後出し、奈良時代における莊厳化にやや先行するようである。また、国府の存続期間であるが、南古市場遺跡では9世紀後半の食膳具を多量に廃棄した溝もしくは河道が検出されており、その中には綠釉陶器や越州窯産青磁が含まれている。遺物の組成からみても普通の遺跡とは考えられず、対応するような巨大な建物等は検出されていないが、国府に関係する遺跡と考えられる。南古市場遺跡の北には古代山陽道が接しており、その東が国府中枢地に比定されている。付近に国府関連官衙等が存在する可能性は高いといえる。ハガ遺跡は国府に付属する寺院的な官衙である国府寺と考えられている。ハガ遺跡は12世紀中頃まで存続していることが確認されており、その初源である8世紀から一貫して同地に存在していた。これはこの官衙が付属する備前国府も同地に存続していたことを示唆している。

いずれにせよ、賞田廃寺の発掘調査によって国府整備に先行して周辺氏寺の整備がおこなわれたことが明確になったといえる。詳細な検討は、備前国府中枢部の様相が発掘調査によって明らかにされた時点でおこなう必要があるが、現時点では地方官衙と在地豪族造営の氏寺との関係を示す1つの典型である可能性を指摘しておきたい。

第3節 賞田廃寺の造営氏族

賞田廃寺は備前国上道郡にあり、属する郷についても近世の文献から推測すると上道郷である。上道とは吉備における有力な在地豪族である上道氏に通じるものであり、上道郷はその本貫地と考えられる。賞田廃寺の西側に位置するが、巨石墳である唐人塚古墳もあることから、古墳時代後期からの在地における中枢地であることは間違いないであろう。さらに、上道氏の1人である上道斐太都（正道）は橘奈良麻呂の謀反を藤原仲麻呂に密告した功を契機に中央官人として昇進し、朝臣の姓まで賜姓される。この斐太都の栄達と賞田廃寺や幡多廃寺の整備が時期的に一致することから、両寺は上道氏の氏寺と考えるのが妥当といえる。さらに、居都廃寺も両寺と軒瓦を共有することから、居都廃寺も上道氏の一族の氏寺と考えられる。同じ郡内に3寺もの氏寺を建立できていることは、上道氏の在地での勢力の高さがうかがわれる。斐太都以降に中央で活躍する上道氏はいない。この点と賞田廃寺に講堂が存在しないことは無関係とは思われないが、今のところ断定する材料はない。ただし、以降に上道氏が在地的にも没落した訳ではなさそうである。巨視的には賞田廃寺背後に相当する山上にある高倉神社の石鳥居の額には、大願主の神主として上道康哉の刻銘がある。年号は正慶元年（1332）である。高倉神社の石鳥居額銘は、上道氏が中世になんて旭東地域にある程度の勢力を有していたことを示しており、賞田廃寺が中世まで存続する寺院であったことと軌を一にしていたということにもなる。

参考文献

- 出宮徳尚他『賞田廃寺発掘調査』賞田廃寺発掘調査団 1971年
- 出宮徳尚他『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市遺跡調査団 1975年
- 出宮徳尚「古代寺院址」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987年
- 草原孝典『ハガ遺跡』岡山市教育委員会 2004年
- 独立行政法人奈良文化財研究所編『大和山田寺』2003年
- 木下正史『飛鳥幻の寺 大宮大寺の謎』株式会社角川書店 2005年

第4節 出土瓦の様式と分布状況

1次調査時に貫田廃寺出土瓦の様式設定がなされたが、今回の調査で新しく出土した瓦も多数あるので改めて様式整理を試みた。1次調査時との様式設定との混乱を避けるため、1次調査の様式区分を踏襲することとした。丸瓦・平瓦については複数様式にまたがってとらえざるを得ないものがある。

貫田廃寺第1様式は、軒丸瓦1・2類、行基丸瓦1類、平瓦1類とする。飛鳥様式ではあるが、より厳密には金堂創建以前の瓦群ととらえておきたい。素弁の軒丸瓦1・2類が外縁内側を蓮弁と同数の角をもたせて縁取る点、瓦当縦断面形は内溝する点、瓦当裏面を全体に指押さえをし、外周に沿ってなでて端部が断面三角形状に盛り上がる点、丸瓦を瓦当裏面上端に沿った浅い接合溝に接合し、凹面に少量の補足粘土を貼り付けている点、丸瓦・平瓦が小格子叩き目をナデ消している点などからすれば7世紀第2四半期とみておきたい。

貫田廃寺第2様式は、軒丸瓦3類・軒平瓦1類・行基丸瓦2類・平瓦2類・不明瓦K311である。叩き目の類似性からすると鶴尾がこれに加わるとみられる。金堂創建に関わる瓦群である。素弁の軒丸瓦3類・頸部に凸帯を貼り付ける特異な形状の軒平瓦1類からすると、複弁の軒丸瓦や重孤紋の軒平瓦出現以前、7世紀第3四半期ととらえておきたい。

貫田廃寺第3様式は、軒丸瓦4類・軒平瓦2類・玉縁丸瓦1類～5類・繩叩き目の平瓦10類である。東西両塔の創建に関わる瓦群は、2つの重層建物の建立や瓦当面の崩傷の進行から、比較的長い期間の製作が見込まれ、8世紀中頃から後半と広くとらえておきたい。なお、丸瓦・平瓦については後続様式との重複が考えられる。

貫田廃寺第4様式は、複弁の軒丸瓦5類・軒丸瓦8類、重孤紋の軒平瓦3類・軒平瓦4類、平瓦3類～9類である。金堂建立以後両塔建立以前の瓦群で、出土数の少なさからみても主に金堂の差しかえに関わるものとみられる。7世紀第4四半期から8世紀前半ととらえられ、軒丸瓦5類は丸瓦接合位置が下にさがっていることから8世紀前半とみられる⁽¹⁾。

貫田廃寺第5様式は軒丸瓦6類・軒平瓦5類・玉縁丸瓦1類～5類・繩叩き目の平瓦10類である。軒瓦は平城宮式6225・6663型式系で、東西両塔の創建に関わる瓦群である。丸瓦・平瓦については3様式と同様に軒瓦との明確な対応関係がとらえられず、3様式と共用とみておきたい。また、後続様式との重複も考えられる。平城宮での時期⁽²⁾をさかのぼり得ないので8世紀中頃から後半ととらえておきたい。

軒平瓦5D類は陰陽逆転した範型を使い、しかも瓦当面と範型の形状が一致しないことからより運れるとみられる。軒平瓦6類～9類も同じく5様式の中でも新しい一群としてとらえられよう。

貫田廃寺第6様式は軒丸瓦9類・10類・11類・12類・軒平瓦10類～16類・行基丸瓦3～13類・不明丸瓦1類・2類・平瓦11類～22類とする。ただし、丸瓦・平瓦については第7様式と重なるものがあると思われる。9世紀から12世紀にかけての瓦群で、軒平瓦13類については姫路市本町遺跡出土軒平瓦B R 9との紋様対比から12世紀中頃から後半にかけてと位置づけられる⁽³⁾。

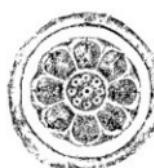
貫田廃寺第7様式は軒丸瓦13類・軒平瓦17類・18類、瓦質の玉縁丸瓦6類・離れ砂を施す平瓦23類である。軒丸瓦13類・軒平瓦17類の巴の頭部が肥大化していないことや、蓮珠紋軒平瓦の法隆寺での位置づけ⁽⁴⁾から鎌倉時代と考えられる。



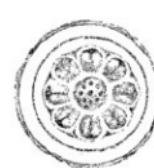
1類



2類



3A類



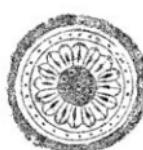
3B類



4類



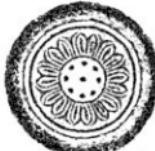
8類



5類



6A類



6B類



6C類



11類



9類



12類



7類



10類

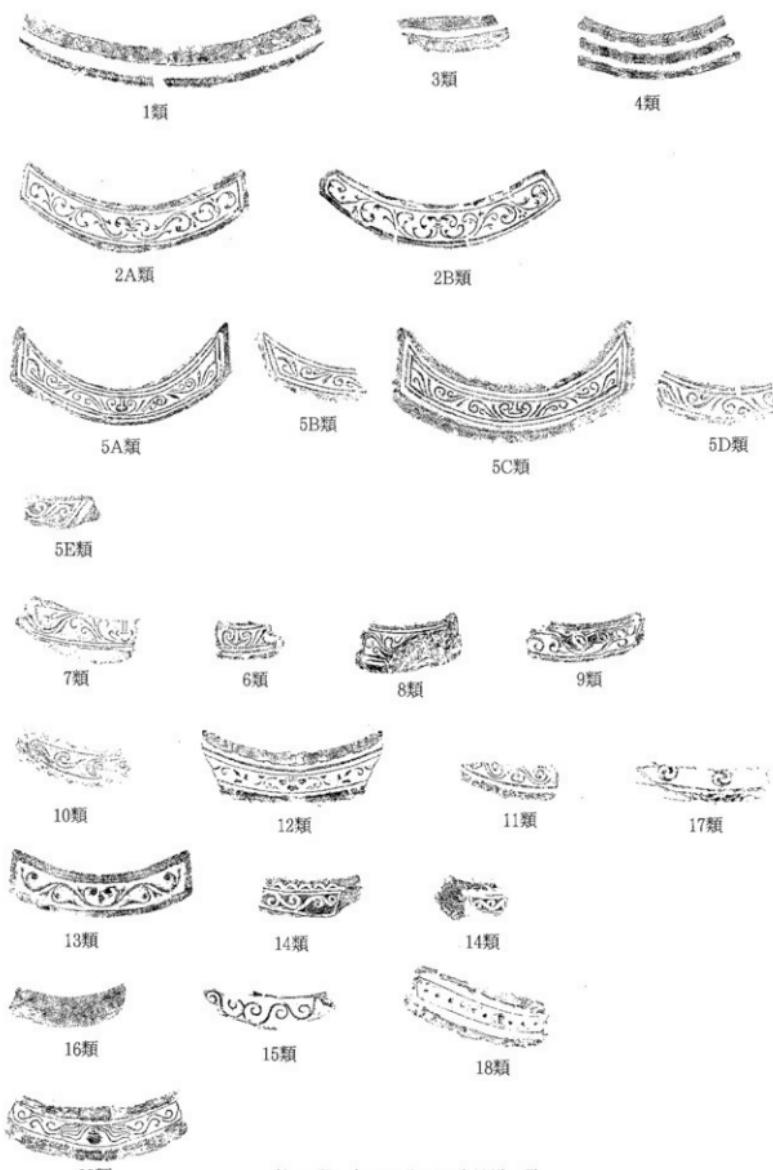


13類

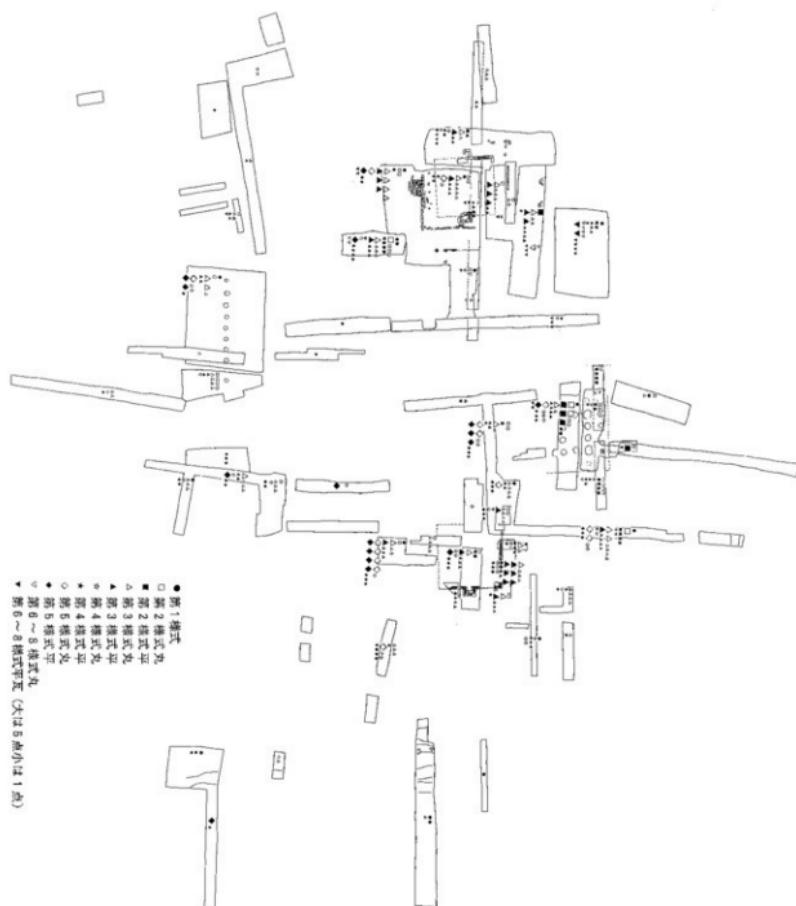


14類

第329図 軒丸瓦復原瓦当紋様一覽



第330図 軒平瓦復原瓦当紋樣一覽



第331図 杆瓦出土分布図

賞田庵寺第8様式は軒丸瓦14類・軒平瓦20類・鬼瓦類である。賞田庵寺廃絶後の瓦群で、軒平瓦20類は法隆寺出土の菊花唐草紋軒平瓦・宝珠唐草紋軒平瓦⁽⁸⁾との対比から15世紀ととらえられよう。

以上の様式整理の元に軒瓦を中心にその分布状況を概略的に述べる。

まず、1様式軒瓦は各地から散発的に出土し、集中的に出土した地点はない。丸瓦や平瓦は金堂周囲の瓦溜まりからまとめて出土しており、2様式瓦同様に接合率も高い。

2様式軒瓦は金堂周辺から最も多く出土し、丸瓦・平瓦を含めT17・18では接合率も高く完形に復原できる個体も少なくない。これは金堂焼損後人の手が加わることが少なかったことを物語り、この点、基壇の破壊を受けた西塔の周囲の瓦溜まりの資料が全体に小破片が多く接合率高くないこと対極的である。

3様式軒瓦は東西両塔周囲の瓦溜まりから多量に出土している。このなかでT12・13といった東塔北の瓦溜まりからは完形ないし瓦当部分だけでも全形のわかる資料が多く出土していることが特筆される。

4様式軒瓦は点数が少なくこれといった集中箇所はみられない。

5様式軒瓦は東塔南面のT37からの出土が特に多い。また、T7やT27・T28でもある程度まとまって出土しており、金堂・塔といった建物の南面がある時期平城宮式の軒瓦で飾ったのかもしれない。

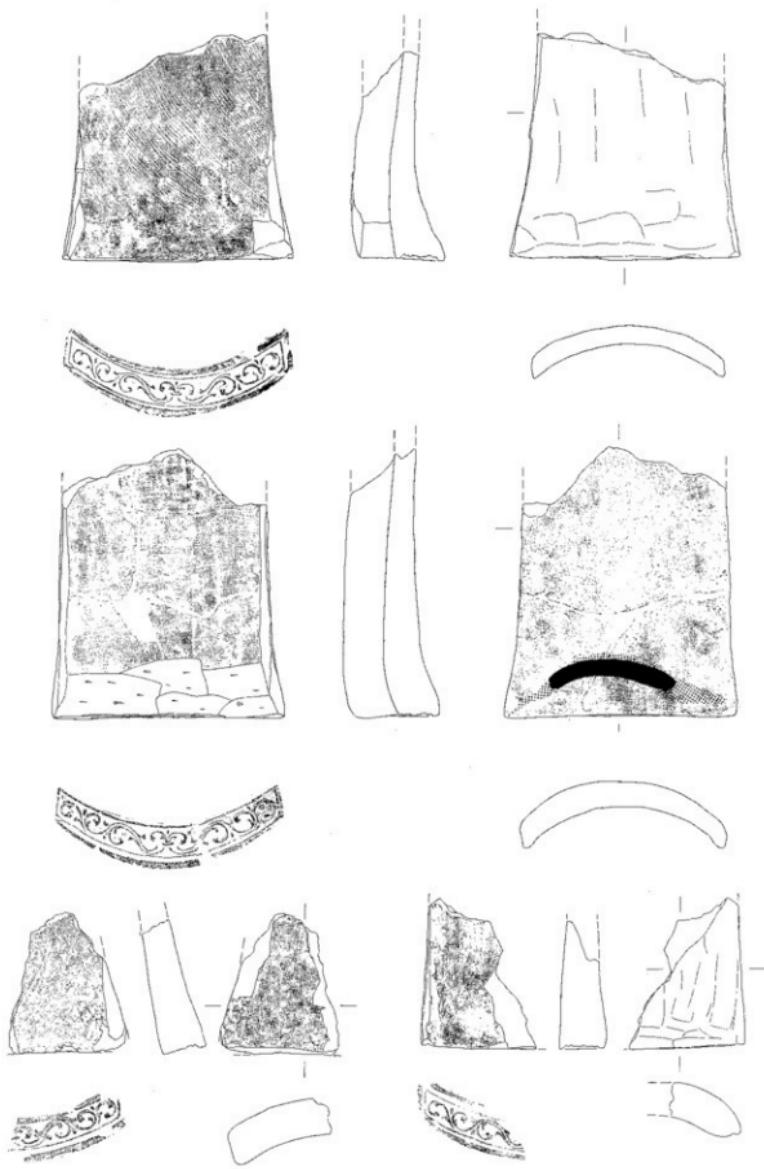
6様式以降は金堂周辺と西塔周辺の近現代水田に伴う暗渠から出土したものが多い。

出土地点全体をみると、やはり金堂・東西両塔の周囲からの出土が傑出している。これと対照的に工房がみつかったT14・T33・T34では軒瓦の出土が5点とわずかで、建物の性格に伴う葺き材の違いを表しているともみることができよう。

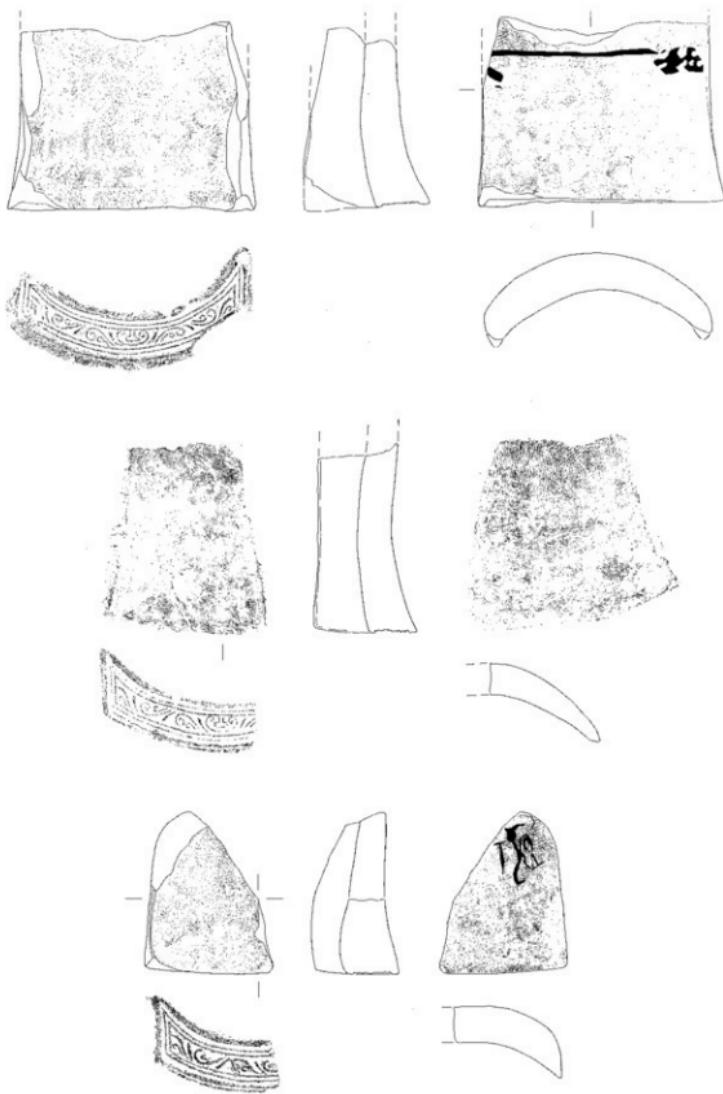
第5節 軒平瓦2A類と軒平瓦5C類の範傷の進行と時期

東西両塔の周囲の瓦溜まりから出土した軒瓦のうち、出土点数の多いのは、軒平瓦2A類及び軒平瓦5C類である。いずれかがあるいは双方が東塔ないし西塔の創建瓦と考えられるものの、瓦当紋様では直接的手掛りが得られにくい。軒平瓦の平瓦部分の製作技法の比較から検討してみたい。

すでに見てきたように、軒平瓦2A類には範傷の進行が認められ、顎部の形態や平瓦の製作技法の違いから7段階に設定できた。2A-1段階は範傷はみられず幅2.5cmの面を持った段額で、凸面の繩叩き目は瓦当面から11~12cm離れた箇所までナデ消され、側面は広くしっかりとした面を持つ。平瓦部分に厚みがあり重い。2A-2段階も範傷はみられない。顎部は幅2cmの面を持った曲線顎で、凸面の繩叩き目は瓦当面から11~12cm離れた箇所までナデ消される。側面は広くしっかりとした面を持つ。平瓦に厚みがあり、重量がある。2A-3段階は傷イができる、顎部は幅2cmの面を持つ曲線顎。繩叩き目は瓦当面から9cmのあたりまでナデ消される。側面は広くしっかりとした面を持つ。平瓦の厚みもあり重量感がある。2A-4段階は面を持たない曲線顎で範傷ロができる。繩叩き目は瓦当面から6~11cmあたりまでナデ消される。平瓦がやや薄くなるため側面の幅も狭くなる。2A-5段階は曲線顎ないし直線顎で、範傷ロが太くなることに加え傷ハ・傷ニがつく。この段階以後、平瓦部分が厚手で繩叩き目をナデによって消し側面が丸くなったり、尖り気味になる1群と、平瓦部分が薄手で繩叩き目をヘラケズリを行って消し側面に面を持たせる1群とに分かれる。2A-6段階は曲線顎ないし直線顎で、薄手のものは凸面のヘラ削りのため直線顎になるものが多い。



第332図 軒平瓦 2 A - 5段階



第333図 軒平瓦 5 C - 2段階

範傷ホ・ヘができる。2A-7段階は曲線頸ないし直線頸で、薄手のものに直線頸が多い点は前段階と同じである。範傷ト・チ・リがつく。ただし傷チ・リについては前段階についている可能性もある。

軒平瓦2A類では2A-5段階以降平瓦部分の成形法が前段階までと大きく変化する。平瓦凸面をナデやヘラ削りにより調整すること、また厚手のものでは側面部がきっちとした面をなさず、丸くなったり尖り気味になったりすることである。平瓦部分のこうした特徴は軒平瓦5C類にもみることができる。K131やK144は範傷の現われる5C-2段階である。K131は厚手でK144は薄手であるから、軒平瓦5C類では平瓦部の厚さを問わず側面調整の簡略化がみられる。現状では範傷のみられない5C-1段階の資料は出土していないので、5C-2段階が最古となる。軒平瓦2A-5段階と軒平瓦5C-2段階が同じ製作技法が使用されていることから、両者は同一時期ととらえることもできよう。このように見てよければ、より古い段階を持つ軒平瓦2A類が相対的に古いこととなる。

平城宮6663型式は8世紀中頃が初源と位置付けられている⁽⁵⁾。6225・6663型式の地方への波及時期や軒平瓦2類の段階変化を時間的にどの程度見積るかが問題であるが、軒平瓦2類の初源は750年から大きく離れないのでなかなかうか。

第6節 東西両塔の建立順序

	1段階	2段階	3段階	4段階	計
東塔	9	1	1	0	11
西塔	2	0	16	13	31
計	11	1	17	13	42

表1 軒丸瓦4類段階別出土点数

	1段階	2段階	3段階	4段階	5段階	6段階	7段階	計
東塔	1	17	4	4	11	0	0	37
西塔	0	3	1	0	14	11	9	38
計	1	20	5	4	25	11	9	76

表2 軒平瓦2A類段階別出土点数

東西両塔の創建瓦は、第3様式・第5様式軒瓦の双方が考えられるが、既に見てきたように軒平瓦で比較すると第3様式が相対的に第5様式に先行すると考えられるので、ここでは第3様式軒瓦を手掛りとして東西両塔の創建順序を考えてみることとした。すでに何度も述べているように、第3様式軒瓦は東西両塔の瓦溜まりから多量に出土しているが、小片のため第3様式軒瓦であることは分かっても、どの段階かまで判断できる資料となると、軒丸瓦で42点、軒平瓦で75点と限られる。これらの瓦が段階ごとの出土数を東・西塔別に表わしたのが表1・2である。一見して明らかのように、東塔

からはより古い段階の軒瓦が多く出土し、西塔からはより新しい段階の軒瓦が出土している。軒丸瓦・軒平瓦双方とも同じ傾向であるので、両塔の創建順序はまず東塔が建立され続いて西塔が建てられたと考えられる。

軒平瓦 5 C類については先に見たように製作技法からみると 5 C - 2 段階と軒平瓦 2 A - 5 段階が平行するとみられる。これは西塔建立に当たって軒瓦の不足を平城宮式の瓦（工人）にもとめるとともに、平城宮式の簡略化された製作技法が軒平瓦 2 A類にも導入されたと考えられよう。東塔でも軒平瓦 2 A - 5 段階が11点出土しているが以後の段階が出土していないこと、東塔全面から平城宮式の軒瓦がまとまって出土していることからすると、軒平瓦 2 A - 5 の段階で東西両塔の建築作業が平行して行われていた可能性が考えられる。

註

- (1) 龜田修一先生からご教示いただいた。
- (2) 『平城宮発掘調査報告13』 奈良国立文化財研究所 1991
- (3) 今里幾次 「姫路市本町遺跡の古瓦」『本町遺跡』 姫路市教育委員会 1984
- (4) 法隆寺昭和資材帳編集委員会 『昭和資材帳15 法隆寺の至寶 瓦』 小学館 1992
- (5) 註4文献
- (6) 註2文献

第7章 史跡環境整備

此度の史跡賞田廃寺跡環境整備の発掘調査は、史跡整備の施行に必要な寺院の様相と構造の内容を把握する目的の、事前調査として実施している。本章第1節に記述しているように、史跡指定地の公有化の完了に伴い、文化財の活用と保存管理の継続的施行の行政的課題と、地元の方々を始め、文化財に関心を持つ市民各位からの、史跡整備の要望の高まりを背景として、史跡の公有化事業から整備事業へと施策的発展を図ったものである。文化財課では史跡環境整備の具体的な取組みを平成13年度から始め、当初13年度と14年度を発掘調査期とし、15年度から17年度を整備施工期間とする5カ年の施行計画を策定して、国庫補助事業として実施した。しかし、第1章で詳述しているように、遺構の残存状態と第1次調査結果の一町四方の寺域想定が覆ったことから、発掘調査期間を15年度までの3カ年とし、16年度の1カ年の発掘調査報告書作成と整備実施設計の策定と事前作業の基盤整備とし、17年度から19年度の3カ年度を環境整備施工期間に、計画を延長変更して実施することに至った。

史跡環境整備事業の実施に対して、平成12年度に文化庁記念物課担当調査官との協議を図り、その結果、歴史的環境整備の実施に当たっては、①遺構の確認 ②整備委員会による整備計画の検討 ③発掘調査結果に基づく実施計画の策定、という前提作業の指導を受けた。この指導に基づいて文化財課は、発掘調査期間中の平成14年度に、岡山市教育委員会として「史跡賞田廃寺跡整備委員会」を設け、同年9月5日付けで同整備委員の委嘱を行い、9月25日に第1回の史跡賞田廃寺跡整備委員会を開催した。

- ・平成14年度 9月25日 発掘調査状況の視察と環境整備事業施行の検討協議
- ・平成15年度 12月20日 発掘調査状況の視察と環境整備事業内容の検討協議
- ・平成16年度 9月10日 本年度事業（発掘調査報告書作成・整備事前工の基盤整備工事施工）と環境整備実施設計策定の検討協議

◎「史跡賞田廃寺跡整備委員会」

主 催 岡山市教育委員会

委 員	芦田 和正	岡山県教育委員会文化財課長（平成16年度）	（五十音順）
委 員	牛川 喜幸	京都橘女子大学教授	
委 員	狩野 久	岡山市文化財保護審議会副会長	
委 員	加原 耕作	岡山市文化財保護審議会委員	
委 員	坪井 清足	元興寺文化財研究所長	
委 員	西山 猛	岡山県教育委員会文化課長（平成13年度から15年度）	
委 員	細見 啓三	岡山市文化財保護審議会委員	
委 員	水内 昌康	元岡山市文化財保護審議会会长	

担当調査官	本中 真 小野 健吉	文化庁文化財保護部記念物課調査官（平成13年度から15年度） 文化庁文化財保護部記念物課調査官（平成16年度）
事務局	井上 明治 出宮 鶴尚 根木 修 神谷 正義 乗岡 実 扇崎 由 高橋 伸二	岡山市教育委員会生涯学習部長 岡山市教育委員会場生学習部文化財課長 岡山市教育委員会生涯学習部文化財課文化財専門監 岡山市教育委員会生涯学習部文化財課主査（16年度文化財副専門監） 岡山市教育委員会生涯学習部文化財課主任（16年度文化財副専門監） 岡山市教育委員会生涯学習部文化財課主任 岡山市教育委員会生涯学習部文化財保護主事

第1節 史跡指定と公有化

1 史跡指定

(1) 仮指定

岡山県教育委員会は、1970年（昭和45）6月22日に、個人住宅用地と周辺一帯を賞田廃寺跡として史跡仮指定を行う。

(2) 史跡指定の答申

国の文化財専門審議会は、1970年12月12日に、文部大臣に賞田廃寺跡の史跡指定の答申を行ふ。

(3) 史跡指定

賞田廃寺跡の史跡指定は、1972年（昭和47）3月16日の官報に文部省告示となり、同日付けで史跡となった。

(4) 史跡指定地

- ・岡山市賞田字東山畠471番1 他85筆

- ・面積（公簿）= 19, 935. 77 m²

(5) 指定地の所有状況

- ・国有地 = 3筆 1, 173 m²

- ・市有地（惣持）= 1筆 218 m²

- ・民有地 = 83筆 18, 544. 77 m²

2 史跡指定地の公有化事業

(1) 事業形態

国庫補助事業（国80%・県6. 6%・市13. 4%）により岡山市が施行。担当部局は岡山市教育委員会文化課で、2000年（平成12）度からは文化財課。

(2) 経緯

①仮指定後に住宅造成地を、岡山県開発公社が先行取得。

②1971年（昭和46）度に国庫補助事業により、岡山市が①の土地を買収。

③1972年3月の史跡指定を受けて、岡山市が国庫補助事業により指定地内民有地の買収を、

1972年（昭和47）度から本格的に施行。②を含めて総事業費177, 017, 000円

で4カ年計画の予定で実施。→当時の狂乱物価の煽りもあって、昭和47年度の買収に多くの地権者の理解が得られず、48年度への繰り越しを図ったものの、結局3カ年で15筆（公簿）4,193.83m²の買収ができただけで、計画通りの実施が不可能となり、買収事業は頓挫した。執行額43,723,000円で、133,294,000円を返納。

④昭和50年代後半頃に地元関係者の買収要望を受けて、岡山市が文化庁に国庫補助事業による買収事業の再開を要請するも、不調に終わる。

⑤岡山市からの要望を受け、文化庁は1991年（平成3）度からの買収事業の再開を承認し、岡山市は国庫補助事業による史跡賞田廃寺跡の買収事業を再施行し、継続的継続を持って実施し、2000年度に指定地の国庫補助買収対象地の総ての買収を終えた。2002年（平成14）度に、岡山市は指定地に残る未買収地1筆を単独市費で買収し、史跡指定地の買収事業を完了させた。

※経緯については、別表「史跡賞田廃寺跡買収事業経緯」にまとめている。

（3）買収実績

- ・買収地 82筆 実測23,501.41m²
- ・事業費 499,814,000円 補助対象額496,915,000円

3 史跡指定地の現況

- ・岡山市賞田字東山畠471番1 他86筆（買収過程による分筆で1筆増加）
- ・面積（公簿）=19,934.77m²（買収過程による分筆で1m²減少）
- ・国有地（公簿）=3筆 1,173m² •市有地（公簿）=83筆 18,758.47m²
- ・財産放棄地（公簿）=1筆 3.3m²

第2節 史跡環境整備事業への取り組み

1 基本方針（平成12年度度策定）

- ①田畠部分については盛土整地を行う。
- ②山林部分については伐開後整地を行うが、山腹は植栽整備を施す。
- ③指定地域内の小径は周辺部への付替えを行い、水路・溝は暗渠として整備する。
- ④指定地域内の一体的平面整備を行い、古代寺院の時代的・形状的特徴及び、史跡の意義が一目瞭然と理解できるようにして一般公開を行い、市民に史跡への関心と、文化財保護意識の高揚を図り、文化遺産として後世への伝承と、住民に対し憩の場や野外活動に供する場となることを目的とする。

2 整備基本計画（平成13年度策定）

- ①保存管理計画を策定するとともに、発掘調査の成果を基に環境整備計画を設定する。
- ②発掘調査成果を基に、重要堂塔基壇は盛土整地を行ったうえに造構を復元（レプリカ）設置し、寺院関係の他の造構は、整地後に盛土・土壇・植栽・識別舗装等で表示し、全体として古代寺院の構造の様相が一目で判別できるようにする。
- ③境内外の空間部分については整地後芝付とし、一般来訪者の散策休憩の場に供する。
- ④周回遊歩道を設け、必要に応じて柵等の安全施設を付設する。
- ⑤説明板、案内標識、標柱等を設ける。

⑥将来は、指定地の近隣接地に別途用地を確保して、駐車場・便所・休憩所等の利便施設を整備する。

3 整備検討内容

(1) 方向性

- ・貴重な歴史的文化遺産
- ・市民の憩いや学習の場
- ・地域の歴史や自然が想起できる風致空間
- ・観光レクリエーションネットワークの拠点空間

(2) 理念

- ・遺構の保存と活用
- ・遺構の特徴の顕在化
- ・周辺文化財、自然資源等のネットワーク拠点の形成
- ・公園レクリエーション機能の充足
- ・天然記念物等自然との共生空間の再生等による地域交流の場の創出

(3) 内容

- ・地区特性を活かした整備
- ・調査研究を踏まえた整備
- ・遺構の整備
- ・環境基盤の整備
- ・動線整備
- ・活用上必要な施設の整備
- ・管理・運営を念頭に置いた整備

第3節 施工の区分

1 主要堂塔地区（遺構整備地区）

- ・位置は、指定地の中央北寄りで、西は低丘陵（茶臼山）、北は斜面地、東、南は堀等遺構に囲まれている。
- ・遺構は、白鳳時代に建てられ中世に改修された金堂跡、奈良時代建立の東・西塔、およびこれらをとりまく築地、掘立柱據等の遺構が確認されている。これまでのところ伽藍配置等遺構の全容の解明には至っていない。
- ・保存整備は、発掘調査等各種調査研究の成果を踏まえ、古代寺院跡であることがわかるよう、遺構の復元、表示等整備を行う。

2 主要堂塔南側地区（自然ふれあい地区）

- ・位置は、主要堂塔地区的南、東側一帯。
- ・遺構は、部分的な発掘調査では、後世の耕作等により大きく削平されていることもあって、これまでのところ明確な関連遺構は検出されていない。主要堂塔へ至る参道的な役割を果たしていたものと推定される。
- ・保存整備は、賞田廃寺跡を利用する上で必要な学習、休息、集い等のための活用施設等の整備を

行うとともに、主要堂塔の前面にあたる地区として広がりのある空間整備を図る。

3 斜面・池地区（現状保全地区）

- ・位置は、主要堂塔地区の北、西側。
- ・遺構は、主要堂塔を画する北側の築地遺構の分布が想定されるが、北西は溜池となっているため残存状況は不明である。西は自然の丘陵が堀の役割を果たしていたと推定されている。
- ・保存整備は、基本的に現在の地形、植生等を活かした環境保全地区とする。

史跡賞田廃寺跡買収事業経緯

年度	事業費 千円（国庫補助対象額）	事業内容
昭和46 迄 48	43,723 (43,723) 国34,978、県2,915、市5,830	• 15筆 実測5,057.76m ² 買収 ※4年計画177,017千円 の予定→途中で頓挫 133,294千円の返納
平成3	11,867 (11,710) 国9,368、県780、市1,719	• 2筆 実測773m ² 買収 ※19年振りの買収再開
4	20,619 (20,130) 国16,104、県1,342、市3,173	• 8筆 実測1,312.51m ² 買収
5	31,287 (30,320) 国24,256、県2,021、市5,010	• 5筆 実測2,026.34m ² 買収
6	58,560 (58,500) 国46,800、県3,900、市7,860	• 4筆 実測1,659.79m ² 買収
7	92,080 (92,040) 国73,632、県5,153、市13,295	• 2筆 実測1,671.74m ² 買収 ※家屋移転あり
8	51,992 (51,950) 国41,560、県3,463、市6,969	• 5筆 実測1,186.58m ² 買収 ※家屋移転、物件補償あり
9	23,300 (23,112) 国18,489、県1,540、市3,271	• 2筆 実測526.73m ² 買収 ※西半分の実測完了
10	90,845 (90,800) 国72,640、県6,053、市12,152	• 16筆 実測4,444.27m ² 買収
11	62,153 (61,730) 国49,384、県4,115、市8,654	• 16筆 実測3,998.52m ² 買収
12	13,241 (12,900) 国10,320、県860、市2,061	• 4筆 実測818.54m ² 買収 ☆単独市費 2筆実測18.66m ² 買収
14	147 (単独市費)	☆単独市費 1筆実測6.97m ² 買収
計	499,814 (496,915) 国397,531、県32,124、市70,141	状況：国有3筆1,173m ² 懸持1筆218m ² 市有地82筆23,501.41m ² 財産放棄1筆3.30m ² 87筆24,895.71m ² (一部未実測)

付載 古代「壇上積基壇」に使われた讃岐の凝灰岩

岡山市 賞田廃寺 基壇石材の採石地

遠 藤 亮

はじめに

香川県産出の凝灰岩は一般に「白粉石」と称され、古代から中世までの約1200年間に渡り、各種の石造物として造作されてきた。それは讃岐国内だけでなく他地域にまで搬送されたことが、各地で出土する石造遺物から明らかになっている。古墳時代の前期では白色凝灰岩で造られた剣拔式石棺は、さぬき市の赤山古墳や岩崎4号古墳、県外では徳島県鳴門市の大代古墳や岸和田市久米貝吹山古墳などに納められたことで知られ、中世でも石仏や石塔として讃岐国内は勿論、淡路島や阿波各地にまで搬送されていたことが報告されている。ところが古代から中世にかけての採石及び使用状況についての調査研究はあまり進んでいなかったといえよう。

近年、畿内の古代寺院や離宮跡の発掘調査が進み、基壇や建造物跡から出土する二上山系の凝灰岩とは石質が異なる凝灰岩が出土していることが注目されている。同質の凝灰岩が、岡山市の賞田廃寺跡の東・西両塔の壇上積基壇の化粧石にも使用されている。この石材は香川県東部さぬき市付近に分布する火山性碎屑岩の特徴である、純白に近いガラス状纖維質の基質に黒色ガラスを包含する「白色

表1 中世讃岐の石切場遺跡

採石地	所在地	岩 石 () 内は基質の色
① 火山（西教寺）	さぬき市大川町富田東	火山疊凝灰岩、白色凝灰岩（白色）
② 火山（相地）	さぬき市津田町相地	白色凝灰岩（白色）
③ 馬ヶ鼻	さぬき市志度町小田	白色凝灰岩（白色）
④ 大串	さぬき市志度町小田	火山疊凝灰岩、白色凝灰岩（白色）
⑤ 八栗寺	高松市牟礼町牟礼	火山疊凝灰岩、凝灰角礫岩（白色）
⑥ 黒岩（猪尻山南麓）	高松市国分寺町東奥	白色凝灰岩、凝灰角礫岩（白色）
⑦ 五夜ヶ岳（岩屋寺）	坂出市加茂町北山北	凝灰角礫岩（白色）
⑧ 五夜ヶ岳（神谷）	坂出市神谷町南山	凝灰角礫岩（白色）
⑨ 郷獣山	坂出市川津町折居	凝灰角礫岩、火山疊凝灰岩（白色）
⑩ 十五丁	普通寺市吉原町十五丁	凝灰角礫岩（灰色）
⑪ 奥白方	仲多度郡多度津町奥白方	凝灰角礫岩（灰色）
⑫ 牛額寺奥	普通寺市碑殿町西碑殿	凝灰角礫岩（灰白色）
⑬ 禅定寺	普通寺市古原町	凝灰角礫岩、火山疊凝灰岩（灰色）
⑭ 弥谷寺	三豊市三野町大見	凝灰角礫岩（灰白色）
⑮ 岩屋寺	三豊市高瀬町比地成行	火山疊凝灰岩、凝灰角礫岩（白色）
⑯ 興隆寺	三豊市豊中町比地大大谷	火山疊凝灰岩、凝灰角礫岩（白色）
⑰ 石ヶ谷	三豊市仁尾町仁尾石ヶ谷	凝灰角礫岩、火山角礫岩（灰色）
⑱ 豊島小見山	小豆郡土庄町豊島家浦浜	凝灰角礫岩（白褐色）

凝灰岩」に近似しているものである。これらの讃岐の凝灰岩と古代寺院などから出土する石造遺物との関連性を歴史的背景を考慮しながら考察することとする。

1. 讃岐の石切場と凝灰岩（火山性碎屑岩）

（1）讃岐中世の石切場と「白粉岩」

香川県には中世を中心に採石されたと思われる石切場が18箇所以上確認されている。そのすべてが白色凝灰岩や火山礫凝灰岩・凝灰角礫岩、つまり火山性碎屑岩に属する岩石である。これらの凝灰岩などが分布する地域は、地質史上では新生代第三紀の中中新世（約千数百万年前）に活動した瀬戸内火山活動に伴って形成された讃岐群と関係するものとされる。この火山性碎屑岩の堆積層は、瀬戸内海に面した山地・台地などの標高約80mから120mの中腹に崖地状になっていて、下部に黒雲母花崗岩、上部は讃岐質古銅輝石安山岩にサンドイッチ状に挟まれた状態で存在している場合が通常である⁽¹⁾。凝灰岩を採石する18箇所の石切場の多くは、崖地の僅かなテラス状地形が採石場となり、採石と石造物の加工が同時に行われていた場合が多いようである⁽²⁾（表1）。

香川県下の石切場から採石される火山性碎屑岩の石材の特徴から、4 グループに地域区分ができる。

	石切場地域	採石対象岩石	主な石切場
A グループ	火山系	白色凝灰岩、火山礫凝灰岩	火山・馬ヶ鼻・大串・八栗寺
B グループ	国分台地系	凝灰角礫岩、一部白色凝灰岩	国分黒岩・加茂岩屋寺・神谷・郷野山
C グループ	弥谷山地系	凝灰角礫岩（一部溶結性）	十五丁・牛齋寺・奥白方・弥谷寺・禅定寺
D グループ	七宝山地系	凝灰角礫岩、一部白色凝灰岩	比地岩屋寺・興隆寺・石ヶ谷

岩石は白色か灰白色ガラス質の基質に含有される角礫や各種岩石細片を含有しており、目視と光学機器の観察でも判別しやすい特徴を持っている。ただ同一場所でも火山性碎屑岩特有の複雑な堆積状況と組成状態から調査に当たっての石質分類には十分配慮する必要がある。

（2）香川県東讃地域 石切場の凝灰岩

さぬき市・牟礼町付近の白色の凝灰岩を採石した石切場は、「火山」（西教寺奥の院と相地側）「馬ヶ鼻」「大串」「八栗寺」の4箇所確認されていることを先に述べた⁽³⁾。図1によれば石切場は凝灰岩の分布帶内に位置しており、この軟質の岩質が石造物の製作に適していることに加え、搬出運搬に有利な臨海地が選ばれたのである⁽⁴⁾。

この地域の石切場は香川県下他地域の石切場の凝灰岩と比べ、含有される岩石片が微少で純白に近い石質で知られるものである。しかし、各石切場には数種類の火山

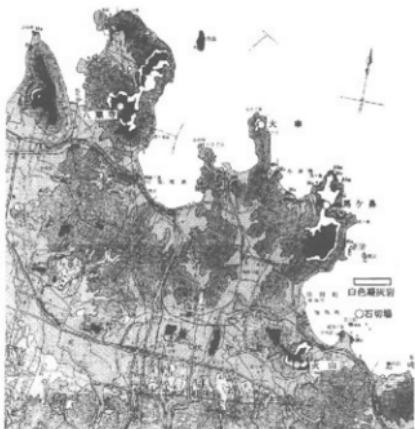


図1 東讃地域の凝灰岩帯と石切場

性碎屑岩が堆積していく、含有される岩石片の種類や量もそれぞれ特徴をもっている。その岩質を明確にするため接写した岩石写真と石質の特徴を示すことにする。ただし各石切場とも古代・中世石造物に使用されたと思われる石材を中心に選出し集成した(図2)。目視による分類方法は手作業的なものであるが、凝灰岩の石質分類は、現状の蛍光X線などの科学的分析の測定には限界性があり、個々の凝灰岩のサンプルを目視(光学機器など)による方法を用いることとした(表2)。

表2 香川県東部 火山性碎屑岩の分類



火山性碎屑岩の分類(含有している礫の種類など)

A型 白色凝灰岩 ガラス質 ガラスの纖維質により構成されている。噴火活動により第一次的に火碎流が滞留し、酸性の熱水(ガスなど)の影響で白色ガラス状に纖維化したもの。火山性ガラス細片の一部は、熱水変質作用により、石英、白泥石などに置換されている。	C型 白色凝灰岩 含暗赤褐色安山岩 B1・2型の凝灰岩に、暗赤褐色の安山岩を微量含有している。
B1型 白色凝灰岩 含黒色ガラス(大粒) Aの凝灰岩を基質とし、そこに2~6mmの黒色ガラスの集合体を少量含有している(ざくろ石片を包含している場合もある)。	D型 白色火山礫凝灰岩 Aの凝灰岩を基質とし第二次的に白色ガラス質に、粒径2~4mmの花崗岩そのものや石英細片・軽石・安山岩・ざくろ石の細片などが流入滞積したもの。 火山岩を内蔵した数mmの雨滴痕も見られる。
B2型 白色凝灰岩 含黒色ガラス(小粒) Aの凝灰岩を基質とし、そこに1~2mmの黒色ガラスの集合体を少量含有している(ざくろ石片を包含している場合もある)。	E型 灰白色火山礫凝灰岩 灰白色のガラス纖維質を基質として、2~5mmの花崗岩の岩片を中心に灰黑色玻璃質安山岩や黒色のシリケン(雲母が多い)、暗赤褐色の変質安山などを含有。 火山灰を内蔵した数mmの雨滴痕が見られる。

「A型」 ガラス質 白色凝灰岩 (酸化の影響)

火 山 石 切 場
(西教寺奥院・相地)



×1.0

馬 ケ 鼻 石 切 場



×1.0

大 串 石 切 場



×1.0

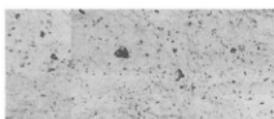
八 栗 寺 石 切 場



×1.5

「B 1型」 含 黑色ガラス質 (大) 白色凝灰岩

火 山 石 切 場
(西教寺奥院・相地)



特徴

A型の凝灰岩を基質とし、そこに2~6mmの黒色ガラスの集合体を少量含有している。黒色の玻璃には1~2mm前後のものを中・少量含む。

図2 「火山系の石切場」と「火山性碎屑岩」の分類・集成

「B 2型」 含 黑色ガラス質(小) 白色凝灰岩

火 山 石 切 場
(西教寺奥院・相地)

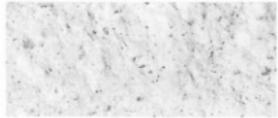


×1.0

特徴

A型の凝灰岩を基質とし、そこに1~2mmの小粒の黒色ガラスの集合体を中量含有している。

馬 ケ 鼻 石 切 場



×1.3

大 串 石 切 場



×1.2

「C型」 含 黑色ガラス質 白色凝灰岩

含 暗赤褐色安山岩(微量)

火 山 石 切 場
(西教寺奥院・相地)



×1.3

特徴

B型の凝灰岩を基質とし、そこに2~3mmの暗赤褐色の安山岩を微量含有している。

「D型」 含 花崗岩 白色火山礫凝灰岩
含 安山岩

大串石切場



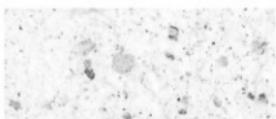
×1.3

特徴

A型の凝灰岩を基質とし、そこに2~4mmの花崗岩・ざくろ石・軽石などが流入堆積したもの。

「E型」 含 軽石 灰色火山礫凝灰岩
含 石英
含 暗赤褐色安山岩(微量)

八栗寺石切場



×1.2

特徴

基質は酸性玻璃質凝灰岩であり、そこに2~4mmの花崗岩の石片を中心にして黑色ガラス質安山岩や黒色のシリーデン(雲母が多い)を含む。また約1mmの暗赤褐色の変質安山岩が微量見られる。

火山灰を内蔵した数mmの雨滴痕が見られる。

2. 基壇の化粧石に使われた讃岐の凝灰岩

(1) 延喜式に記載された「讃岐石」

平安時代の初期の禁中の年中儀式や制度など律令の施行細則を示した『延喜式』が康保四年(967)に施行された。卷第三十四「木工寮」に讃岐石の記載がある。その『車載の項』つまり建築資材運搬する場合の積載量を示す細則のなかに以下のような記述がある。

「大坂石積七千九百寸。小石九千寸。讃岐石積六千三百寸。小石七千二百。…………各一両載。」

川勝政太郎氏(石造学の先駆者)は車1輛に積載すべき量を明示したので、大坂石と讃岐石の積載量の差であるとしている。さらに大坂石は大坂の白石で二上山の凝灰岩であり、讃岐石は重い花崗岩であるため載量が少ないとしている⁽⁵⁾。この論証は合理性はある説明だが問題点を含んでいるようである。平安時代から中世後期まで、讃岐で花崗岩を探石したり、転石(傾斜面に点在する浮石)を利用した記録も伝承も残されていない。花崗岩を探石し加工が始まったのは、近世になってからというのが石造遺跡や遺物から立証できるという研究が最近進んできている⁽⁶⁾。

そうすると『車載の項』の大坂石と讃岐石の積載量の差をどう説明できるかが問題となってくる。無視できない要素として、二上山系の凝灰岩と讃岐の凝灰岩(花崗岩ではない)の硬軟による強度差が考えられる。二上山の凝灰岩はドンズルボーや牡丹洞・鹿谷寺などが凝灰岩層や石切場跡で知られていて、一般に基質は灰白色のガラス性繊維状で松脂石や流紋岩の角礫を含有する場合が多い。この

岩石は、溶結性が高いため讃岐の凝灰岩より硬度が高く強度も強い。

一方、讃岐の凝灰岩は凝灰岩特有の軟質で崩壊し易いもので、例えば大串石切場などでは採石途中で欠損のため放棄された石造物を各所で確認できることからでも推測できる。『車載の項』の大坂石と讃岐石の積載量の違いは、石材の重量差ではなく、壊れ易い讃岐の凝灰は、数量を少なくし慎重に取り扱ったと考えられる。このように讃岐の凝灰岩が壊れ易いにもかかわらず、畿内の寺院などで用いられたのは、純白に近い凝灰岩が神聖な仏殿などの基壇の化粧石に相応しいものであったと考えられるのである。

(2) 古代・中世の文献に見える「讃岐の石」

古代や中世の文書などに讃岐の石に関する記述があり、それに比定される場所の発掘調査が行われていて、その際出土した「讃岐の石」と推察される石材について考えてみたい。

① 興福寺 奈良市登大路町

『興福寺流記』によれば、藤原鎌足の妻である鎌女王が鎌足の病気平癒を願い山階寺を濫觴し、平城遷都にともない現在の場所に移し興福寺としたとされる。平成10年度（1998）からの中金堂を中心とする発掘調査と文献などによって、永承三年（1048）から文政二年（1819）まで7回再建による供養が行われている。嘉保三年（1096）の火災後の再建時に讃岐の国から基壇とする石を求めている記録がある。

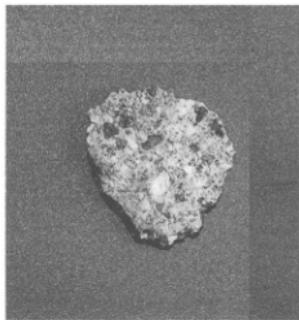
『後二條師通記』 承徳三年三月三日（1099）

「興福寺塗等石未定也、作事延引、仰讃岐國、可運上由、可被下知。」

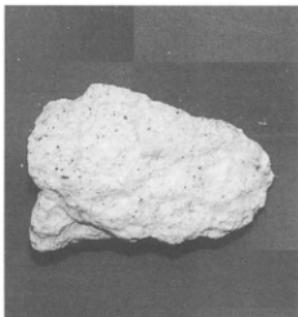
興福寺再建時に基壇石が決まらず、作業が延び遅れたため、讃岐国から運上するように命じた。

平安時代に讃岐の何處の、どんな石が搬送の対象になったかは不明である。

平成10年度（1998）からの発掘調査によって須弥壇外装や基壇外装の地覆石、延石などに多種類の凝灰岩が使用されていることが確認された。これらの石材のほとんどが二上山の松脂石を多く含んだ灰色の溶結凝灰岩である。ところが発掘作業で除去した盛土の一部に香川県東部の火山系の特徴を持つ白色の凝灰岩が混入しているのを見出しができた⁽¹⁾（図3）。この凝灰岩は讃岐東部の火山性碎屑岩の分類では「火山B2型」に比定されるものである。『後二條師通記』に述べられる讃岐国



二上山系溶結凝灰岩



火山B型凝灰岩

図3 興福寺中金堂 発掘調査で出土した凝灰岩 2002年

石との関連は明らかでないが、火山系の凝灰岩の石片が見られたことは今後の調査研究で究明されることを期待したい。

② 平安大極殿 京都市小山町（千本丸本町）

大極殿は延暦十三年（794）長岡京から遷都し平安京に宮城が設けられた。その中の核的施設である朝堂院の正殿であったのが大極殿である。天徳四年（960）内裏が焼失し、その後もしばしば宮内の主要施設が焼けている。大極殿の再建で讃岐の民を石造りに労役させている記録がある。

『三代実録』 元慶元年（877）二月四日の項

「詔復 二 讃岐国畜 一 十日縁 下 造 二 大極殿石 一 多 中 労役 上 也」

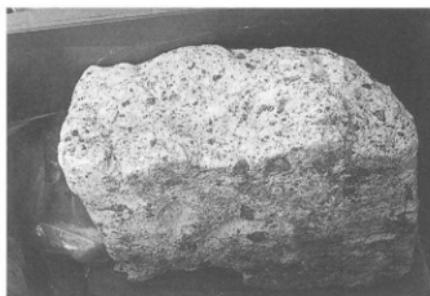
この記録からは「讃岐の石」が運上されたという証拠にはならないが、大極殿の建設には基壇の造作は重要な作業となる。そこに徭役として讃岐の国人が参加したのである。石築作業は特殊な技術を必要とするため、讃岐の石工人たちが動員徵用されたことが窺えるのである。

大極殿跡の部分的範囲の発掘調査が京都市埋蔵文化財研究所によっておこなわれた。そのとき出土した石材の一部が京都市によって保管されている。基壇に使用されたと推定される石材の多くは凝灰岩である。二上山系の灰白色溶結凝灰岩に混じり讃岐「火山のB 2型」である白色凝灰岩も出土している（図4）。一部は大極殿南の朝堂院修式堂の階段石と基壇石に比定されるもので、基壇の地覆石と階段の耳石に推定される。

大極殿跡から出土した「火山B 1・B 2型」の凝灰岩は京都文化博物館にも保管されており、兵庫県伊保山付近の溶結性凝灰岩や採石地不明の花崗岩の礎石と共に「火山B 1・B 2型」の凝灰岩が大量に保管されている。多くは延石や地覆石として使用されていたものである⁽⁸⁾。

③ 鳥羽殿跡 京都市伏見区竹田

鳥羽殿（鳥羽離宮）は11世紀後半から12世紀中頃にかけ約70年にわたり白河法皇が平安京の南郊に造営した離宮である。白河・鳥羽兩上皇はこの離宮を愛し、続々と大規模な建築物を建立した。讃岐から應徳三年（1086）鳥羽南殿の造営に讃岐国阿野郡陶の瓦と共に、柱礎石大石も運ばれている。貴族の日記である源師時記『長秋記』に以下のような記述がある。

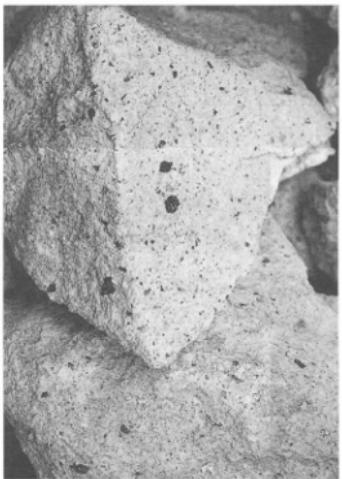


「火山B 1型」凝灰岩



二上山系の溶結凝灰岩

図4 大極殿から出土した「火山B 1型」凝灰岩



勝光明院 阿弥陀堂跡出土「火山B 1型」



金剛心院 阿弥陀堂前池出土「火山B 2型」

図5 鳥羽殿跡から出土した火山の凝灰岩

『長秋記』 長承三年（1134）五月二日 鳥羽殿勝光明院の建立の項

「仰云、早可召、但近間實在院立石料、諸國召石、除件國々可召者、又申云、讚岐國石、近來所進不中用也、召石作遣彼國、撰取令運上如何。」

『長秋記』 保延元年（1135）六月二十四日

「讃州作石事

讃岐作石、任召員造儲山、未言上、相尋子細處、國司申云、任廳御下文可造儲之山、仰在廳卑、於今無疑造儲歟、早仰諸國可令運者、此事頗難無謂、期日已近々也、付國司申狀、仰諸國可令運上歟、仰、早仰便宜國々、可令運上者、」

長承三年 鳥羽殿勝光明院の建立に際し、近頃、讃岐の石が滞りがちである。讃岐国へ石工を遣わし、遊び取り運上を催促している。また保延元年にも讃岐の石材の運上が遅延している理由を国司に尋ね、申状を発して運上を催促している。

このことは離宮の造営に際して讃岐の石を如何に重視していたかの表れといえよう。

昭和38年の第1次から136次調査まで鳥羽殿の発掘調査が京都市埋蔵文化財研究所によって行われた際、北殿や東殿・田中殿金剛心院跡から建物基壇に使用されたと判断できる凝灰岩の屑石が、各所で出土している⁽³⁾。その中の金剛心院九体阿弥陀堂の東側の池から出土した仏像か人物を線刻した凝灰岩（約40×25cm）は香川県火山のB 2型（A型の可能性もある）の石質に比定されるものである。

とくに注目できるのは、北殿勝光明院阿弥陀堂跡付近から出土した数個の手斧跡（手斧跡の幅1.3～1.4cm）の工作跡が残る凝灰岩は、白色凝灰岩の基質に含まれる黒色ガラス（4×3mm）や表面が風化により淡褐色に変色していることなどから「火山B 1型」に特定して矛盾しないものである（図5）。

現在の安楽寺院と京都国立博物館が所蔵する一石三尊仏が浮き彫りされている3基（縦107・横117・厚さ30cm）（阿弥陀三尊・薬師三尊・釈迦三尊）は成菩提院跡からの出土とされ、石質は「火山B 1

型」に比定される。このように、鳥羽殿跡の建立で出土している凝灰岩から、香川県さぬき市の火山の石との関係が考えられる。

安楽寿院古文書によれば、火山の採石場が位置している、さぬき市大川町は平安時代末頃は安楽寿院領（女房三位局）であり、讃岐国寒川郡富田荘が存在していた。そうすると「火山の石」が運上された政治的背景として安楽寿院領富田荘の存在意義が考えられるのである⁽²⁰⁾。

表3 畿内に運上・搬送された「讃岐の石」

遺跡名	時代	石材遺物の現状	出土石材・凝灰岩の分類	関連文献
興福寺 奈良市登大路町	平安時代後期 11世紀末		☆興福寺中金堂跡発掘調査時に讃岐の白色凝灰岩と思われる小片を確認（2000年） 【火山B 2型】	康和元年（1099）讃岐国に興福寺の壇などに用いる石の運上を仰ぐ 『後二条師通記 下』
大極殿跡 京都市小山町 (千本丸太町)	平安時代	☆発掘調査により讃岐の白色凝灰岩が出土 ☆出土した火山の白色凝灰岩を京都市埋蔵文化財研究所と京都文化博物館に保管	★☆大極殿の礎石 兵庫県伊保山村近の火山疊凝灰岩質溶結凝灰岩 花崗岩の礎石（京都文化博物館に展示） ★☆大極殿出土の凝灰岩・【火山B 1型】	元慶元年（877）讃岐石工人大極殿の石造りに従事して勤員『三代実録』
鳥羽殿跡 京都市伏見区竹田	平安時代末期 12世紀	☆出土した火山の白色凝灰岩を京都市立埋蔵文化財研究所で保管 ☆火山の凝灰岩板石に刻まれた一石三尊仏を安楽寿院と京都国立博物館で保管	【火山B 1型】 ☆調査にともない、勝光明院阿弥陀堂跡から「火山B 1型」・金剛心院阿弥陀堂前の池から「火山B 2型」が出土	應徳三年（1086）鳥羽南殿の造営に阿野郡陶の瓦を用いる。（西町遺跡） 長承三年（1134）勝光明院の造営に際し、石材を讃岐国より求める。『長秋記』 保延元年（1135）鳥羽殿造営に用いる石材を讃岐守に催促『長秋記』
石清水八幡宮 京都府八幡市八幡	南北朝時代前期 14世紀初め	☆現在の供拝所（くきょうしょ）・御文庫・御風鑑舎（ごふうれんしゃ）の石段などの石材に近似している	☆さぬき市大串半島と馬ヶ鼻の白色凝灰岩の可能性がある【大串・馬ヶ鼻A型？】	歴慶二年（1339）石清水八幡宮再興に際して宝殿・幣殿・拜殿の切石を讃岐国鳴部庄から運ぶ 『建武回顧録』

☆印 遠藤亮 実見により確認 ★印 奥田尚氏 『石の考古学』より参照

中世の南北朝時代になるが、石清水八幡宮（京都府八幡市八幡）にも暦応二年（1339）石清水八幡宮再建に際して寶殿・幣殿・拝殿の切石を讃岐国鴨部庄から搬送されたことが『建武回顧録』に記載されている。鴨部庄（さぬき市志度町）の石切場として大串石切場が比定され、ここから凝灰岩が搬送された可能性が高い（表3）。

3. 賞田廃寺の基盤と凝灰岩

（1）賞田廃寺の石材出土状況

岡山市内を南流する旭川の東岸、竜ノ口山西南麓に位置する賞田廃寺跡は飛鳥時代（7世紀中頃）に建立され、建物の一部は中世（14世紀頃）まで存在した寺院であると伝わる。岡山市教育委員会の昭和46年（1971）の発掘調査報告書によれば、瓦などの出土状況から、飛鳥時代末に創建され、白鳳時代から寺院として本格的に造営され、奈良時代初頭に伽藍が完備されたことが分かる。

表4 賞田廃寺跡 発掘調査と出土石材

調査年	発掘調査での確認事項	出土石材関係
昭和45年 (1970)	白鳳時代と奈良時代の二度に渡り大整備が行われている。 金堂・塔・西門および回廊・築地跡の一部を発見。	塔と西門跡を確認。凝灰岩の「壇上積基壇」が用いられていた。（出土時は石材を石英粗面岩とされた）
昭和47年 (1972)		地方古代寺院では稀な「凝灰岩製壇上積基壇」などから国史跡に指定。
平成13年 (2001) 平成15年 (2003)	寺域は奈良時代に大きく拡張されている。 金堂（白鳳期）は、中世に基壇の周囲を掘り下げて基壇を縮小している。 基壇の調査により西門跡を西塔に修正。 東西二つの塔の存在を確認。 金堂基壇（東西15.5m、南北12.6m） 基壇の外周は基壇上面から1.8mの深さに掘り下げられている	東西両塔の基壇は中世に破壊されている。瓦溜などの周辺から多くの凝灰岩片が出土。 西塔は二段重ねの基壇構成。一辺約11m四方の凝灰岩の壇上積基壇。基壇外装は、西辺の北半分と東階段の基底部（延石と地覆石）のみ残る。階段は東西二面のみ。 東塔は凝灰岩壇上積の基壇外装。一辺12m四方の基壇。階段は東西2方向。 両塔の基壇は中世に破壊され、東西両塔の周囲から、瓦と一緒に地覆石・羽目石・束石など基壇の外装石が出土。 石の規格は東塔と西塔と異なる。 消滅した第三の凝灰岩壇上積基壇があったと推定。
平成15年 (2003) 平成16年 (2004)	講堂は認められない。 金堂など主要建物の廓の範囲が確定。 掘立柱廓は9~10世紀と推定。 白鳳期と奈良期で建物配置の計画が異なる可能性がある。	西塔基壇の外周で南階段を確認。階段は（幅3m、奥行き1.5m）3段から4段に修正。 西塔の凝灰岩切石を使った壇上積基壇の外側を1辺16m四方の自然石で取り囲む。（北・東・西は1段、南は2段に積む）

岡山市教育委員会 1971年発掘調査報告書 2002年・2004年 現地説明会資料より作成

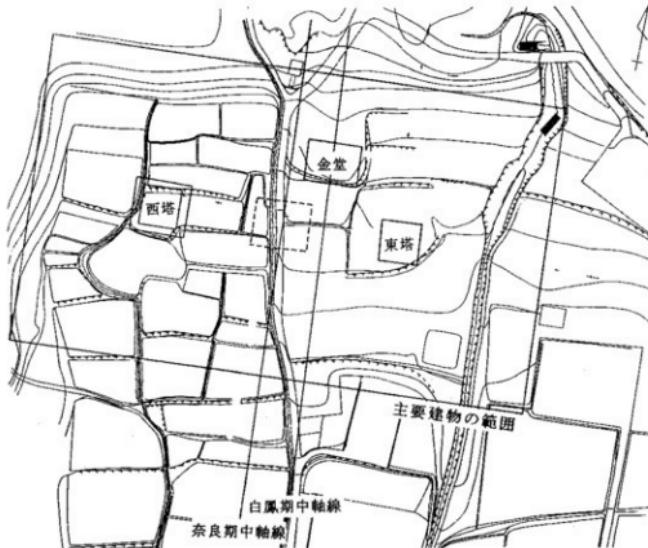
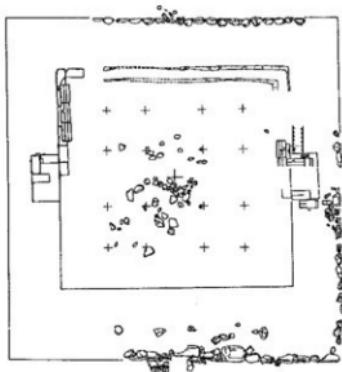
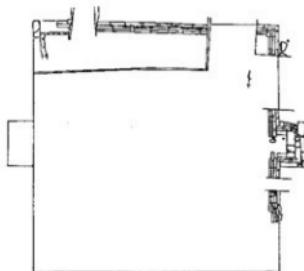


図6 賞田廃寺平面図

岡山市教育委員会 2004年3月7日 現地説明会資料より



西塔基壇平面図



東塔基壇平面図

岡山市教育委員会 2002年9月 現地説明会資料より

図7

その後平安時代になると徐々に衰微しながら、鎌倉時代初頭までに存在していたことが判明している。昭和45年(1970)の調査によって、およそ1町(110m)四方の寺域であることが判明し、そこに金堂・塔・西門(後に西塔)および回廊・築地跡の一部が確認されている⁽¹⁾(図6・7)。基壇石材として凝灰岩を使用されているのが確認できたのは、東塔及び西塔であった。

(2) 火山の白色凝灰岩と比定

賞田廃寺発掘調査報告(1971)、現地説明会資料(2002年・2004年)によると東塔・西塔及び瓦溜まり付近から、夥しい数量の凝灰岩の石材が出土している。当初は石英粗面岩製壇上積基壇とされていたが、後の調査によって香川県さぬき市火山(さぬき市大川町・津田町)の凝灰岩と修正されるという経過をたどっている。

1度出土した基壇遺構の多くは再び埋め戻されているため、直接観察できないが、現在岡山市埋蔵文化財センターで保管されている出土した凝灰岩の石材を目視観察と計測の機会が与えられた。初見では火山系の凝灰岩と直感したが、再度観察すると灰色の角礫が包含している状態から二上山系の溶結性凝灰岩の松脂石との関連で疑問が出てきた。しかし、子細に検証することで、灰色部分は耕作土や灰色粘土などの水分を吸収したときの痕跡であることが判明した。岡山市埋蔵文化財センターに保存された、賞田廃寺跡から出土した基壇石とされる石材は、「火山B1型」が圧倒的に多く、少数であるが「火山B2型」と一部「火山A型」と判別できるものである(図8・9)。

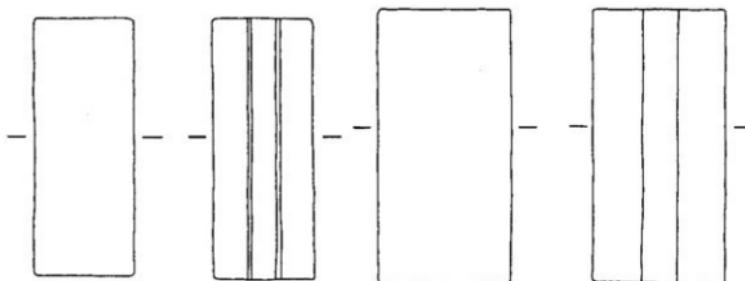


東 石



地覆石

図8

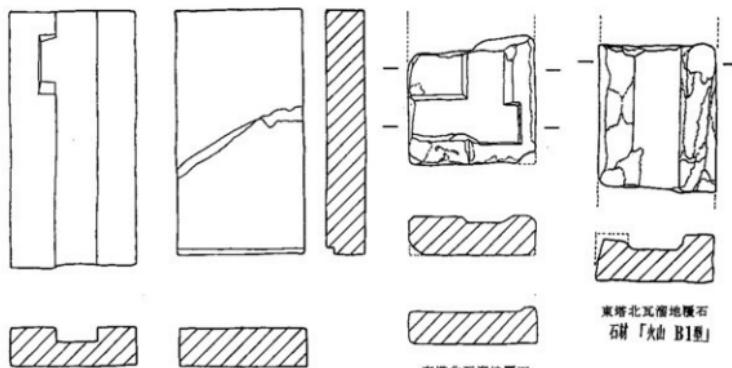


東塔延石

東塔地権石

西塔延石

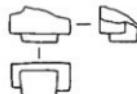
西塔地権石

西塔北瓦漬地権石
磨「火山 B2型」西塔北瓦漬羽目石
磨「火山 A型」

東塔北瓦漬地権石

磨「火山 B1型」

石材「火山 B2型」

西塔東瓦漬東石
磨「火山 B1型」

東塔北瓦漬敷石

基壇外装石の比較 (S = 1/10)

図9 賞田廃寺出土 墓上積基壇の石材と石質

これら火山の凝灰岩は、石質として2点の特徴を示している。

「火山B 1型」第1の特徴

石質は目視によると、基質が純白にちかいガラス質に、長辺5~20mm・短辺3~6mmの大粒で角がある黒色ガラス片と、径1~2mmの黒色ガラス辺を包含したものである。大粒の黒色ガラスは10cm四方に2~4個で微量、細片は10~30個で多量の場合が多い。他の石切場で大粒の黒色ガラス片を含む場合は少ない。

「火山B 1型」第2の特徴 (B 2型・A型とも共通)

火山の凝灰岩は、風化がすすむと含有している鉄分の酸化反応により淡い橙色か褐色に表面が変色する。さぬき市や八栗寺など東讃岐の他場所の凝灰岩は酸化による変色が少ないと判別できる。保存されている貫田廃寺の壇上積基壇の石材のほとんどが、大粒の黒色ガラス片を微量含有していること、岩石の表面が橙色に風化し場所によっては褐色を示していることから、火山の凝灰岩であることに比定されるのである。

火山（標高259m）には南側山麓の西教寺奥の院と北側山麓の相地側の2箇所に採石場が位置していたと考えられる。相地側は昭和30年代まで大規模な採石が行われ遺跡は喪失していて、加工された転石が僅かに散見できるにすぎない。西教寺奥の院一帯では、巨大な凝灰岩が転石（浮石）となっているのが各所に見られ、木立の中に立つ風景は壯観である。

奥の院堂内には、6個以上の巨大岩石が奥壁を形成している。大石の規模は直径・短径・幅が、540×210×100cm、320×206×195cm、274×110×150cm、170×160×152cmなどである。内1石は堂内から屋根の外まで突き出ているものもある。石質は「A型」が4石、「B 1型・B 2型」が2石である。これらは古くは神靈の依代である磐座として、現在は不動明王や觀音菩薩が刻まれ祀られている。堂外には大日如来が刻まれた大石（915×350以上×257cm）など数個が礼拝石として存在している。(図



西教寺奥の院堂内



採石場に立つ大日如来を刻む転石

図10

表5 賀田廃寺と開法寺の壇上積基壇

単位cm

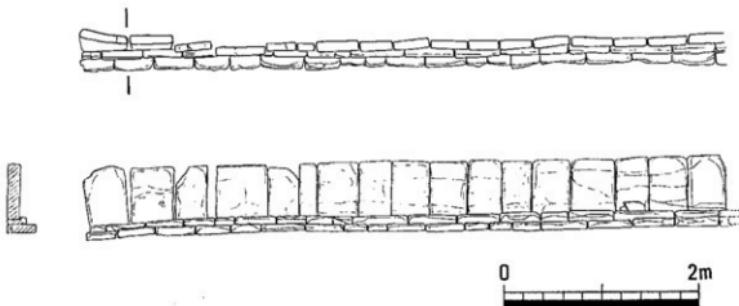
	石材	基壇の規模												
		延石			地覆石			羽目板石			葛石		枠溝石	
		長	高	幅	長	高	幅	長	高	幅	長	高	幅	深
賀田廃寺	白色凝灰岩 (火山礫凝灰岩)	東塔			77.2	13.9	35.8						9.5 10.5	1.5
	火山B 1型 が多い 一部A型・ B 2型		東側 西塔	84.4	44.5	16.0	階段 86.5	15.8	41.5	80.5	428	127 129		3 40 2 25
開法寺跡	白色凝灰色 火山A型 一部B 1型・ B 2型	西側 塔	12.6	13.6	26.0	86.0	14.0	19.0	58.0	30.0	12.0	10.5	23.0	12.0 2.0

賀田廃寺は発掘時の計測値、開法寺跡は計測図から判読した。

- 10) これらの凝灰岩の転石の中には加工されたと思われる跡があり、この場所での採石・加工は岩層から採取する方法よりも、容易に入手し加工できる巨大な凝灰岩の転石を加工する方法で行われたと推測できるのである。

(3) 坂出市開法寺跡基壇との類似性

発掘調査報告によれば、賀田廃寺の基壇配置、構成などから伽藍配置や寺院造営の有り方を川原寺、



調査1970年5月9日 調査主任 川畠油氏

図11 開法寺壇上積基壇計測図

薬師寺、安芸国分寺などとの対比から、東西2塔の存在などその特異性を明らかにしている。

しかし壇上積基壇の形成や規模（法量）について他の古代寺院との具体的な対比は明らかにされていない。そこで建立時代や基壇規模・形態で比較的共通性、相似性があると思われる坂出市府中町開法寺跡の塔基壇の構成と、使用されている石材と比較検討を試みたい。

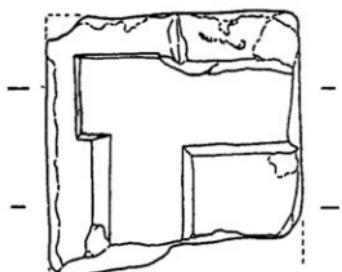
開法寺は坂出市東部を北流する綾川が屈曲する左岸に位置していた古代寺院である。寺域に隣接する北側一帯は讃岐国衙が所在した跡であるところから、寺は国府の付属寺であったと考えられている。このことは賞田廃寺のすぐ南側に備前国府が存在していたと推測されているのと共通している。

しかも両寺院跡から出土した古代の瓦も賞田廃寺が飛鳥様式の素弁蓮華文軒丸瓦賞田廃寺第1様式を最古として、白鳳様式の賞田廃寺第2様式などが出土している。一方開法寺跡からは素縁素弁の蓮華文軒丸瓦など7型式が発掘により確認されていることから、飛鳥時代から白鳳時代にかけ創建された両寺院の歴史はほぼ共通している。（開法寺の伽藍配置は法起寺式であったと推測されている）

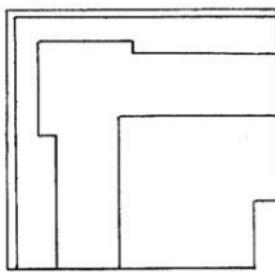
とくに注目されるのは両寺院とも、塔跡から古代の地方寺院では少ない白色の凝灰岩を石材とする壇上積の化粧基壇が確認されていることである（図8）。両寺院とも基壇構造の一部または一面の計測値であって全貌を表した数値とは云えないが、基壇の形式や構造・規模が共通している。

羽目板石の高さは約20cmほど賞田廃寺の方が高く、基壇の高さの差はあるが他の規模は酷似した傾向を示していることから、両寺院は建立時期だけでなく、共通した壇上積基壇の構成や製作手法を持っていることが分かった。それは基壇隅の束石や羽目石を受け入れる地覆石や葛石に掘られた溝の形態からも窺われる所以である（図12・表5）。

使用している石材の石質は両寺院とも、さぬき市火山の凝灰岩を用いたと判断できる。しかし、賞田廃寺の石材の大半が「火山B 1型」であるのに対して開法寺の場合は、白色凝灰岩で「火山A型」がほとんどである。地元の関係か、採石時期の違いであろうか、混入する黒色ガラスが少なく、より美的的な基壇を求めた開法寺の壇上積基壇の製作者の拘りを感じて興味深い。瀬戸内海に相対した備前と讃岐の国府に付属する寺院が、壇上積基壇の製作に当たり、ほぼ共通した手法で、同じ火山の凝灰岩を石材としていることは注目される。



賞田廃寺の地覆石の隅部



開法寺跡塔基壇の葛石の隅部

図12 両寺院の隅部 石材の比較 1 / 6

（4）火山の凝灰岩を用いた古代の地方寺院

「備前幡多廃寺」（岡山市赤田）

備前国府跡想定地の南方にも白鳳時代末に創建された古代寺院幡多廬寺が位置していたことが、岡山県下で最大の塔心礎や出土瓦などから明らかになっている。昭和46・47年(1971・1972)に発掘調査が実施され寺域と伽藍配置が明らかにされ、さらに石材の出土によって壇上積基壇の様相が判明した。石材の一部が岡山市埋蔵文化財センターで保管されており、石質は「火山B 2型」であることから火山石で作成された基壇であった可能性がある。

「阿波国分寺」(徳島市国府町矢野)

十五番札所国分寺境内に、結晶片岩の巨石による環溝式の塔心礎が保存されている。伽藍配置を確証づける意向は明らかにされていないが、出土瓦などから奈良時代後期から平安時代末に比定される寺院である。現在の境内の各所に積み上げられた残石のなかに人工的に工作された白色凝灰岩が交っている。板状に加工された規模は、長辺・短辺・厚さが $75 \times 44 \times 15\text{cm}$, $70 \times 28 \times 70\text{cm}$, $56 \times 38 \times 13\text{cm}$ などであることから、基壇の化粧石(羽目板か)であった可能性がある。石質は火山か大串石切場の「A型」と「B 1・B 2型」である。

「阿波国分尼寺」(石井町尼寺)

奈良時代の八葉複弁蓮華文軒丸瓦や礎石などが残る国分尼寺は、平成15年・16年度(2003・2004)の発掘により、基壇の階段の一部が出土した。階段石の全容は明らかではないが、大きさは長辺・短辺・厚さは $81 \times 40 \times 13\text{cm}$, $81 \times 42 \times 16\text{cm}$ であり、石質は、火山の白色凝灰岩で「火山A型」に比定できるものである。付近には発掘時の土砂に交じり凝灰岩の小片が多数散乱しており、多くは火山の「B 1型」と「B 2型」である。先年発掘された金堂跡基壇の写真から凝灰岩の基壇石が整然と並べられていたことが判る。

表6 古代史跡出土 訾岐の凝灰岩(火山性碎屑岩)

石切場 凝灰岩の分類 (含有礫など)		火山(西教寺奥・相地)		馬ヶ鼻		大串		八栗寺			
		A型	B 1型 B 2型	C型	A型	B 2型	A型	B 2型	D型	A型	E型
畿内	鳥羽殿跡		◎								
	大極殿(平安)		◎								
	興福寺中金堂		◎								
	石清水八幡宮							○	○		
備前	賞田廃寺		◎								
	幡多廬寺		◎								
讃岐	開法寺跡	◎	◎				○				
阿波	国分寺跡	◎	◎				○				
	国分尼寺跡	◎	◎			○		○			

◎出土した凝灰岩に比定される石切場

○出土した凝灰岩と共通性がある

香川県さぬき市『讃岐の白色凝灰岩』が、古代社会の地方寺院で壇上積基壇の石材として用いられた。讃岐はもとより、はるばる畿内や備前、阿波まで搬送されたのは火山の凝灰岩がいかに注目され貴重視されたかが窺われる所以である（表6）。

おわりに

香川県東部火山を中心とした採石場の白色凝灰岩は、奈良時代前期から古代寺院などの壇上積基壇の化粧石として注目されていた。平安時代の律令の施行規則を決めた『延喜式』や貴族の記録である『長秋記』などから遙々都など畿内の大極殿や離宮、有力寺院へ運上・搬送されていたことが記録されている。このことは、最近の発掘調査から出土した石造遺物が讃岐東部の白色凝灰岩の石質に比定されることからも実証されるのである。

讃岐東部の白色凝灰岩の石質は、特有な純白性を示すだけでなく、含有する黒色のガラス質や暗赤色の安山岩の小粒石片などの種類や量の多少によっても他地域の凝灰岩との判別が可能である。この白色凝灰岩は、地方の国府と関係する寺院や国分寺などへも搬送されていたことが明らかになっている。国史跡指定である岡山市の賀田廃寺跡から出土した東西の塔跡の壇上積基壇の化粧石も、香川県さぬき市火山の4種類の凝灰岩のうち大粒の黒色ガラス質を含む「B型」を多く用いていることが判明した。坂出市の開法寺跡の壇上積基壇が「火山A型」と分類した純白の凝灰岩に拘り用いているのと比較され興味深い。

『讃岐の凝灰岩』についての研究は途についたばかりである。しかし若い研究者を中心に多角的・意欲的に取り組む姿勢が整いつつあるのが現状である。今後岩相や石質の観察を一層深めるとともに、自然科学的な検証を取り入れさらなる成果を期す心算である。

小稿をまとめるにあたって貴重なご指導・教示を賜った岡山市埋蔵文化財センターの根本修所長・扇崎由氏、愛媛大学理学部皆川鉄雄先生に厚くお礼申し上げます。

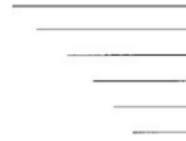
文献・資料や情報収集にあたりご教示頂いた、多くの皆様方のご芳名を錄し感謝とさせて頂きます。
奈良・興福寺 京都市立埋蔵文化財研究所 馬場 基 藤井直正 川畑 迪 六車恵一 前田義明 大塚活美 岡田浩司（順不同・敬称略）

注

- (1) 六車恵一・遠藤 亮 2002 『讃岐の凝灰岩採石遺跡』 香川県文化財保護研究会報 平成13年度特別号
- (2) 遠藤 亮 2003 『さぬき市志度町 大串石切遣跡』 「香川史学」 第30号
- (3) 遠藤 亮 2003 『さぬき市志度町 大串石切遣跡』 「香川史学」 第30号
- (4) 遠藤 亮 2003 『さぬき市志度町 大串石切遣跡』 「香川史学」 第30号
- (5) 川勝政太郎 1957 『日本石材工芸史』 総芸舎
- (6) 松田朝由 2002 『生駒家歴代当主の墓にみる五輪塔の変遷』
- (7) 奈良国立文化財研究所 2001 『興福寺第1期境内整備事業4年次 中金堂発掘調査』
- (8) 奥田 尚 2002 『石の考古学』 学生社 京都文化博物館での保管のことが記載されている。
- (9) 長宗繁一・鈴木久男 1994 『鳥羽殿』 『平安提要』 角川書店

- (10) 田中健次ほか 1997 『香川県の歴史』 県史37 山川出版社
- (11) 岡山市教育委員会 1971 『賞田廃寺発掘調査報告』
- (12) 川畠迪・松本豊胤 1970 「開法寺跡」『仏教藝術』26号 毎日新聞社

図版





軒丸瓦 1類



軒丸瓦 2 A類



2 様式 軒丸瓦・軒平瓦



3 様式 軒丸瓦・軒平瓦



4 様式 軒丸瓦



5 様式 軒丸瓦・軒平瓦



「上道」線刻丸瓦



遺跡周辺空撮（昭和48年）